

# アレクサンドリアのクレメンス 『プロトレプティコス』（『ギリシア人への勧告』）

— 全訳 —

秋 山 学

## 序

初期ギリシア教父の一人、アレクサンドリアのクレメンス（150－215）は、正統グノーシス主義の立場に立った神学者として、初期キリスト教教義史のなかで異彩を放っている。

クレメンスの著作の中でも、本稿にその全訳を収録する『プロトレプティコス』（『ギリシア人への勧告』）は、古代ギリシアの異教信仰の内実を暴き、到来したロゴスの許なる救いに向けて古典ギリシア人を勧告する、という内容を持つ。古典ギリシアの文学・哲学作品からの引用と、古代神話への細部にわたる参照が頻出するため、いわゆる「教父」の神学作品としてはきわめてユニークな色彩を帯びている。現代世界では、前世紀の初期から中盤にかけ、第2ヴァティカン公会議（1962－1965）を主導した典礼改革運動の先駆、古典言語学者オド・カーゼル（1886－1948）による秘儀神学の主著『秘儀と秘義』（遺作、1960年；邦訳は小柳義夫訳、みすず書房刊、1975年）の基調を成していることで知られる。

筆者は、もう随分以前に、教文館刊行の叢書『キリスト教教父著作集』（荒井献・水垣渉監修）のうち、アレクサンドリアのクレメンスに当てられている2巻分の担当（翻訳・解説）を依頼された（予定では全22巻中の第4、第5巻）。ハンガリー関係の拙著（『ハンガリーのギリシア・カトリック教会』、創文社刊、2010年予定）の執筆を優先させたため、訳出作業は遅々として進んでいなかったが、このたび拙著上梓のメドが立ち、ようやく訳業に全力を注げる状況が訪れた。これからしばらくの間は、本学の紀要を訳文発表のための最初の場として使わせていただき、『プロトレプティコス』より始めて『パイダゴゴス』（『訓導者』、以上上掲叢書第5巻所収予定）、そして主著の『ストロマテイス』（『論考集成』、第4巻所収予定）の全訳完成に向けて、自らのペースを作り上げて

ゆきたいと考えている。

上に記したクレメンスによる各作品の概要は、これまで折に触れて発表してきた拙稿に記されている（拙著『教父と古典解釈—予型論の射程—』、創文社、2001.2；拙稿「アレクサンドリアのクレメンスにおける「覚知者」(gnostikos)の本質」(『エイコーン—東方キリスト教研究—』第28号34—51頁、新世社、2003年12月)、「アレクサンドリアのクレメンスにおける「訓導者」(paidagogos)の意義」(『パトリスティカー教父研究—』第9号112—127頁、新世社、2005年3月などを参照されたい)。本稿では早速『プロトレプティコス』の訳文に入ることにしよう。本作品は、クレメンスによる別作品『救われる富者は誰か』とともに、ロエブ古典叢書のゆうに1巻分を占める分量を持つ。本作品に注釈を施す際には、神学関係の概念・用語ばかりでなく、ギリシア神話や文学・哲学関係の事項に関して膨大なものが必要と考えられ、もちろん上記叢書の刊行時には詳細なものを予定しているが、今回は紙幅の都合もあり、すべて割愛することにした。

拙訳に際しては、底本として、シュテーターリン校訂による『ギリシア語教会作家集』叢書に収められたクレメンス全集の第1巻(1905年刊)を用い、ミーニュ版のラテン語訳、それに最新のハンガリー語訳(ford. Tóth Vencel, *Alexandriai Kelemen, Protreptikosz: Buzdítás a görögökhöz*, Budapest 2006)とイタリア語訳(tr. M. Galloni, *Clemente Alessandrino: Il Protreptico*, Roma 1991)のほか、伝統ある仏訳(tr. C. Mondésert, *Sources Chrétiennes* tom.2; Paris 1976, 3me ed.) および英訳(tr. G.W. Butterworth, *Loeb Classical Library* no.92; Cambridge Mass./London 1919)を適宜参照した。

## アレクサンドリアのクレメンス 『プロトレプティコス』(『ギリシア人への勧告』)

### I. 異教の神秘を刷新する新しい歌。

#### § 1-10

1.1) テバイの人アンフィオンとメテュムナの人アリオンは、二人とも歌人であった。二人とも神話上の人物であるが、その歌は今日でもなおギリシア人のコロスによって歌われている。その歌の才によって、後者は魚を招き寄せ、前者はテバイの城壁を建てたと言われる。また他のトラキアの知恵者〔オルフェウス〕は—これもまた別のギリシア神話であるが—歌のみによって獣を手なず



け、木々や樅を音楽によって移植したと言われる。2) わたしは他にも、これと同種の神話や歌人を述べるができる。例えばロクリスの人エウノモスやピュティアの蟬の話である。ピウトでは大蛇が滅ぼされたことを記念して全ギリシア的祝祭が催され、大蛇の葬歌をエウノモスが歌った。その歌が蛇に対する賛辞であったのか哀歌であったのか、私は言いかねる。だが競演の折に、蟬が丘の上で太陽に熱せられ、木の葉の陰で歌を歌っていた暑い盛りに、エウノモスはキタラを奏でた。蟬はもちろん、死んだピウトの大蛇のためにではなく、全智の神のために自然な、エウノモスの調べよりも優れた歌を歌っていたのだ。ロクリス人の弦は切れた。蟬は弦の軀を凌駕して飛翔する。すなわち枝の上で、あたかも小枝を楽器のようにして奏でる。そしてかの歌人は、その蟬の歌にあわせて切れた弦を補った。3) つまり蟬は、神話が望むようにエウノモスの歌に導かれたわけではなく、ピウトに、かのキタラによって、エウノモスの銅像と、このロクリスの人の競演者を建てたのである。蟬は自ら飛翔し、自ら歌ったのだが、ギリシア人にとっては、蟬は音楽の演技者と映ったのである。

2.1) いったいあなた方はどうして、生物が音楽によって魅了されたなどと考え、このような虚しい神話を信じるのか。なぜ真理のかんばせは、あなた方にとって言わば輝ける作り物に過ぎず、不信の目の許に眩まされてしまうのか。実に、キタイロンやヘリコン、オドリュシアやトラキアの山々は、迷妄の入信の場として、偽の神秘によって聖とされ、崇められている。2) しかるにわたしとしては、たとえ神話であろうと、これら悲劇に取り入れられる甚だしい災厄に心傷める。あなた方の許では、諸悪の記録が芝居になり、芝居の俳優が歓喜の光景となるのだ。というのも、芝居やディオニュソス讃歌を歌う詩人たちに対しては、まったく酔った者のようであり、バッコスの儀式で場所もわきまえず、サテュロス賛歌さらには他の神々の合唱隊をも加えて狂喜乱舞する彼らを薦の冠で祝す。むしろわれわれは、年老いたヘリコンやキタイロンには扉を閉ざし、上は天より、真理を明瞭な思慮とともに神の聖なる山、預言者の聖なる合唱隊に降臨させようではないか。3) そしてその真理が、いかに遠方からであろうとも輝きを放ち、到るところで闇にのたうつ者たちの蒙を啓き、至高の右の手を伸ばして迷妄から人間を解放し、知慮を救いのために用いさせてくれるように。彼らはヘリコンを拒んで肯ぜず、キタイロンを去ってシオンに住まうであろう。「なぜなら律法はシオンから、主の言葉はイエルサレムより発する」（イザヤ2,3）。この「言葉」とは天の言葉であり、全宇宙を舞台に栄冠を受けた真なる競技者なのだ。4) 実にわがエウノモスは、テルパンド

ロスの方法でもケピオンの掟でもなく、はたまたフリュギアやリュディアやドリスの則でもなく、新たな調和の新しき法、神の名を担う調べ、新しき歌、レビ人の歌を歌う。その調べは「痛みを和らげ怒りを鎮め、あらゆる災いを忘れさせる」（ホメロス『オデュッセイア』4.221）歌である。この調べには、甘美で真なる説得の妙薬が含まれている。

3.1）さて私には、かのトラキアのオルフェウス、あるいはテバイやメテュムナの歌人は、人にあらざる人だと思われる。彼らは偽りの存在と化し、音曲のゆえに人生を害い、技を秘めた魔術で鬼神を帯びたがゆえに破滅に陥り、倨傲を生贄とし、哀しみを神格化し、人々を偶像へと導いた最初の人々であり、実際石や木々によって、すなわち立像や画像を用いて、虚しき習慣を打ち立て、天の下に住まう者どもの実に麗しきあの自由を、歌と音曲によって隷属のきわみへと繋いだのである。

2）しかしながらわが歌人は、そのような者ではない。彼は暴君たる鬼神への苦き隷従をすみやかに解き放つべく来たる。そして、敬神の柔和で慈愛に満ちたくびきを通して、地に投げ棄てられていたわれわれを、再び天へと招くのである。4.1）彼は、これまでに生きた人間のうちただ一人、最も扱いにくい野獣である人間を馴らした。すなわち、そのうち軽いものは鳥に、ごろつきは這うものに、怒りっぽいものは獅子に、快樂主義のものは豚に、略奪をこととするものは狼に、そして思慮にかけけるものは石や木にしたのである。さらに、石よりも無感覚な人間は無知の洗礼を受けた。2）われわれのために、預言の声を証人として提示しよう。それは真理と声を合わせる者であり、無知と無思慮に打ちひしがれた者たちを憐れむ声である。〈神はこれらの石からさえも、アブラハムの子を起こすことができるのだ〉（マタイ3,9）。彼は甚大なる過ちと、真理に向けて頑なになった者たちの心の様を憐れみ、神を敬う徳の種を、かの石、石に信を置く国民から感じ取る。3）はたまた彼は、いわば有毒にして倒錯し、正義に罟を仕掛ける偽善者たちを、〈マムシの子ら〉（マタイ3,7）と呼んでいる。だがその際に、もし進んで〈蛇〉を想起する者があるなら、彼は御言葉に従って「神の子」となり、他の羊毛をまとった者たちを〈狼〉と比喩的に表現している。これは人間の姿をした略奪をこととする者どもを暗示したものである。これらすべてはいとも獐猛なる獣たちで、天上的な歌は、これらの石を、文明智を持つ人間たちに変容させるのである。4）というのも、〈わたしたち自身もかつては、無分別で、不従順で、道に迷い、種々の情欲と快樂に隷属し、悪意とねたみのうちに暮らし、忌み嫌われ、互いを憎んでいた〉（ティ

トス 3, 3-5) と使徒の書は述べている。5) 〈しかし、われわれの救い主である神の慈しみと、人間愛とが現れたとき、神は、われわれが行った義の業によってではなく、自らの憐れみによって、われわれを救われた〉。この新しき歌がどれほどの力を有するか、見るがよい。彼は人間を石から、人間を野獣から創造された。しかるに人間は、虚しくも亡者で、真に存在する生命に与らぬ者、この歌の単なる聴取者となって生き続けた。5.1) 彼はこれを、またすべてを調和の取れた姿に装飾し、諸要素の相違を調和ある秩序に整え、それによって全宇宙が調和をなすようにした。海は解かれた状態に留め、大地に対しては、海に乗り上がるのを禁じた。逆に大地に対しては、浮かび揺れていたのを固着させ、海による境界を大地に対して定めた。一方、ちょうどドリャ風の調和をリュディア風の調べと混ぜるように、火の勢いを大気で和らげ、また大気の粗野な冷たさに、火を織り交ぜることで馴らし、全体の中で極限の響きを、調和の取れた形に織り交ぜたのである。2) というのも、この汚れなき歌は、万物の支えかつすべての調和であり、中央から端まで、頂上から中央まで伸び、すべてを調和させる。トラキアの音楽によってではなく、同様のユバルの調べによってでもなく、ダヴィドが称賛した神の父なる意図に従う。3) しかるにダヴィドの裔にしてダヴィド以前から〈在る方〉、神の御言葉は、リュラやキタラなど無生物の楽器を看過し、この宇宙、なかならず小宇宙である人間、その靈魂と肉体を聖霊と調和させ、神にあわせ多声の楽器でもって奏で、楽器たる人間に歌い掛けたのである。〈あなたはわがキタラ、わが笛、わが神殿〉。キタラとは調和により、笛とは息吹により、神殿とは御言葉による。つまり、織り成し、吹き込み、主を受け入れるためのものである。4) 実際、ダヴィド王はキタラ奏者でもあり、彼については上に少しく言及したが、真理に向けて勧告し、偶像から離反させ、真の音楽に追われた奇神を自らが讃美することからは遠く離れた。この奇神がサウルに働きかけたとき、ダヴィドが歌うことによってのみ、サウルを救うことができた。主は息吹を送る麗しき楽器であり、人間を自らの似像に作り上げる。もちろん主自身も神のいとも調和ある楽器であり、調べ麗しく聖であり、超宇宙的な智慧、天上的なロゴスなのである。

6.1) ではいったい、この楽器、神の御言葉、主、新しき歌とは、何を意味しているのであろうか。それは、盲目の人の目を開かせ、耳の聴こえぬ人の耳を開き、足の不自由な人、正義に向かって彷徨っている人を手引きし、愚かな人々に神を示し、破滅を止めさせ、死に打ち勝ち、不従順な子らを父と和解させることである。2) 神の機構は人間愛に満ちている。主は憐れみ、教育し、

勧告し、掟を定め、救い、守り、われわれに対し、富から転じて天の王国を教え、学びの代価を告げて、われらが救われることだけが、われらに発する実りであることを伝えた。なぜなら悪は人の破滅を育むのに対し、真理は蜂のごとくに、存在物を凌辱することなどせず、ただ人間の救いのみに喜ぶからである。3) かくして、あなたは約束を手にし、人間愛を手に行っている。愛のうちに与かるがよい。しかもわが救いの歌を、器や家屋のような意味で「新しい」とは考えないでいただきたい。なぜならこの歌は〈明けの明星よりも先に〉(詩篇109,3)あり、〈はじめに御言葉があった。御言葉は神とともにあった。御言葉は神であった〉(ヨハネ1,1)のである。迷妄は古にさかのぼるが、真理は新しく映る。4) 神話では山羊がいにしえのフリュギア人を教えたと言われ(ヘロドトス『歴史』2,2)、詩人たちはアルカディア人たちを〈月よりも古い〉と呼び、またエジプト人たちは、自分たちの土地こそ最初に現れた土地であり、神々また人間がそこに生まれたのだと夢想する。だがこれらの民族のどれひとつとして、この世界よりも前にあったものはない。しかるにわれわれはこの世界創成よりも先にあった。神のうちにあるように定められたことにより、先んじて神により生まれた。われわれは、神の御言葉の、ロゴスによる被造物だからである。このロゴスによって、われわれは初めから存在する。なぜなら〈はじめに御言葉があった〉(ヨハネ1,1)からである。5) だがこの御言葉は上より来たるものであり、万物の神的な端緒であったし、現にそうである。そしてかつて聖化された名を今、帯びている。それは力に値する名、キリストである。これこそわたしが「新しき歌」と呼んだものである。

7.1) このロゴス、かのキリストこそ、およそわれわれが存在する上での(というのもロゴスは神のうちにあったからだ)、しかも善く存在する上での原因者なのだ。いまや、この御言葉自身が、人間の許に現れた。この方のみが、神にして人、その両方であり、われわれにとってすべての善の原因なのである。このキリストの許で、われわれは永遠の生命に向けて善く生きるように勧告されている。2) というのも神の息吹をうけた主の使徒によれば、〈神による救いの恵みがすべての人間に現れた。その恵みは、わたしたちが不信心と現世的な欲望を棄てて、この世で思慮深く、正しく、信心深く生活するように教え、また祝福に満ちた希望、すなわち偉大なる神にしてわれわれの救い主であるイエス・キリストの栄光の現れを待ち望むように教えている〉(ティトス2,11-13)。3) これこそ「新しき歌」なのであり、いま、われわれのうちに輝き出でた、初めにあり先在するロゴスの顕現なのである。たった今、先在の救い主

が現れた。「在る者」のうちにある方が現れた。なぜなら〈御言葉は神とともにあった〉(ヨハネ1, 1) からである。この方は師であり、それによって万物が創造されたロゴスとして現れ、創造者として、初めに創造するとともに生きることを可能にし、師として現れ出でて善く生きることを教えたのである。それは、後に神が導くとき、永遠に生きることができたためであった。4) このことは、今初めてわれわれに対し、その遍歴を憐れんでいるのではなく、初めより上から、今やすでに崩壊した者どもを明白に救った。というのも、悪しく這う誘惑の獣が、わたしの考えでは、今日でもなお、人間たちを隷属させているように思える。それらは異邦人のような仕方では復讐を行うが、それは彼ら人間が、囚われ者として、死に体同然だといわれ、彼らもともに朽ち果てるまで続く。5) 実に、このように悪しき僭主にして龍には、彼らをその誕生の時点からおのがものとするのが可能であったのだ。それは石、木、彫像、また何かその類の偶像を、迷信の憐れな縄として用い、呪縛することによる。これこそ上で述べたことの意味であり、彼らがともに腐敗するまで、生けるままに運び去って埋葬してしまう。6) このためにこそ(というのも一匹の誘惑者が天上よりエヴァを誑かしたが、今ではすでに、他の人間をも死へと定めている)、われわれにとって一人の助け手にして守り手、主である方が、最初から預言的に告知していたが、今ではすでに明白に、救いに向けて招いている。8.1) だからわれわれは、使徒の教えに信頼し、〈大気に対する権能の長、不従順の子らのうちに今も働く霊の長〉(エフェソ2, 2) から逃れよう。そして主なる救い主のもとに走ろう。主は今もいつも、救いに向けて勧告し、それはエジプトにおいては怪奇やしるしを通し、砂漠にあっては〈柴〉や、それに続いて人間愛という恵みにより、女僕のようにユダヤ人に益する雲を通して行われた。2) 主はこれらに対する恐れを通じて、心頑なな者どもに勧告したのである。すでに、いとも智恵あるモーセ、人間愛に満ちたイザヤ、すべての預言者たちの群れを通して、耳を持つ者たちに対してはよりロゴスに適うかたちで御言葉へと向けしめたのである。あるところでは罵倒を用い、あるところでは威嚇もする。またある人々に対しては嘆きの声を挙げ、別の人には歌って聞かせる。その様はちょうど、優れた医者が病める人々の肉体の、一部は漆喰で固め、一部はすりつぶし、一部は注ぎ出し、一部は鉄材で切り、別の部分は燃やし、また鋸で切るのに似ている。それは、部分的ないし部位によってその人が健康でありうる場合、そちらを重んじるためである。3) 実にこの救い主は、人間の救いに関して多声であり多様である。威嚇しつつ法を定め、罵倒しつつ回心さ

せる。奏でながら招き寄せる。柴を通して語りかけたり（彼らもまた徴と驚異を望んだのだ）、火を通じて人間たちに脅えさせたり、火の柱に炎を挿したりした。これは恵みと恐れのとともなる徴である。もし聴き従うなら光、聞き従わぬなら火である。しかし柱や柴よりも肉のほうが高貴であるので、その後預言者たちは、呼ばれることになった。イザヤのうちに主ご自身が語り、エリヤにあってもそうであった。預言者の口に主がおられたのである。4）だがもしあなたが預言者を信じず、人々や火を神話だと受け取るのであれば、主が自らこう語る。〈主は神の姿のうちにありながら、神と等しくあることを得策とは考えず、自らを虚しくされた〉（フィリピ2,6-7）。それは神が憐れみ深い方であり、人間を救うことを切望しているからである。そしてこのロゴス自身が、はっきりとした仕方で汝に語りかけ、不信仰を赤面させるのだ。そう、一体いかにして人間が神となれるかを、汝もまた人間から学び取ることができるように、神のロゴスが人となったのである。

9.1）おお友よ、神がわれわれを常に徳に向けて勧告するのに対して、われわれはその益を拒み、救いを拒否するというのは、いかに不条理なのではないか。というのも、ヨハネもまた救いに向けて招き、勧告的な声となり尽くしているではないか。かの声に聴くことにしよう。〈あなたは誰で、どこから来たのか？〉（『オデュッセイア』19,105）。彼は自分がエリヤだとは言わず、キリストであるかどうかについては否定した。だが、荒れ野に叫ぶ声であることについては認めた。ではいったいヨハネとは誰であるのか。予型を用いて述べるなら、荒れ野に叫ぶ、御言葉の勧告的な声であるということができよう。では声よ、あなたは何を叫ぶのか。〈われわれにも語れ〉（『オデュッセイア』1,10）。〈あなた方は主の道を真っ直ぐにせよ〉（『イザヤ書』40,3）。2）先駆者ヨハネ、御言葉の先駆的な声、勧告の声、救いに向けて備え、天の嗣業に向けて勧める声である。この声によって不妊の女性と荒野とが、もはや種なきものではなくなった。天使の声が、この懐妊を予言した。この声は、ちょうどヨハネが荒野で福音を告げたように、不妊の女性への福音を告げ、主の先駆ともなった。3）御言葉に対するこの声によって、不妊の女性が子に恵まれ、荒野が実りを得たのである。主の先駆となる声は二つ、天使とヨハネによるものである。こうして彼らは、そこに秘められた救いを暗示するものとなった。その御言葉が顕れたとき、われわれは子に恵まれたことの実りを得ることになった。それは永遠の生命である。4）実に、これら二つの声が、同じ一つの目的に導くということを、聖書はすべてにおいて明らかにしている。〈子を産まぬ

女よ、聞くがよい。陣痛を経験したことのない女よ、声を挙げよ。夫を持つ女よりも子を持たぬ女のほうが、子を多く持つことになる(イザヤ54, 1)。われわれには天使が福音を告げ知らせた。われわれに対しては、ヨハネが農夫を思い、夫を求めるように勧告した。5) というのもかの一人の同じ男、不妊の女性から生まれた男、荒野の耕し手、神の力を備えた男〔洗礼者ヨハネ〕が、不妊の女性をも、荒野をも満たしたのである。というのも、良き生まれの女性に子は多かったが、元来多産であるユダヤの女性が、不従順により子を産まず、その不妊の女性が男児を得、荒野が耕し手を得たのである。しかる後、後者は実りを得、前者は信を得て、双方ともがロゴスにより母となった。今日でもなお、不信なる者どもには不妊と不毛とが遺されている。10. 1) まず、ロゴスの告げ手であるヨハネは、このような仕方では、神なるキリストの到来に備えるよう招いた。これこそ、ザカリヤスにおける沈黙が暗示している事柄である。つまり彼は、キリストの先駆者、すなわち実りを待ち望み、真理の光、ロゴスが、預言的な謎から神秘の沈黙を解放し、福音となってくれるように待ったのである。2) だがもしあなたが真に神を見たいと欲するのであれば、神に相応しき浄めに与かるがよい。月桂樹の葉や、羊毛や紫貝で彩られた髪巻きではなく、正義をまとい、克己の葉を身に帯びて、キリストを探求するがよい。〈わたしは門である〉(ヨハネ10, 9) とキリストはある箇所述べている。神を想うことを望むものは、この門について学び尽くすことが必要で、それはキリストが天の門をわれわれに開け放ってくれんがためである。3) というのも御言葉の門はロゴスに満ちており、信の鍵によって開かれる。〈神を見た者は、御子と、御子が啓示する者を除いては、誰もいない〉(マタイ11, 27)。しかるに門とは、それを開ける人が、後に内陣のありさまを説き明かし、それまでは知ることのできなかったものを、キリストを通して歩む人に示してくれるまでは、閉ざされた状態にあるということをわたしは知っている。神はキリストただひとりによって観照されるのである。

## II. 異教の神秘と神話における愚劣と不敬。

### § 11-41

11. 1) であるから、神の存在しない至聖所や、驚異に満ちた地の裂け目、あるいはテスプロートイの大釜、キッライの鼎、ドドネの青銅などのことをとやかく穿鑿すべきではない。砂に覆われた荒野で崇敬されている古樹木や、そ

の樹木そのものとともに死に絶えた託宣を、あなた方は古くなった神話に遺してきた。カスターアの泉や、別のコロフォンの泉はもう沈黙している。預言と関わる他の泉も、同様に死に絶えてしまった。実に、墓の虚しき事柄は昔からあるが、それでもそれぞれの神話とともに死に絶え、論破され終えている。2) われわれに他の預言、あるいはむしろ狂言の、無益な託宣を説明して欲しい。クラリオス、ピュティア、ディデュモス、アンフィアラオス、アポッロン、アンフィロコス、さらにはあなたが望むなら、預言の解説者、鳥占い、夢の判断者をこれらに加えてもよい。さらには同じピュティアに、香りの嗅ぎ分け手、麦占い、さらには多くの人々から崇敬を集めている臓物占いを連れて来て、立たせるがよい。そう、エジプトの至聖所やテュレニアの霊媒は闇に委ねるがよい。3) これら狂言は、真に、不信なる人々の詭弁であり、紛れもなき迷妄のギャンブル・ハウスなのである。この魔術に付き従う山羊は、預言のために訓練され、鳥は人間に用いられるべく人間によって教育されているのだ。

12.1) では、あなたに秘儀を列挙すればどうだろうか。アルキピアデスがそうしたと言われるように、それで裏切り行為を働くのではなく、むしろ真理のロゴスに基づいて、それらの秘儀のうちに隠されている魔術と、あなた方の〈神々〉と呼ばれ神秘的な儀礼の伴う存在を明らかにすることになるだろう。ちょうど、人生という舞台の上で、真理の観客に回り舞台を提示するように。2) まずバッコスの信女たちは、怒濤のディオニュソスを祀りつつ、生肉食らいにより狂乱の儀を演じて、殺戮による肉分ちを行って蛇の冠をかぶり、〈エウアイ、エウアイ〉と勝どきを挙げる。この叫び声を通して迷妄が伴うのだ。そしてこのバッコスの狂乱の徴は、奉納される蛇である。まさしく、ヘブライ語の正確な語義に従えば、ヘヴィアとは白髪で、雌の蛇だと解されるからである。デオとコレはすでに神秘的劇となったが、迷妄、略奪、嘆きそのものをエレウシスの秘儀は寿ぐからである。

13.1) 一方わたしには、この狂乱と神秘の語源解釈をする必要があるように思われる。つまり後者はゼウスのものとなったデオの狂乱により、前者はディオニュソスをめぐって生じた穢れ (mysos) による。だがもし、アッティカの人ミュオーンに発する、とするのがよければ (彼に関しては、アポッロドロスが〈狩りのさなかに死んでしまった〉と証言しているが)、妬む気持ちはまったくない。あなたがたの秘儀については、墓への崇敬によって営れが与えられている。2) だがあなたには別の仕方で、文字の配列を変え、秘儀 (mysteria) を〈伝承〉 (mytheria) と考えることもできよう。他にも狩りをする神話はあ



るのだ。たとえばトラキア人たちの中で最も異邦人風の者、フリュギア人の中で最も思慮に欠けた者、ギリシア人の中で迷信に取り付かれた者の神話がそれである。3) 人間たちにとって、これらの迷妄の端緒となった者は身を破滅させる。神々の母の秘儀を公にしたダルダノスであれ、サモトラケの人々の狂喜乱舞と儀礼を盗み見たエエティオンであれ、オドリュソスから学び知り、その後配下の者たちに、人為的な迷妄を植えつけたフリュギア王ミダスであれ、身を破滅させている。4) キュプロス島の断食者キニュラスは、彼女がアフロディテによる放埒の秘儀を夜から白日の下に敢えてさらそうとし、裸の女神を見ようと欲したとき、わたしを納得させなかったであろう。5) 一方他の人々は、アミュタオンの子メランプスが、エジプトからギリシアにデオの祭礼を、その嘆きを讀めるために持ち来たと述べている。わたしとしては、これらの事柄を、無神論的な神話の悪の根源、破滅の迷信の父、人生に秘儀を植え付ける悪と破滅の種、と呼んでみたい。

14.1) ではいまや、時宜に適ってもいるので、迷妄と怪異に満ちたあなた方の生贄の儀礼を吟味してみることにしよう。たとえばあなた方が秘儀伝授を受けているにせよ、これらあなた方が崇敬している話には、さぞ笑いを禁じえないことであろう。わたしは隠された事柄を語り、あなた方が恥ずかしげもなく屈拝している事柄を、臆すことなく語ろう。2) まず、〈泡生まれの〉とか〈キュプロス生まれの〉といわれる女神は、キニュラスに愛を抱いた。わたしが言っているのはアフロディテのことで、彼女は微笑みの姿で現れ、ここから彼女は「微笑みを愛でる」(filomedeia)と形容されるが、実はこれはウラノスの性器(medeus), すなわち放埒を切り落としたときに、この切断が波を引き起こし、彼女が生まれたことに由来する。こうしてあなた方には、彼女が放埒の部位の実りとして生じたのであって、彼女のために執り行われる海の快楽の儀礼にあっては、誕生の徴として塩の塊と男根像が、性通の技巧を暗黙する者たちに手渡されるのである。この暗黙する者たちは、ちょうど愛人がヘタイラにそうするように、彼女に賤貨を貢ぐ。15.1) 一方、デオの神秘、ゼウスによってなされた母デメテルとの情事、デオの(その他、わたしはどう言えばよいのかわからない、母のといおうか、妻のといおうか)怒り—そのためにプリモが呼び出されたと言われている—、それにゼウスの嘆願、胆汁の飲み物、心臓血抜き、語りえないほどの蛮行がある。これらと同じことを、フリュギア人たちはアッティス、キュベレ、コリュバスのために執り行っている。2) フリュギア人たちは、次のように語っている。それによると、ゼウスは羊の睪丸を切り

離し、それを携えてデオの胎内に投じたが、この恣意的な交合の偽りの処罰を果たすかたちで、ついに自らも去勢したという。3) この秘儀の信条が人口に膾炙したが、それは笑いを誘うものの、彼らはあなた方の笑いを誘って反発を受けたくないとしている。それは〈わたしは太鼓から食べた。わたしはシンバルから飲んだ。わたしは壺を運んだ。寝屋にもぐりこんだ〉というものである。この信条は、倨傲ではないのか。この秘儀は冗談ではないのか。16.1) なにゆえ、これ以外の事柄をさらに付け加えることをしようか。デメテルは懷妊し、コレが育ち、このように子を儲けたゼウスが再度フェレファッタ、実の娘と、母親のデオの後で交わったのだ、かつての穢れを忘れて。そして龍となったが、実は誰であるのかが明らかにされてしまった。2) 実に、サバズィオスの人々の秘儀の信条は、秘儀伝授を受ける人々に、懷を通じての神というかたちで示される。それは龍であり、秘儀を受けるものの懷に這いより、ゼウスの放埒が証左である。3) こちらのフェレファッタ〔ペルセポネ〕も、雄牛の姿をした子を懷妊する。言うまでもなく、ある偶像崇拜的な詩人がこう歌っている。

「雄牛が龍から生まれ、龍が雄牛の父となった。

山の中の神秘とは、牧夫よ、それは突き棒」

(フィルミウス・マテルヌス『誤謬について』26, 1)

わたしが思うに、ここで〈牧夫の突き棒〉と呼ばれているのは、大ウイキョウのことであろう。パッコス信徒らは、これを髪飾りとするのである。17. 1) あなたは望むであろうか、わたしがフェレファッタの詞華集をあなたに解説し、籠、アイドネウスによる略奪、大地の裂け目、女神たちに思いを寄せたエウブレウスの豚ども、そのためにテスモフォリアの祭りではメガラの方言で子豚を投げ合うことのわけを説明することを。この神話をめぐって、婦人たちは町じゅうでさまざまに祭りをを行い、それはテスモフォリア祭、スキロフォリア祭、アットフォリア祭であり、彼女たちはさまざまな仕方ではフェレファッタの略奪を悲劇化してみせるのである。2) ディオニュソスの秘儀は、まったくもって非人間的である。彼がまだ子供であったころ、武具を身に付けたクレテス人たちが一斉に取り囲み、ティタン族が術策に陥れ、彼を子供じみた玩具でだまし、そのティタン族がまだ幼い子供であった神を八つ裂きにした。それはこの秘儀の詩人でトラキアの人オルフェウスが述べているとおりである。

「松ぼっくり、輪っか、操り人形、

甘い声のヘスペリア人のもとにある、黄金の美しいリング」

(オルフェウス断片196, 200)。

18.1) そしてこの秘儀の象徴は、有益ではないにしても、認識のためには提示して有益であろう。「サイコロ、螺旋、ボール、リング、松ぼっくり、鏡、羊毛」。アテナはディオニュソスの心臓を手に入れたので、心臓が鼓動する(pallein)というところから〈パッラス〉と名づけられるようになった。一方ティタン族は、ディオニュソスの体を切り裂き、鍋を三脚台にのせ、ディオニュソスの四肢をその鍋に入れ、まず煮た。しかる後、串棒で刺し貫き、〈ヘファイストスにくべた〉。2) 一方ゼウスが後に姿を現し（もし彼が神であるなら、おそらく焼肉の香りをかいだのであろう、まさしくあなた方の神々が〈褒賞に与かる〉と認めているように）、雷電でティタン族を懲罰し、ディオニュソスの四肢を子供のアポロンに、埋葬するよう委ねる。しかるにアポロンはゼウスに従わず、パルナッソス山に運び、引き裂かれた亡骸を供えたのである。

19.1) もしあなたが、コリュバンテスたちの狂気を目にしたいと望むのであれば、彼らは三番目の兄弟を殺害し、亡骸の頭部を赤い衣を掛けて覆い、冠をかぶせ、青銅の楯に載せ、オリュンポス山の裾野に埋葬した。2) これがその秘儀であり、要するに殺戮と葬礼である。しかるにこの儀礼の祭司たちは、彼らの習慣によれば〈秘儀の主〉と呼ばれているが、この不幸に不可思議な性格を賦与し、根付きのセロリを食卓に置くことを禁じた。というのも、殺されたコリュバンテスの血から、セロリが生えてきたからだというのである。3) これは明らかに、テスモフォリア祭を祝う人々が、地面に落ちたザクロの種を食べることを戒めているのと同様である。彼らは、ディオニュソスの血の雫からザクロが芽生えたと考えているからである。4) コリュバンテスたちは、カベイロイとも呼ばれていて、その儀礼はカベイリケと名づけられている。かの二人の兄弟殺しが、ディオニュソスの恥部の入った籠を、テュッレニアへと持ち去り、有名な品の運び手となったからである。そこで彼らは話し合い、自分たちは逃亡者であるが、敬神の高貴な教え、恥部と籠とを、テュッレニア人たちに信奉するよう提示した。これが基となって、ある人々はディオニュソスを、恥部を切り取られたものという意味で〈アッティス〉と呼ぶことを望むのだ、とするのもいわれなきことではない。

20.1) さて、異邦人のテュレニア人たちが、かくも恥ずべき行為により秘儀伝授を受けているとしても、何の驚くことがあろうか。だが実はアテナイやそれ以外のギリシアでも、語るも躊躇されることだが、デオに関する神話は恥ずべきことに満ち満ちているのだ。というのもデオは、娘であるコレを探してエレウシスのあたりを徘徊し（この地域はアッティカに属す）、疲れ悲しん

で井戸に腰を下ろしたという。秘儀伝授を受けた者たちは、今に至るまでなお、これを語ることを禁じられている。儀礼を受ける者が、嘆く彼女を模倣していると思われなくようにするためだという。2) さて、土地の者がこの折エレウシスに住んでいた。彼らの名はパウボ、デュサウレス、トリプトレモス、さらにはエウモルポス、そしてエウブレウスで、トリプトレモスは牛飼い、エウモルポスは羊飼い、エウブレウスは豚飼いであった。ここからエウモルピデス、および託宣を受け持つケリュコスの族が生まれ、この一族がアテナイで栄えた。3) 実際（というのも述べていないと思われるのを避けるためだが）、パウボがデオを歓待し、小箱を彼女に示してみせた。彼女は手に取るのを拒み飲もうとしなかった（彼女は嘆きに入っていた）、パウボは大いに悲しんで、軽蔑されるとよいのかと考え、恥部を露わにし、惜しげもなく女神にさらした。するとデオは表情を和らげ、ほどなくして飲料を受け取った。その光景に喜んだのである。21. 1) これらこそ、アテナイ人たちの隠された神秘である。これらについては、オルフェウスもまた記している。わたしはあなたに、かのオルフェウス自身の詩句をお目にかけよう。この恥ずべき仕業の秘儀伝授者を、証人として有することができるように。

「彼女はこう言って、衣の裾を引き上げ、体のすべてを  
露わにした。相応しからざる部位すらも。だが子供のイアッコスが  
そこにいて、手で母親をつついた。子はパウボの懷の中で笑った。  
すると女神は微笑み、悲しみは消えた。  
そして輝く器を受け取った。そこにはキュケオンが入っていた」

（オルフェウス断片215）

2) また、エレウシスの神秘の約束事とは次のようなものである。〈わたしは断食した、キュケオンを飲み、小箱から取り出した。わたしは業をなして籠に戻し、籠から小箱に入れた〉。その光景は美しく、女神に適わしい。22. 1) かくしてこの儀礼は夜に相応しく、火、そして〈英雄〉に相応しい。あるいはむしろ、虚しきことに思いを馳せるエレクトイデスの民衆に適わしい。さらにはまた〈死してしまった者たちを、希望もないのに待ち続ける〉（ヘラクレイトス断片122）のような、他のギリシア人たちにも相応しい。2) エフェソスの人ヘラクレイトスとはどのような言葉で預言しているだろうか。〈夜間に放浪する者たち、魔術師、バッコスの信徒、バッカナルたち、秘儀伝授を受けた者たち〉、彼らにとって、死後の世界は念頭にない。彼らには火が預言するのだ。〈というのも人間たちによって神秘と考えられたものは、聖ならざる仕方

授されているのだ）。3）かくしてこの秘儀は、法であると同時に虚しき先入観である。龍の欺瞞がどのような宗教だと言うのだろうか。それは真ならざる秘儀なのであって、彼らはオルギアを伴わない儀礼を偽りの敬神でもって奉っているのだ。4）では、神秘の箱はどのようなものだろうか。ここで、彼らの聖式を暴き出し、語るべからざる事柄を述べ明かさねばならない。これらは胡麻、ピラミッド、糸車、ボツボツしたケーキ、塩玉、龍に過ぎない。これらがトラキアのディオニュソスの秘儀なのか。これらに加えて、ザクロ、イチジク、オオウイキョウにツタ、さらにはケーキに芥子なのか。これらが彼らの言う「秘儀」なのだ。5）さらに加えては、大地たるテミスの語るべからざる信条とは、ハーブ草、松明、短剣、女性の櫛である。これらは上品に、神秘的に言えば、女性の一部なのだ。6）おお、なんとも明白な羞恥心のなさよ。かつて、節慮ある人間にとって快楽の覆い物とは、沈黙の夜であった。いまや、秘儀伝授を受ける者にとって、無節度の試金石がドンちゃん騒ぎの夜なのだ。松明に灯された火が情動を吟味する。7）おお、聖なる儀礼を行うと称する者よ、火を消すがよい。松明をかざす者よ、松明の灯を畏れるがよい。光があなたのイアッコスに吟味してくれよう。神秘は夜が消すに任せるがよい。秘儀は闇に委ねよ。火は偽ることをしない。命じられたままに吟味し処罰してくれよう。

23.1）さてこれらが、〈無神者〉たちの秘儀である。彼らを〈無神者〉と呼ぶのが相応しいことは、彼らが真に存在する神を知らず、ティタン族によって引き裂かれた嬰兒と女兒を悼み、語られざる部分を真に羞恥の念から恥知らずにも崇敬しているからである。彼らは二重の無神論に取り付かれている。まず一つは、彼らが神を知らないという無神論である。彼らは真に〈在る〉方を神と認めない。もう一つ、二番目のものは、彼らがこの迷妄により、存在しないものを存在すると考え、これら真には存在しないもの、さらに言えば存在すらせず単にその名だけを得ているものを〈神〉と名づけているという無神論である。2）それゆえにかの使徒もまた、われわれを反駁してこう述べている。〈そのころは約束の契約とは無縁に、希望を持たずにこの世にあって神を知らずに生きていた〉（エフェソ2, 12）。

24.1）さて、それが誰であったにせよ、スキュティア人の王には幾多の善きことが備わっていた。この王は自らの市民が、キュズィコス人の許で神の母の秘儀を模倣してきて、スキュティア人の許で太鼓を叩き、シンバルを響かせ、首からぶら下げているのを見て、レア神の祭司のようだとして彼を射殺した。それは、彼がギリシア人の許にいる男らしくない男になってしまい、他のスキュ

ティア人にとって、女病の師となりそうだと考えたからである。2) このために（これは隠しておく必要がないからだが）、わたしは次のことに関して賛嘆したいと考える。すなわち、アクラガンティノンのエウエメロス、キュプロスのニコル、メロス島のディアゴラスとヒッポン、それに加えてキュレナイオイの人（その名はテオドロスであったか）、その他多くの人々が、賢明な生き方をし、他の人々よりも鋭い洞察を行い、これら神々に関する迷妄を〈無神論〉と呼んだことに対してである。彼らは真理そのものに想いを馳せてはおらず、単に迷妄に疑念を挟んでいただけであったにせよ、それは真理に向けての省察の小さからざる火種として生まれたのであった。3) 彼らのある者はエジプト人に近づき、〈もしあなた方がそれを神々と考えるのなら、嘆かせたり打ち叩いたりしてはいけない。もし彼らを嘆かせるのなら、もはや彼らが神々であるとは考えるなかれ〉（クセノファネス断片13）と言った。4) また別のある者は、木で作ったヘラクレスを取り出し（ありうることだが、おそらく家で煮物をしていたのだろう）、こう言った。〈えい、おおヘラクレス〉、〈今やあなたの出番だ。あなたがエウリュステウスに仕えたように、われわれにも奉仕し、この13番目の功業を果たして、ディアゴラスに煮物を準備せよ〉。そして彼は直ちにその木像を火中に投じた、という。

25.1) 無学による無神論、そして迷信は、甚だしい。それらに陥らぬよう、努めねばならない。あなたは知らないのか、真理の大神官であるモーセが、〈峯丸のつぶれた者、陰茎を切断されている者〉ばかりでなく〈姦淫を犯す者〉は主の会衆に加わることはできない（申命記23, 1-2）と定めているのを。2) つまり最初の規定により、神に相応しくない仕方でも神的な創造力を奪われている者を、もう一方および第三の規定により、唯一存在する神の代わりに、多くの偽りの名を持つ神々を作り出し、あたかも、真理にある父を知らずに姦淫から多くの父祖たちを作り出すかのような者たちを暗示しているのだ。3) ところが、天上に植えられ、人間も与るべき古に起源を有する共同体があった。これは無知のうちに闇に閉ざされていたが、突如としてこの闇を貫いて現れ、光り輝いた。それはちょうど、ある人によって次のように歌われているとおりである。

「あなたには見えるか。いと高きところにある限りない大気が。

湿った腕のうちに大地をぐりと抱いているこの大気が」

（エウリピデス断片935）。

また、

「おお、大地の支えよ、また大地の上に座を持てる者よ、  
汝が誰であるにせよ、あなたは見抜くに解し難い」

（エウリピデス『トロアデス』884以下）。

さらに、子供たちが詩人の一節として歌っているような歌詞がこれに類する。4) しかしながら誤った、正しき道から逸れた観念が、真に破滅をもたらすものとして、天上的な生まれを持った生物である人間を、天上的な生き方から反らし、地上に打ちのめし、地上の被造物にのみ固執するように仕向けたのだ。26.1) というのも、ある者たちは天を観照するのみで欺かれ、目に映ったものを信じきって、星の運動を目にして驚嘆し、神格化して、〈走る〉(thein) から転じて星を「神々」(theoi) と名づけたのである。そしてインド人たちのように太陽にぬかずき、フリュギア人たちのように月にかしずいたのだ。2) しかるに彼らは、大地から育つ生物の耕作による実りすなわち穀物を、アテナイ人たちと同様に「デオ」と名づけ、一方ブドウの実りには、テバイ人たちと同じく「ディオニュソス」という名を付けた。3) しかるにまた別の者たちは、悪事を監督する応報を神格化し、その報いと災厄をに礼拝した。そこから、劇場に関わる詩人たちはエリニュエス、エウメニデス、はたまたパラムナイオスあるいはプロストロパイオス、さらにはアラストレスという神々を作り出した。4) しかるに哲学者たちのうちのある者は、あなた方のうちにある情動の詩的な類型に倣って、恐れ、性愛、喜び、希望などを具象化した。言うまでもなくこれは、古の人エピメニデスが、倨傲や恥知らずの祭壇をアテナイに立てたのと同様である。5) しかるにこれらに触発された事柄がさらに、人々によって実体として作り上げられることになった。すなわち、正義、クロト、ラケシス、アトロポス、運命、アウクソ、タッロなど、アッティカの女神たちである。6) さらに6番目の欺瞞的な神々増産の方法がある。それにより人々は神々の数を十二とした。これに属すものとしては、ヘスィオドスが自ら歌った『神統記』があり、またホメロスが神学的に歌った事柄がある。7) 最後に残っているのは（結局全部で7つということになるが）、人間に知られる神的な慈行に触発されたやり方がある。8) というのも、神が慈しみ深き業をなさることを理解しない者は、ある者を救済者に作り上げる。ディオスクロイ（カストルとポリュデウケス）、災いを遠ざけるヘラクレス、医師アスクレピオスなどである。27.1) これらは、真理からの虚しく害多き逸脱であって、天より人間を引き下ろし、破滅へと向かわしめるものである。わたしがあなた方に望みたいのは、これらの神々を仔細に示し、それがどのような神々であるのか、また実際に存在

するのかどうかを明らかにしてもらいたいということである。それはあなた方がもはや遍歴を止め、再び天上に帰還してもらいたいがためである。2) 〈われわれもまた、かつては、他の人々と同じように激情の子であった。しかし神は憐れみにおいて溢れるほどの方であり、神がわれわれを愛して下さったその豊かな愛を通して、すでに墮罪によって死せる者であったわれわれを、キリストとともに生かして下さったのだ〉(エフェソ2, 3-5)。というのも「ロゴスは生けるものであり」(ヘブライ4, 12)、キリストとともに葬られ、神とともに高擧されたからである。しかるに今なお不信仰な者どもは「激情の子」と呼ばれ、激情によって育まれている。これに対してわれわれはもはや激情の申し子ではなく、迷妄から離脱し、真理に向かって歌声を上げる。3) こうしてわれわれは、かつては不法の子であったが、ロゴスの人間愛によっていまや神の子となったのである。あなたがたの詩人、アクラガスのエンペドクレスも、こうあなたがたに仄めかしている。

「こうしてあなた方は、恐ろしい悪行のために苦悩し、

惨めな苦しみから心を休めさせることはあるまい」(断片145)

4) 神々に関する事柄のほとんどは、あなたがたによって根拠なく語られ、でっち上げられたものである。しかるに起こったと考えられている限りの事柄、それは恥ずべき仕方では放埒に生きた人々に関して記録されていることなのである。

「あなた方は虚偽と狂気のうちに歩み、真っ直ぐな

正しき道を措き、いばらと棘の生い茂る道へと

赴く。人間どもよ、何故あなたがたは彷徨うのか。虚しき者らよ、

やめよ。夜の闇を打ち捨て、光に与かるがよい」。

(『スイビュッラの託宣』断片1, 23-25, 27以下)

5) この詩句は、女預言者にして詩人のスイビュッラが、われらに教え諭しているものである。このうちに、真理もまた諭している。彼女は驚くべきまた恐るべき面影から神々の群れを解き放ち、同義語によって讃辞に反駁を加えているのである。

28.1) さて、ゼウスとは3人であると記す人々がある。それによれば、うち一人はアルカディアのアイテールの子であり、残りの二人はクロノスの子だという。さらにその二人のうち一人はクレタ島におり、もう一人はやはりアルカディアにいる。2) また、5人のアテナを仮定する人々がある。その一人はヘファイストスの娘で、アテナイ人である。もう一人はネイロス川の娘で、エ



ジプト人である。3人目はクロノスの娘で、戦争の発明者である。4人目はゼウスの娘で、彼女のことを、メッセニア人たちは、母の名を取ってコリュファシアと名づけている。最後に、パッラスとオケアノスの子ティタンの娘で、彼女は不敬にも、父祖伝来の毛皮を羊毛のように見せかけて父親をくるみ、犠牲にした。3) 実に、アポッロンは、アリストテレスによれば、ヘファイストスとアテナの子とされ（したがってアテナはもはや処女ではないわけだが）、第二にはクレタ島生まれでキュルバスの子とされる。第三にはゼウスの子、第四にはスィレノスの子でアルカディアの産とされる。この場合アルカディアではノミオスと呼ばれる。これらに加え、アンモンの子としてリビュアの人とされる場合もある。しかるに文法学者のディデュモスは、これらに加えて第六に、マグネスの子という説を加える。4) さて、いったいどれほどの数、死を被り死すべき数え切れぬほどの人間・アポッロンが、上述の分と同じだけの数をもっているのだろうか。29.1) わたしがもし、あなたに幾多のアスクレピオスや、数限りないヘルメスや、神話に語られたヘファイストスたちを語るとすればどうであろうか。あなたがたの聴覚を、これら多くの名で溢れさせることは余計だと思われまいであろうか。しかし、彼らの祖国、技芸、生涯、さらに加えてはその墓が、人間となった彼らを徹底して批判する。2) 実にアレスは、詩人たちの作品にあっても、次のように尊敬されている。

「アレスよ、アレスよ、人間にとっての災厄、血に飢え、  
城壁の破壊者たるものよ」。

（『イリアス』 5, 31: 455）

この次から次へと標的を変え、敵意に満ちた神は、エピカルモスが述べているように、スパルタ人であった。しかるにソフォクレスは、彼がトラキア人であると言っている。これに対してある人々は、アルカディア人だと言っている。

3) この神について、ホメロスは「13ヶ月間縛られていた」と述べている。

「アレスとても辛抱した。彼をオトスと、力の強いエピアルテスと、  
アレウスの子供たちが、強力な鎖で縛り上げた際には。  
それで彼は、青銅の足かせに13ヶ月間繋がれていたのだ」。

（『イリアス』 5, 385-387）

カリヤ人たちは、彼に犬を奉獻するとされ、幾多の麗しきことをしていると言われよう。4) しかるにスキュティア人たちは、ロバを奉獻するのを止めていないという。これはアポッロドロスそしてカッリマコスの伝えるところである。

「フォイボスは、ヒュペルボレオイ人の祭司たちに、

ロバを供するようにと命じる」。

(カッリマコス断片187)

またこの同じカッリマコスは別の箇所で、

「絢爛たるロバ殺しが、フォイボスを喜ばせる」

(カッリマコス断片188)

と歌っている。5) 一方ヘファイストスは、ゼウスがオリュンポスから、〈神々しい敷居より〉(『イリアス』1, 591) 投げ落としたためにレムノス島に落下し、鍛冶場で仕事をしていた。したがって彼は両足が不自由で、〈細いすねでせわしなく走り回る〉(『イリアス』18, 411)。30.1) あなたには神々の陶工のみならず、医師もいる。だがこの医師は貪欲であり、その名はアスクレピオスである。あなたには、ここであなたの詩人、ポイオティアのピンダロスを引きいて見せよう。

「多大な謝礼としてその手に握らされた黄金が彼の心をも誘った。

クロノスの子〔ゼウス〕はすぐ雷を手より投じて二人を貫き、

胸から息吹を取り去った」

(ピンダロス『ピュティア祝勝歌』3, 55, 57-58)。

2) エウリピデスもまた、

「というのもゼウス大神が、わたしの息子アスクレピオスに対し、

胸に焰を撃ちつけ、殺してしまったのが原因だ」

(エウリピデス『アルケステリス』3以下)。

このアスクレピオスは、雷電を受けてキュノスリスのあたりに眠っている。

3) 一方フィロコロスは、テノスでポセイドンが医師として崇敬を集めているのに対して、クロノスはシケリアに横たわり、彼はそこに埋葬されていると述べている。4) またドゥリオイのパトロクレスと若い方のソフォクレスは、ある悲劇作品の中でディオスクロイについて語っている。このディオスクロイは、もしホメロスが次のように歌っていることに関して信用されうるなら、人間となり、死を被る身となった。

「彼らはもう、生命をはぐくむ大地が、

ラケダイモンの地に、愛しい祖国の土地へと埋め込んだ」

(『イリアス』3, 243以下)。

5) 次のように記す『キュプリアカ』の詩も加えてよかるう。

「カストルは死すべき存在、彼には死の運命が定められている。

しかるにポリュデウケス、アレスの若枝は不死なる者」

（『キュブリア』断片5）。

これは詩に相応しく虚偽を述べている。6）一方ホメロスは彼よりも信用を置くことができるかたちで、彼ら二人のディオスクロイについて述べている。そしてヘラクレスを偶像として論難している。7）〈つわものヘラクレス、数々の偉大な業に通曉せる者〉（『オデュッセイア』21, 26）。実に、ヘラクレスに関しては、かのホメロスですら、死すべき人間と考え、また哲学者ヒエロニモスも、その体格を小柄で、髪は逆立ち、屈強だと理解している（ヒエロニモス断片34）。一方ディカイアルコスは、痩せ型で、筋だらけで、色黒、鉤鼻で、青い目をして、長髪であったとする。このようなヘラクレスが、52年間の生涯の後、オイタ山上の薪火によって葬禮を受け、その生涯を終えたのである。

31.1）ちなみにムーサイに関しては、アルクマンはゼウスとムネモシュネの子だとし、それ以外の詩人や歴史家たちは神格化して崇敬している。すべてのポリスが彼女たちのためにムセイオンを聖域として設けているが、マカル娘のメガクロが彼女たちを女神官ミュサとして買い受けた。2）しかるにマカルはレスボスの人々を王として治め、常に妻に対してつらく当たっていたため、メガクロは母のために心痛めていた。どうして気を病まないことがありえようか。そしてマカルはミュサという名でそれだけの数の女奴隷を買い求め、アイオリス方言でモイサと呼んだ。3）彼女たちには歌うことと、古の事跡を美しい調べでキタラに乗せて奏でることを教えた。彼女たちは止むことなくキタラを奏で、麗しく歌ってマカルを魅了し、その怒りを鎮めた。4）このためにメガクロは、母のことで彼女たちに感謝を捧げ、青銅器を奉納し、すべてに関して神事を尊ぶように定めた。これがムッサの起こりである。なおこの話はレスボスの人ミュルスィロスが伝えるものである。

32.1）あなた方は、自分たちの神々から、次のような事柄を聴くがよい。すなわち、愛欲の話、非自制的でパラドクスに満ちた神話、彼らの傷、縛め、笑い、戦い、隷属と饗宴、交合、涙、情動、放埒な快楽である。2）ここに、呼び寄せるがよい、ポセイドンと、彼によって墮落させられた人々の群れ、アンフィトリテ、アミュモネ、アロベ、メラニッペ、アルキュオネ、ヒッポトエ、キオネ、その他幾多の女性たちを。しかしこれだけの数の女性をもってしても、あなた方のポセイドンの情動は満足させられなかったのである。3）わたしのために、アポロンにもご登場願おう。この神はフォイボスと呼ばれ、穢れなき預言者であり、善き助言者である。だがこのことは、ステロペもアイトゥッサも、アルシノエも、ゼウクシッペも、プロトエも、マルペッサもヒュブシブレも述

べていない。というのもダフネ一人が、この預言者そして破滅から逃れたからである。4) かのゼウス御自らに、すべてを通じて登場願おう。彼は、あなた方によれば〈人間と神々との父〉(『イリアス』1, 544ほか) であるから。ゼウスは情事に関してこれほど何度も登場し、それはあたかも、すべての女性に対して欲望を抱き、すべての女性に対してその欲求を満たしているかのようである。かくして、かのトゥムイス人たちの雄ヤギに優るとも劣らぬ数の婦人に満ち満ちているかのようである。33. 1) おおホメロスよ、あなたの詩行にわたしは驚嘆する。

「クロノスの御子〔ゼウス〕はこう言うと、黒い眉毛でうなずいた。

そしてこの主の神々しきみずらが揺れた。

その不死なるこうべが。こうしてゼウスはオリュンポスを大いに震撼させた」。

(『イリアス』1, 528-530)

2) ホメロスよ、あなたはゼウスを荘厳な姿にしている。あなたは彼の指図を、崇敬されるものに仕上げている。だが人よ、もしあなたが帯を指し示すだけでも、ゼウスは論破され、神は辱められるであろう。3) かのゼウスは、いったいどれほどまで好色だったのだろうか、アルクメネとかくも長い夜、情事にふけたとされるからには。というのも九夜とは、歯止めの効かぬ者にとっては長くはあるまい(一生涯ですら、無抑制の者には短いであろう)、こうして彼はわれわれに、悪事を働く神の胤を撒き散らすのだ。4) ヘラクレスはゼウスの子である。まさしくゼウスの子であり、長き夜の末に生まれた子である。12の功業を、苦しみの中に、長い期間にわたって成し遂げた男であるが、もう一方で、テストイオス(テスピオスとも)王の50人の娘と一夜ずつ交わった。かくも多数の女性の、姦通者にして花婿となったのである。詩人たちがこの男を〈とんでもない、大それたことをする男〉(『イリアス』5, 403) と呼んでいるのも故なきことではない。彼のありとあらゆる姦淫と、子どもたちを破滅させる行為を数え上げれば長大になるだろう。5) というのもあなた方の神々は、子供たちから身を遠ざけることをしないからである。すなわちヒュラ、ヒュアキントス、ペロプス、クリュスィッポス、ガニユメデスを愛した神々がある。6) 女性たちは、あなた方のこのような神々にぬかずき、同様のことを望んで神々と等しきものとなるほどに思慮ある男たちを、自らの夫として望むのだ。あなた方の子どもたちは、このような神々を崇敬するように習慣づけられ、成人するとこの神々を、姦淫の明確な像として描くことになるのだ。

33.7) しかるに、神々のなかで男神のみが、彼らと同様に性愛について歌っている。

「慎みを知る女神たちは、各々恥じらいをもって家の中に留まり」

(『オデュッセイア』 8, 324)

とホメロスは歌っている。恥じらいを知る女神たちは、アフロディテの姦淫の場面を見るのを慎んだのである。8) だが慎みを知らぬ女神たちは、情動のうちに姦淫に縛られていた。エオスはティトノスと、セレネはエンデュミオンと、ネレイスはアイアコスと、そしてテティスはペレウスと、デメテルはイアスィオンと、そしてフェレファッタはアドニスとである。9) しかるにアフロディテはアレスとのことで辱められ、キニュラスへと逃げてアンキセスに嫁ぎ、ファエトンを誘惑し、アドニスに恋した。そして牝牛の目をしたヘラと争い、リングの件では女神の衣を脱ぎ、牧人[パリス]に美しく見えるようにと精魂傾けた。

34.1) では競技についてもう少し巡ってみることにし、墓に関する集いをも解いてみることにしよう。それはイストミア、ネメア、ピュティア、そしてオリュンピアである。ピュトンではピュティアの龍が崇拝され、この大蛇をめぐる集会がピュティア祭と呼ばれている。イストミアでは、海が少量の泥を吐き出し、イストミア祭ではメリケルテを嘆く。ネメアでは別の嬰兒アルケモロスを悼む式が行われ、この子の墓碑銘がネメアと呼ばれる。ピサには、おおすべてのギリシア人たちよ、あなた方のために、御者フリュクスの墓があり、ペロプスのために神酒が捧げられる。オリュンピアでは、フェイディアスのゼウス像が引き出される。かくして思われるに、死者をめぐる競われる競技が神秘なのであって、その言葉と同じく、その双方が公にされるのだ。2) だがアグラでの神秘、アッティカのハリムンでの儀礼は、アテナイで執り行われる。その競技とディオニュソスに捧げられた陽物は、もはや世界的な恥である。彼らは劣悪にも、これに生命を賭けている。3) というのもディオニュソスはハデスに降りようと願ったが、そこへの道を知らなかった。そこで、プロスュムノスという名のある男が、彼に言ってやろうとうけがったが、代償ではなかった。その代償はよろしくないものであったが、ディオニュソスにとっては良いものであった。ディオニュソスが求めたその褒美、褒賞とは、性愛、ディオニュソスであったのだ。神が求めたので、求めが成立した。そしてもし番うならば、彼に提供してやろうと約束し、誓いを立てて約束を結んだ。4) 彼は道を知ると立ち去り、直ちに戻った。彼はプロスュムノスに出会うことはなかった(すでに死んでいた)。ディオニュソスは愛人の穢れを淨めると、墓に急ぎ

情欲を感じた。たまたま、イチジクの枝を見つけたので、それを切り取って男性性器の形に仕立て、その枝の上に腰掛け、死者に対して約束を果たした。5) この情動の神秘的な記念として、諸都市に男根が立ち、ディオニュソスに献げられているのである。〈なぜならもし〉、ヘラクレイトスは記している、〈ディオニュソスに狂い、乱心を起こすのであれば、ハデスとディオニュソスは同一物である〉(ヘラクレイトス断片17)と。それは思うに、肉体への酩酊によるのではなく、放埒の恥ずべき託宣によるのだ。

35.1) かくして、あなた方のこのような神々は奴隷と呼ばれるのが至当であり、情動の奴隷となっているのであり、そればかりでなく、スパルタ人たちの間で「ヘイロテス」と呼ばれるものにも似て、奴隷のくびきが入り込んでいる。フェラにおけるアポロンがアドメトスに、サルディスにおけるヘラクレスがオンファレに、ポセイドンがラオメドンに仕えた。アポロンは、無益な従僕のごとくに、以前の主人からは結局自由を得ることができなかった。そのころイリオンの城壁がフリュギアに建てられたのだ。2) しかるにホメロスは、アテナが憚ることなくオデュッセウスの前に、両手に〈黄金の灯を持って〉姿を現したとしている。アフロディテに関してわれわれは、次のように読んで知っている。すなわち、言わば嬖を知らぬ女召使のように、ヘレネに対して姦通者パリスとの寝屋を眼の前に提示し、彼を情事へと導かせたということを。3) というのもパニュアッシスは、これらに加えてなお、他の数多くの神々が人間に仕えたと語っている。たとえば

「デメテルは頑張った。名にし負う足曲がりのヘファイストスは頑張った。

ポセイダオンは頑張った。銀の弓持つアポロンも頑張った。

死すべき人間の許で、一年間仕えるべく。

志操堅固なアレスも頑張った。父による義務のもとで」。

(パニュアッシス『ヘラクレイア』断片16)

といったくでありである。

36.1) さてこれらに続くのが、あなたがたの肉感的な神々、情動をこうむる神々を、人間的な情動を受けるかたちのうちに、あらゆる仕方で導入しようとする仕方である。〈というのものの神々は、死すべき皮膚をまとっているのだから〉(『イリアス』21, 568)。ここでホメロスが証言しているのは、いとも正確にも、アフロディテが傷を受け、大いに悲痛な叫びを挙げているさまの描写に際してであり、いとも好戦的なアレスについても、ホメロスはディオメデスによって胴体に傷を帯びていると説明している。2) 一方ボレモンは、アテ

ナもオルニュトスによって傷つけられたと述べている。またホメロスは、アイドネウスもヘラクレスによって射かけられたと記しているし、パニュアッシスはアウゲウスのヘリオスについて述べている。すでにこのパニュアッシスは、かのヘラが同じヘラクレスにより〈砂多きピュロスで〉くびきにつながれていると述べている。一方ソスイビオスは、そのヘラクレスがヒッポコオンティデス人によって平手打ちを食らったと記している。3) もし傷を受けたのなら、出血もしただろう。というのも、詩で語られる〈イコル〉とは、血よりも汚い。なぜなら血が腐敗したものが〈イコル〉と呼ばれるからである。さて、欠乏している者たちには治療と食糧を提供する必要がある。4) ここから食卓や酩酊、哄笑や情事が出てくるわけである。彼ら神々がもし不死で、欠乏を知らず、不老でもあったなら、人間のような仕方では交合をすることも、子を儲けることも、眠りをむさぼることもあるまい。5) しかるにゼウスは、アイティオピス人の許で人間の食卓に与かったが、それは非人間的かつ非道のものであった。ゼウス自身がアルカディアのリュカオンの許で饗応を受けたときのことである。彼は知らずして、人間の肉に満腹したのである。というのもこの神は、彼を饗応している主がアルカディア人リュカオンであり、自分の子(その名はニュクティモス)を八つ裂きにし、ゼウスに肉料理として饗応しているということを知らなかったのである。37.1) なんとも、ゼウスは美しい。彼は預言者にして客人をもてなし、嘆願者を庇護し、恵みに満ち、託宣を下し、復讐者である。その反面ゼウスは不正に満ち、掟を知らず、無法者で、敬虔を知らず、獷猛で、暴力的で、破滅をもたらし、姦通を犯し、情欲に満ちている。だがゼウスも、人間でありそのような存在だった時期があったが、いまやもうわたしには、神話でもまた、あなたがたには彼も年老いているように思われる。2) もはやゼウスは龍でも白鳥でもなく、驚でも情欲溢れる人間でもない。神は空を飛ばず、少年愛にふけることもなく、接吻をすることも、暴力を振るうこともない。いまでもなお、多くの美しい婦人たち、レダよりも見目麗しく、セメレよりも年頃で、フリュギアの牧女よりも少年ぼく、年頃で、よく馴けられた者たちがいるにも関わらずである。3) では、かの驚はどこにいるのだろうか。かの白鳥はいずこに？ かのゼウス自身はどこにいるのだろうか？ — 翼とともに老いてしまったのだ。というのも、彼が情欲沙汰を悔いることもしなければ、思慮深くあることを教育されることもないからだ。だがあなた方には、この神話を暴露せねばならない。レダは死んだ。白鳥も死んだ。驚も死んだ。あなたのゼウスを探すがい。天ではなく、大地に探してみよ。4) クレタの人があな

たに説明してくれよう。彼により、ゼウスは葬られたのだ。カッリマコスが讃歌の中でこう歌っている。

「おお、あるじよ、あなたの墓は

クレタの人々が獲得した」(カッリマコス『ゼウス讃歌』8以下)。

つまりゼウスは死んだのだ(憤るなかれ)、レダや白鳥や鷺や、愛人や龍と同じように。

38.1)すでに彼ら、迷信に囚われた者たちも、自ら進んでではないが、神々に関する迷妄を判っていたように思われる。

「彼らは、いにしえに語られた樫の木の出でも、岩の出でもなく」

(『オデュッセイア』19,163)

むしろ、人の族の出であるが、少し経ってみると、木や岩の出であることが判明するであろう。2) 実にスタフュロスは、スパルタではアガメムノンがゼウスとして崇敬されていると述べている。一方ファノクレスは『性愛について』あるいは『美について』の中で、ギリシア人たちの王アガメムノンが、アルギュンノスにアフロディテの神殿を、愛したアルギュンノスを記念して建てたと述べている。3) 一方アルカディア人たちは、アルテミスをアパンコメネの名で崇敬していると、カッリマコスが『縁起譚』の中で語っている。またコンデュリティスによれば、メテウムナではまた別にアルテミスが崇敬されているとのことである。またラコニアのボダグラには、別のアルテミスの神殿があるというが、これはソスィピオスの伝えるところによる。4) 一方ケケノスの子ボレモンはアポッロンの彫像を知っており、エリスのオプソファゴンには、また別のアポッロンの神殿があつて崇敬されているという。そこではエリス人たちがアポミュイオンのゼウスにいけにえを捧げているという。一方ローマ人たちは、アポミュイオンではヘラクレスに、ピュレトンではフォボスに犠牲を捧げ、彼らについても、ヘラクレスのそばにいる人々とともに書き加えているという。5) アルゴス人およびラコニア人たちについては省略しよう。アルゴス人たちはテュンボリコンのアフロディテを信奉し、またスパルタの人々はケリュティスのアルテミスを崇拝しているという。なぜなら彼らは、咳をすることを「ケリュッテイン」と言うからである。39.1) あなたはこれらの注記、われわれによって提示されたこの句が、どこから持ち来たらされたと考えるだろうか。あなたの著作家たちは、わたしがあなたの不信仰に対する証人として招く人々だが、おお憐れな人々よ、あなたの方がそのまったく耐え難い生涯を、無神論的な冗談で満たしているということを知らないでいるように思われる。2) 実際、



アルゴスのゼウスは禿頭で、キュプロスでは復讐者としての別の姿で崇敬されているではないか。アルゴス人たちはアフロディテを「跨ぎの姿」で、アテナイ人たちはヘタイラとして、またかの詩人ニカンドロスが「美尻」と呼んでいるように。スュラクサ人たちは「桃尻」の女神として、彼女にいけにえを捧げているのではないか。3) 女陰部のディオニュソスについては、もう黙ることにしよう。スキュオネ人たちはこのディオニュソスを女性の部位に配してぬかずにいるという。倨傲の創始者として、この恥ずべき行いの監督者を崇敬しているのである。神々が彼らの間では、このようなかたちで、彼ら人々自身もまたこのような有様で、神々の間で戯れ、いなむしろ神々に対して侮辱し倨傲に陥っているのである。4) それならば、エジプト人たちがどれほど優れていることだろうか。彼らエジプト人たちは、村々でまた町々で理性を持たない動物どもを崇敬してきたのであり、彼らはこのような神々にぬかずくギリシア人たちよりもどんなに立派だろうか。というのもたとえ獣どもであったにせよ、姦淫は犯さないし好色でもない。本性的に快楽を求めるものなど一匹たりとて存在しない。ところが彼らがいかなる状況にあるか、それは十分に吟味を行ったのだから、なお何を述べる必要があるだろうか。5) だが、いまわたしが言及したばかりのエジプト人たちは、彼らの信仰に関しては実に多様である。彼らのうちスュエニテス人たちは魚のタイを、一方エレファンティネに住む人々はマイオテス（別の魚である）を、オクスュリンコスの人々は自分たちの土地の名を冠した魚を崇敬する。一方ヘラクリオポリスの人々はイクネウモンを、サイスとテバイの人々は羊を、リュコポリスの人々はオオカミを、キュノポリスの人々は犬を、メンフィスの人々はアピス神を、メンデスの人々は山羊を崇拝している。6) しかるにあなた方は、すべての点でエジプト人よりも優れており（劣っているとはわたしは言いかねる）、エジプト人たちを日ごと嘲笑するのを止めないが。理性を持たない動物に関してはいったいどうだろうか。あなた方の中でテッサリア人たちは慣習上コウノトリを崇敬し、一方テバイ人たちは、ヘラクレス誕生の経緯から、イタチを拝んでいる。ではテッタリア人はどうだろうか。彼らは、クレトルの娘であるエウリュメドゥサと交わってミュルミドンに儲ける際、蟻（ミュルメクス）に姿を変えたために、蟻を崇敬していると語られてはいるではないか。7) 一方ポレモンは、トロアスのあたりに住んでいる人々が、その土地のネズミを崇敬していると述べている。このネズミを彼らは「スミントゥス」と呼んでいるのだが、それはこのネズミが敵方の弓の弦をかじり切ってしまったことにちなむという。ここから彼らは、

このネズミにちなんで、アポッロンを「スミンティオス」と名づけたという。8) 一方ヘラクレイデスは『神殿建造物』という書物のなかで、アカルナニアについて述べている。それによると、アクティオンの岬はアクティオンのアポッロン神殿でもあり、まず牛をネズミに食わせるために奉納するのだという。9) サモス人のことも看過するまい。エウフォリオンが言っているように、サモス島の人々は羊を崇敬する。またフェニキアに住むスュリア人のことも省くまい。彼らのうちある者は鳩を、ある者は魚を大いに崇敬し、その様はエレイオン人たちがゼウスを崇拝するのに劣らないという。

40. 1) かくして、あなた方が崇敬しているものが神々ではないことは明らかであり、それらが奇神であるかどうかを確認する必要があると思われる。次いで、あなた方が言うような順序に列举してみよう。もしそれらが奇神であるとすれば、貪欲で汚らわしき存在である。2) さて、町々でその土地の奇神として崇敬を集めている存在を見出すことは、直ちにですら可能である。キュトニオン人の許ではメネデモス、テニオイ人のところではカッリストラゴラス、デリオンではアニオス、ラコニアではアストラバコス、といった具合である。しかるにファレロンでは「船尾の半神」が崇敬されているという（ヘロドトス『歴史』6, 69）。またピュティアでは、プラタイアの人々、すなわちアンドロクラテス、デモクラテス、キュクライオス、レウコンに生贄を捧げるようにと、ペルシア戦争の真最中に命令が下された。41. 1) それ以外にも、細部に目を向けることのできる者には、実に多くの奇神たちを認めることが可能である。

「ものみなを養う大地の上には、三万の不死なる

奇神がいる、言葉を語る人間の守り手たちが」

（ヘシオドス『農と暦日』252以下）。

2) ではいったい、この〈守り手〉とは誰なのであろうか。おおポイオティアの人〔ヘシオドス〕よ、語るのを嫌がることなかれ。あるいはそれは、次の神々および彼らよりも高貴なる存在、偉大なる奇神たち、アポッロン、アルテミス、レト、デメテル、コレ、プルトン、ヘラクレス、ゼウスその方であるということとは明らかなのであろうか。むしろ、アスクラの人よ、彼らが、われわれが逃避せぬように守りたもうように。あるいは、過ちを犯すことを免れていないにしても、せめて過ちを犯さずにすむように。ここでかの格言を引用するのが適っているように。

「父は、矯めようのない息子を矯正される」。

3) しかるに彼らがもし守り手であるとすれば、われわれに対する善意からこ

の目に遭うのではなく、あなた方の同胞の破滅から身を遠ざけんがために、追従者のように生に固執し、煙に身を隠すのであろう。実にこの奇神たちは、次のように言って自らの大食を告白している。

「酒供物や香、これをわれわれは褒賞として享けてきた」

(『イリアス』 4, 49)

4) もしエジプト人の神々、たとえばネコやイタチが声を持つとすれば、このようなホメロスや詩人たちの声、すなわち香や料理を嗜好する声以外の、どのような声を出すというのだろうか。あなた方の奇神や神々、あるいはラバのごとくに「半神」と呼ばれているものがあるとすれば、それはこのようなものに他ならないのである。というのも不敬の合成語を作るに際して、あなた方には名詞が不足するということはないからである。

### III. 人身御供；神殿となった墓。

#### § 42-45

42. 1) では、次の事柄をも付言することにしよう。すなわち、あなた方の神々は非人間的で人間を憎む神靈であり、人間の狂気を喜ぶばかりでなく、人身御供をも享受するのだということを。ある時は競技場における、武装した闘争心が、また戦場にあっては数限りない虚栄心が、彼らに快樂の端緒をもたらした。それは、彼らができるだけ多く、人間の殺戮を限りなく満喫するためである。すでに町々また民族ごとに、あたかも疫病が見舞うがごとくに、彼らは残忍ないけにえを要求してきた。2) メッセニアのアリストメネスは、イトメテのゼウスのために、300人を殺害した。これだけの人間が、これだけの数の吉兆の犠牲となると考えたのである。この中には、ラケダイモン人の王テオポンボスも含まれ、高貴ないけにえとなった。3) しかるに他民族では、タウリケのケッロネソスのあたりに住むタウロイ人たちが、異国人で自らの領地に住む者たちを選んだ。海戦で敗れた折、彼らはこれを直ちにタウリケのアルテミスにいけにえとして捧げたのである。あなたのこのいけにえについては、エウリピデスが悲劇化しているとおりでである。4) 一方モニモスは『驚嘆譚集成』の中で、テッターリアのペッラにおいてアカイオスという男が、ペレウスとケイロンへの犠牲として供せられたと記している。5) というのもアンティクレイデスは『帰国譚』の中で、リュクティオス人が(彼らは部族としてはクレタ人に属する)人間をゼウスのために屠ると表明している。またドスィダスは、レ

スボス人たちがディオニュソスのために同様の供犠を執り行くと述べている。6) 一方フォカイアの人々については(わたしは彼らをも看過することはしない)、ピュトクレスが『和合について』の第3巻において、タウロポロスのアルテミスのために人を焼いて奉納すると述べている。7) 一方アッティカ人のエレクトゥスとローマ人のマリウスは、自分の娘たちを生贄に捧げた。彼らのうち前者はフェレファッタに捧げた。これはデマラトスが『悲劇』第1篇で述べているとおりである。一方後者すなわちマリウスは、アポトロパイオイのために捧げた。これはドロテオスが『イタリア誌』第4巻に記している。8) これらの事柄から、この奇神たちは人を愛する存在だと思われる。類比的に、迷信深い人々がどうして敬虔でないことがありえようか。あるものは美辞的に「救い主」と呼ばれ、他方で救いを願う者たちは、陰謀者からの救いを願うのである。かくして彼らは、吉兆を得ることを目指し、人知れず人を殺す。9) というのも聖なる区域で殺戮が行われることはないからである。もしアルテミスとかゼウスのために、聖なる場所ででなく、怒りや金銭欲に駆られて、あるいは他の類似した奇神のために、祭壇やあるいは道半ばで人を殺すとすれば、「聖なるいけにえ」とか美辞を用いてはいても、このような生贄は、殺人であり人殺しではないだろうか。43.1) おお、他の動物たちに比して最も知恵に富む人間どもよ、いったい何故、われわれは、野緒や獅子に出会うときに獰猛な獣らを避け、

「もし人が蛇を目にすれば、後ろざまに飛び退き、

手足は震え寮の頬は真っ青となって、今来た道を引き返す」

(『イリアス』3, 33-35)

のだろうか。あなた方は、この奇神たちが破壊的で災厄をもたらし、陰謀に満ちて人間を憎み、破壊的であるということを前もって知り、判っていないながら、逃げることも避けることもしないのか。2) 悪人どもが何の真理を語ることがありえようか、あるいはいかなる益をなしえようか。ならばわたくしはあなたに、あなた方のこのような神々や奇神たちよりも、かの預言者アポロンよりも優れた人間を提示することができる。それはキュロスでありソロンである。3) あなた方のフォイボスは贈り物を愛するが、人間を愛する存在ではない。彼は友人のクロイソスを裏切り、報酬を忘れ果てて(かくまで名譽欲が強い)、ハリュス川を通してクロイソスを薪火の上まで導いた。このように彼らの愛する奇神は火へと導くのだ。4) ところが、おお、アポロンよりも人間愛に満ち真実に満ちた人間よ、薪火の上で憐れにも縛られた者に対して、まずソロン

よ、あなたは真理を預言するようにと、またキュロスよ、あなたは火を消すようにと命じたのだ。そしておおクロイソスよ、最後にあなたは苦難から学び知って、節慮を働かせるがよい。あなたがぬかずいていたのは、恩義を知らず、報酬だけを受け取って、黄金の後には再び嘘をつく存在なのだ。結局、奇神ではなく人間があなたに語りかけることになった。ソロンは、曲がったことを預言しはしない。おお異邦人よ、あなたは、この人物だけが真実の人、有益な人であることを見出すだろう。あなたは薪火の上で、このことを理解するだろう。

44.1) ここから、わたしは次のことに関して驚かざるを得ない。初期の人々は、いったいどのような想像に惑わされて迷妄に陥り、人々に迷信を告げ知らせ、それがフォロネウスであれメロプスであれ他の何かであれ、そのために神殿や祭壇を建て、罪深い奇神どもを崇敬するように、さらに加えては、最初に秘儀伝授を受けた者どもが、供犠まで捧げるように定めたのであろうか。2) というのも、後の時代になって人々は、かしづく対象である存在を神々に作り上げたのであるから。言うまでもなく、エロスは神々の中で最古の存在と言われているが、カルモスという少年以前には、これを崇敬する人など一人もいなかった。この少年は、自分の情愛が満たされた折に、この神を選び、捧げものとしてアカデメイアに祭壇を建てることにした。この折、病気であった放埒を「エロス」と名づけ、限りを知らない情愛を神格化したのである。3) 一方アテナイ人たちは、フィリッピデスが彼らに語るまでは、パーンがいったい誰であるのかを知らなかった。おそらくは、迷信がどこからか端緒を得て、馬鹿げた悪事の原因となったのであろう。しかるのち迷信は打ち破られることなく、むしろ進捗して大いに流布し、多くの奇霊の創造者が立てられ、いけにえを捧げて祭典を催し、像を建てて神殿を設けた。これらについて沈黙せず、むしろ吟味するならば、それらは麗しくも「神殿」と名づけられてはいるものの、実際には墓であった(すなわち〈神殿〉と名づけられた墓であった)。だがあなたがたは、いまや迷信を忘れ去って、墓を崇敬することを恥としている。45.1) アンティオコスが『歴史』第9巻で述べていることには、ラリッサのアクロポリスにあるアテナ神殿にはアクリシオスの墓があり、アテナイのアクロポリスにはケクロプスの墓がある。エリクトニオスに関してはどうか。ポリアスの神殿に葬られているではないか。一方エウモルボスとダエイラの子インマラドスは、エレウスィニオンのアクロポリスの囲域に葬られていないか。またケレオスの娘たちはエレウスィスに埋葬されているではないか。2) ヒュペルボレオイ人の婦人たちをここで挙げる必要があろうか。一方はヒュ

ペロケ、もう一人はラオディケと呼ばれ、デロス島のアルテミシオンに埋葬されているが、デリオンのアポロン神殿にも祀られている。一方レアンドリオスはミレトスのディデュマイオンにクレオコスが葬られていると言っている。3) この際、ミュンディオスのゼノンにしたがい、レウコフリュネの記念墓も書きとめるに値しよう。彼女はマグネシアのアルテミス神殿に埋葬されている。テルメッソスにあるアポロンの塚も同様である。またこの塚は、預言者テルメッソスのものだとも言われている。4) 一方アゲサルコスの子プトレマイオスは、パフォス島のフィロパトルに関する著作の第1巻において、アフロディテの神殿には、キニュラスおよびキニュラスの子孫たちが葬られていると述べている (FGH III p.66)。5) こう言うのも、あなた方がぬかずいている墓に、わたくしがたとえ訪れようとしても、

「わたしには到底、時間が足りない」(ナウクにない悲劇断片)。

だがあなた方を。あえて行っている行為に対する何らかの羞恥心が襲うことがなければ、まったくもって、死者に信頼する死者に成り果ててしまう。

「なんと情けない方々か、何たるひどい態を見せるのだ。

君たちの顔も頭も闇に包まれている」(『オデュッセイア』20, 351-2)。

#### IV. 偶像はギリシアの神々の愚かさ、虚偽、無礼を伝承すること。

##### § 46-63

46.1) だがもし、さらにこれらに加えてあなたがたに、このような像の類を見るようにと提示したならば、あなた方はそれを見て、その習慣が真に馬鹿らしいものであるということを見出すであろう、感覚を持たぬ「人の手の業」(詩篇113. 12)を崇敬しているのだ、と。2) 実にかつて、スキュティア人たちは剣を、アラビア人たちは石を、ペルシア人たちは川を崇敬していた。そしてその他の人々の中でも、なお古式に則る人々は著名な木を据え、また石から柱を切り出す。これらを彼らは、質料から切り出したものということで「クソアナ」〔像〕と名づけた。3) もちろんイカリヤには、手で作られたものではないアルテミスの像が存在し、キタイロンには、テスペイアの切り株がヘラ像として打ち出された。またアエトリオスの言うところによれば、サミアのヘラは、以前は枝であったが、後にはプロクレエスがアルコンであったとき、人像となった。このようにクソアナが人間に似せて作成され始めると、「人」(brotos)からできたものという意味で「木像」(breté)という名を得るようになった。

4) 一方ローマでは、かつて槍はアレスのクソアナであった、と著述家のワッロンが述べているが、その際槍の見目良さを保つために、技術者は最高の技量を発揮したという。かくして技芸が開花すれば、迷妄も増大することになった。47.1) こうして石や木や、簡潔に言えば質料の点で、人の姿をした彫像を彼らは作ったのである。あなた方はそれらに敬虔さをまとわせ、真理を誹謗した。このことはすでに自ずから明らかである。そのためにいかばかりかの立証の場が必要だとしても、それを求める必要はなかろう。2) オリュンピアにゼウス像を、アテナイにポリアス像を、黄金と象牙でフェイディアスが作ったということは、誰の目にも明らかである。一方サモス島には、ヘラの木像がエウクレイデスの子スミリスによって作られたということをオリュンピコスが『サモス島史』で語っている。3) だがあなた方は、つぎのようにいふかつてはならない。すなわち、アテナイではセムノイと呼ばれている神々のうち、彼が「ランブ石」と呼ばれているもので2体のスコタイを作り、カロスがそれらの中間に位置するということを。わたしはあなたに、ポレモンが『ティマイオス』注釈の第4巻で次のように述べているのを示すことができる。4) だがもしフェイディアスが、パタロイにあるリュキアのゼウスおよびアポッロン像を、それらとともに置かれている獅子像と同じように、自身で作ったとすれば事情は異なる。またもし、ある人々が言っているように、この技量がブリュアクシオスによるものだとなれば、わたしは異論を唱えるつもりはない。彼も彫像作家として有能である。彼らのどちらであれ、望みの方を記すがよい。5) だが実は、フィロコロスの言うように、かの彫像、9ペキュスありポセイドンとアンフィトリテの像で、テノス島で崇敬されているものは、アテナイ人テレスィオスの作品である。というのもデメトリオスが『アルゴリス誌』第2巻において、ティリュンスにあるヘラ像は、その梨材も作者もアルゴスのものだと言っているからである。6) もし「ゼウスからの降り物」と呼ばれ、ディオメデスとオデュッセウスがイリオンから持ち出し、デモフォンに託されたと言われているパッラディオンが、ペロプスの骨からできていて、ちょうどオリュンピアのユピテル神殿がインドの獣の骨からできているのと同様だと言え、驚く人がたくさんいるかも知れない。だがこれについては、ディオニュシオスが『キュクリア』の第5巻で述べているのを、わたしは引くことができる。7) だがアペッラスは『デルフォイ誌』で〈パッラディオンには二つある〉と述べており、それは二つとも人間の手で作られたものだ、としている。もっともこれも、わたしが無知からしているのだと思われぬように、アテナイにあるモリュコスによる

ディニュソス神の像を提示しよう。これは〈フェッラタ〉と呼ばれる石からできているが、製作はエウパラモスの子スィコンによる。これはポレモンが書簡の中で述べていることである。8) わたしの見解では、他に二人のクレタ人彫像作家がいた（その名はスキュリスとディポイノスであった）。彼らはアルゴスにディオスクロイのための像を設け、ティリュスにはヘラクレスの銅像を、またスィキュオンにはムニキアのアルテミスの木像を造った。

48. 1) ではわたしは、かの偉大なる神格、エジプトのセラピスが何であるかをあなた方に示すことができる今、いったいどうしてこのようなことに時間を取っていられようか。この神は卓越的に、他の神々に先んじて崇敬に値するものとされているとわれわれは聞く。彼らはこの神を、敢えて〈手で創られざる神〉とさえ呼んでいる。2) というのも彼は、スィノペウスによりエジプト人の王プトレマイオス・フィラデルフォス（前308—246）に送られた奉納物で、王は、エジプトより遣わされ飢饉に疲弊する人々に食糧を恵んだと記す者がある一方、この彫像はプルトンのものだとする人もある。しかるにこの像を受け取った人々は、現在ラコティスと呼ばれている岬にこれを据え、その地でこれはサラピスの神域として崇敬されてきた。その場所は、上述のところに近接する。しかるにかのプトレマイオスは、妾のプリスティケが亡くなると、カノボスに移送し、はっきりと柵で区画して埋葬した。3) 他の人々によれば、サラピスとはポントゥスの木像であり、祭礼による敬意とともにアレクサンドレイアに移送されてきたという。ただイシドロスだけが、この像はアンティオケイアに住むセレウコス家の人々から送られてきたと言い、飢饉の際に彼らもまた、プトレマイオスによって食糧を補給されたのだという。4) だがサンドンの子アテノドロスは、このサラピスを古めかそうと望んで、どこでつまずいたのかはわからないが、これが作られた像であるということを否定するに至った。彼によれば、これはエジプト王のセソストリスであり、ギリシア人に帰する領土の多くを征服したおり、エジプトに帰還するさいに、諸民族から十分な技術者たちをエジプトに連行したという。5) こうして自らの父祖であるオスィリスを、彼らに命じ巨額を投じて製作するよう命じた。そこでこのオスィリス像を、技術者ブリュアクシスが作り上げたのであり、アテナイオスが製作者ではないという。ただ別伝によれば、アテナイオスとはかのブリュアクシスの異名だとされる。彼は製作にあたり、混合した様々な素材を用いた。というのも彼は、金、銀、青銅、鉄、鉛のやすりを所有していた。これらに加え、錫もあり、エジプト石に関しては一つとして欠けることがなかった。サファイア、



赤鉄鉱、エメラルド、トパーズを所有していたのである。こうして彼はすべてをすり合わせ、混合させて瑠璃に塗りこみ、6) そのために像の表面は黒くなった。さらに、オシリスとアピスの葬儀から残された薬草によってすべてをこね、サラピスを作り上げた。それゆえその名も葬礼の分かち合いと、埋葬の創造とを暗示するものであり、オシリスとアピスの合成語、オシラピスとなった。

49.1) さてギリシアにおいては言うに及ばず、エジプトでは新たな別の者を神として、うやうやしくもローマ人たちの王が、ちょうど年齢的に最盛期の愛らしい者をたてまつった。アンティノオスは、ちょうどゼウスガアニュメデスを捧げたように奉獻された。というのも、恐れを知らぬ情欲は、簡単に抑えられるものではないからである。そして人々はいま、アンティノオスの聖なる夜にかしずくが、彼とともに徹夜する愛人は、その夜の破廉恥極まりなさを良く知っていた。2) 姦淫のために崇敬されている神を、なぜ数え上げてもらう必要があるか。なぜ彼を、子として悼んでもらうよう命じたりするのだろうか。なぜその美しさを説明してもらおうか。倨傲のために枯れた美しさは恥ずかしい。人よ、美に驕るなかれ、盛りの若さに逸るなかれ。それが美しくあるように、淨らかに保つがよい。美の僭主ではなく、王たれ。美を自由なままに留めよ。あなたが像を美しく守るとき、そのときわたしはあなたの美を知ることになるだろう。それが美の真なる範型となるとき、そのときわたしはその美に讃嘆しよう。3) すでに愛する者の墓は存在し、アンティノオスの神殿のための町もできた。わたしが思うに、まるで神殿であるかのように、そのように墓は讃嘆され、ピラミッドや廟や迷宮など、死者たちの他の墓も、神々の墓でもあるかのように驚嘆された。50.1) あなた方のために、わたしは師として女預言者スィビュッラを立てよう。

「虚しき人々が〈神〉だと言い、彼らがその言葉を偽る  
嘘つきフォイボスの預言ではなく、わたしは偉大な神の  
預言を引こう。この神は人の手が作りあげた  
もの言わぬ、石を磨いてできた偶像のごときものではない」。

（『スィビュッラの託宣』 4, 4-7）

2) 女預言者は、この神殿を「廃墟」と呼んでいる。まずエフェソスのアルテミス神殿については「大地の裂け目と地震のために」（『スィビュッラの託宣』 5, 294以下）飲み込まれるであろう、と次のように予言している。

「エフェソスは、河岸で仰向けになってわめき嘆くだろう、

もはやそこにはない神殿をあくがれ求めて」

(『スィビュッラの託宣』 5, 296以下)。

3) 彼女は、エジプトのイシスとサラピスの神殿は砂地とされ、燃やし尽くされるだろうと述べている。

「イシスよ、いとも哀しき女神よ、あなたは一人ナイル川の河口に留まり、  
言葉を失ったままアケロンの砂州で狂気に陥る」

(『スィビュッラの託宣』 5, 484以下)。

そのすぐ後で、

「そしてサラピスよ、そなたもまた、幾多の輝ける石のうえに座り、  
いとも哀れなエジプトの地で、大いなる悲しみと化す」。

(『スィビュッラの託宣』 5, 487以下)

4) だがあなたは、女預言者の声に耳傾けるのではなく、あなたの哲学者であるエフェソスの人ヘラクレイトスの声を聴くがよい。彼は偶像における無感情を批判している。〈彼らはこれらの偶像に祈るが、それはあたかも家で彼らに語りかけるかのようである〉(断片、ディールズ5)。5) いったい、石に向かってひれ伏す人々とか、扉の前で、その扉があたかも生けるものであるかのように立つ人々、ヘルメスを神としてそれにぬかずき、アギューエウスを門番としてこれを立てる人々というのは、奇怪な光景ではなかったろうか。というのもし、それらを無感覚のものとして彼らが倨傲に陥るのであれば、なにゆえ彼らはそれらを神々としてこれにひれ伏すのだろうか。一方もし彼らが感覚を分有していると考えるのであれば、なぜこれらを門番として立てるのであろうか。51.1) ローマ人たちは、最大の成功を運命の女神に帰し、彼女を最大の女神と考え、厠に彼女の像を持ち込んで立て、厠を神殿に値するものとしてこの女神に捧げている。

51.2) だが、無感覚な石や木や高額な黄金にとっては、彼らが崇敬と薫香を受ける香や血や煙などは、まったく眼中にない。そればかりか、崇敬や不遜の念すら念頭にない。逆に彫像とは、あらゆる動物に比してむしろ卑しきもののなのである。3) そしてこれら彫像が神格化された次第をめぐり、わたしは当惑するし、愚かしさゆえに迷妄に陥っている人々を、憐れむべき存在として憐れに思うに至る。というのもしある動物、たとえば蛆虫とか、芋虫とか、またニカンドロスが〈盲目でぞっとする〉(『テリアカ』815)と呼んでいるような、モグラとか野ネズミとか、最初の誕生以後もう不具であるかのように見えるものが、すべての感覚を有してはいないでしょう。4) だがそれにしても、

これらの像や彫像、まったく無感覚であるものどもに比べれば、彼らは優秀なのである。というのも彼ら動物たちは、一つないいくつかの感覚、たとえば聴覚、触覚、臭覚あるいは味覚に比せられるものを持っているからである。だが彫像は、たった一つの感覚すら分有してはいない。5) しかるに、視覚をも聴覚をも声をも有していない動物は数多い。たとえばカキ属がそうである。だがそれらの動物とても生命活動をし、増殖もする。さらには月の巡りとともに被るものもある。しかるに彫像は動作をせず、行動をせず、感覚を持たず、欠けていることばかりで、釘を打ちこまれ、固定され、鋳型をはめられ、やすりをかけられ、のこぎりで切られ、磨き上げられ、彫り込まれる。6) 彫像作家たちは、沈黙する大地に対して、その固有の本性から逸脱させ、技芸によって伏礼するに相応しいと思わせ、蔑ろにしている。一方神格化する人々は、わたしの感覚では、神々や奇神に伏拝するのではなく、その彫像がいかなるものであれ、大地と技量とにぬかずいているのだ。というのも彫像とは、実を言えば、技術者の手によって形作られた死せる質料だからである。われわれにとって感覚されるものとは、質料が感覚を有するために生じるのではない。彫像とは、思念されるものだからである。神、真に唯一なる神とは、思念されるものであって感覚されるものではないのだ。

52.1) それどころか逆に、そのような状況下にあって迷信家たち、石に屈拝する者たちは、無感覚な質料に対して崇敬すべきでないということを行動によって学び、その必要に譲って、迷信により破壊されるのである。しかるに彫像を軽蔑する者たちは、それらについてまったく熟考することを望んでいないように見える。彼らは、その彫像が奉献されている神々自身によって裁かれている。2) 若き僭主ディオニュシオスは、シケリア島のゼウス像から黄金の衣を剥ぎ取り、像に羊毛を被らせるように命じた。彼は「これの方が黄金よりもはるかによい、夏には軽く、冬には暖かいからだ」と言ったという。3) 一方キュズィコイの人アンティオコス、金銭に困窮していたとき、黄金製の大きさは15ペキュスのゼウスの像を、鋳型で作るように命じ、またそれよりも安価な素材による像を、その隣に黄金の薄片をまわらせて建てるようにさせた。4) しかるにツバメやその他ほとんどの種類の鳥が、それらの彫像に飛来しては糞をひっつけた。オリュンピアのゼウスだとか、エピダウロスのアスクレピオスだとか、ポリアスのアテナ、エジプトのサラピスなどとは夢にも考えずにである。5) あなた方はそれでも、この彫像たちの無感覚について学ぶことがないのか。もっとも悪辣な連中や敵方のうちに、破廉恥な儲けを考えて神

殿を略奪したり、像の金箔をはがしたり、その偽像を作ったりしようとする者がある。6) さて、もしカンピュセスやダレイオス、あるいは他の狂った人物が、そのような行為を手がけたり（ヘロドトス3, 29）、あるいはもし誰かある者がエジプトのアピスを殺害したとすれば、笑止千万なことには、彼らの神を殺したことになる一方、腹立たしいことには、儲けのために非道を働いたということになる。53, 1) わたしはあえて、この悪行、貪欲の業を看過することにして。また偶像たちの扱いにくさに対する反駁も思い起こさないことにしよう。むしろ、火も地震も、奇神あるいは彫像を恐れさせあるいは恥じ入らせる効果はない。むしろ波が、浜辺に積み上げられた小石を崩すほうが有効なのだ。2) わたしは、火が吟味の効力を有しまた迷信を癒す力を持つことを知っている。もしあなたが無思慮を止めたいと望むのであれば、火があなたを照らし導くだろう。この火が、アルゴスにあった神殿、女託宣者クリュシスをともども焼き払ってしまった（トゥキュディデス『戦史』4, 133）。またエフェソスのアマゾン神殿に次いではアルテミス神殿、ローマのカピトリウムにもしばしば燃え広がった。アレクサンドレイア市ではサラピス神殿をも容赦しなかった。3) またアテナイではエレウテレオスのディオニュソス神殿を倒壊させ、デルフォイではまずアポロン神殿を竜巻が強奪した後、賢慮ある火が壊滅させた。これはあなたにとって、火が有する箴言を示してくれるだろう。

4) しかるに彫像の製作者たちは、あなた方のうち思慮ある人々に対して、質料を軽蔑することを恥ずかしく思わせはしないだろう。まずアテナイ人フェイディアスは、オリュンピアのゼウスの指に〈美しき万物の主〉と銘を入れた。というのも、彼にとってゼウスが美しかったからではなく、ゼウスが性愛の対象だったからなのだ。5) だがプラクシテレスは、ポセイディッポスが『クニドス誌』において明らかにしているように、クニドスのアフロディテ像を、愛人クラティネの姿に似せて作ったのである。それは憐れむべき人々が、プラクシテレスの愛人の前にひれ伏すことを意図してのことであった。6) 一方テスピアスのヘタイラであるフリュネがその美の全盛期にあったとき、すべての画家は、アフロディテ像をフリュネの美に似せて作成した。これはちょうど、アテナイの石工たちが、ヘルマス像をアルキビアデスに似せて作ったのと同様である。あなたがヘタイラにぬかずくことを欲するかどうか、この件はあなたの判断に委ねられることになろう。

54. 1) 私が思うに、いにしえの王たちはそれにつき動かされて、これらの神話を軽蔑し、人間のことゆえ何ら危険を伴うことはないとして、憚ることな

く、自らを神々と公言した。このようにして、彼らもまた、栄光を帯びて不死のものとなることを教えた。すなわち、アイオロスのケーユクスは、妻のアルキュオネーよりゼウスと呼ばれる一方、逆にアルキュオネーは夫からヘラと名づけられた。2) またプトレマイオスIV世は、ディオニュソスと呼ばれた。またポントスの王ミトリダテスも、ディオニュソスとされた。またアレクサンドロスも、アモンの子と思われることを欲して、塑像者に、角の生えた姿で自らの像を作らせることを望んだ。彼は、本来的に美しい人間の顔を、傲慢にも角で汚そうとしたのである。3) さらに、王だけではなく一般人もまた自らを神的な呼び名で高めようとした。たとえば医師のメネクラテスは、自らにゼウスという名を冠した。さらにわたしが、アレクサルコスを挙げる必要があるだろうか（この男は、サラミニスの子アリストスが語っているように、専門家として文法家となったが、自らを太陽になぞらえた）。4) また、ニカゴロスに言及する必要があるだろうか（彼はアレクサンドロスの時代に生を享け、生まれの点ではゼレイテスであった）。このニカゴロスはヘルメスという名をもち、ヘルメスの衣を身に付けていた。これは本人が証言していることである）。5) こうして全民族と人も町も総じて、へつらいを身に帯び、神々に関する逸話（mythos）を軽んじ、人間が自らのことを神々に等しいものとし、名声に思い上がり、自らには重荷に過ぎる名声に賛成しているのである。さていまや、彼らはアミュンタスの子でペッラ出身のフィリップスに対して、キュノスアルゲスで崇拜することを議決した。そのフィリップスとは、〈頸骨が壊れ、足は引きずる〉（デモステネス『冠について』67）男で、目はえぐられていた。また彼らは、デメトリオス（前336—283；ポリオルケース、アンティゴノス・ゴナタスの子）をも公的に神と呼ぶことにした。6) そして彼がアテナイに入城しようと馬から降り立った場所に、〈雷電を下すデメトリオス〉の神殿を作り、彼のための祭壇はいたるところにあるのだ。またアテナとの婚姻が、彼のためにアテナイ人たちによって準備された。しかるに彼は女神に対して倣岸に振る舞った。彫像とは結婚できないからである。しかるにヘタイラのラミアを連れてアクロポリスに入り、アテナの寝室で交わった。古の処女の前に若きヘタイラの姿をさらして（プルタルコス『デメトリオス』10, 23; 26）。55.1）かくして、自らの死を不死化させたヒッポンには義憤のありえようはずもない。このヒッポンは自分の墓に、次のようなエレゲイア詩を刻むようにと命じた。

「これなるはヒッポンの墓、死んでしまった彼を、  
運命が、不死なる神々と等しきものとした」（PLG 2, 259）。

ヒッポンよ、そなたはよくも、われわれに人間の迷妄を示してくれた。というの人も人々が、そなたが語ろうとも信じなかったにせよ、彼らは死者の弟子となっただけだからだ。それこそヒッポンの託宣なのだ。われわれはその意味を理解しよう。2) あなた方に崇敬された者どもは、かつては人間であったが、その後死んでしまった。伝説と経過した時間が、彼らに対する敬意を生みだした。というのも現在というものは、慣習により親しみから、蔑まれるものである。それに対して過ぎ去ったものは、同時代的な吟味からは無縁となり、時間が経って不明瞭になると、フィクションが加わって崇敬されることになる。3) こうして現在の事柄は信じられないが、過去の事柄は驚嘆されるに至る。たとえば、古の死者たちは、迷妄の長い時間を経て、後世の人々からは神々と崇められるようになる。あなた方にとって、このことの証拠は、あなた方自身の秘儀のうちにある。それは祝典、呪縛、傷、そして泣く神々である。

「やれやれ、何たることか、人間のうちわけても愛しいサルペドンが、  
メノイティオスの子パトロクロスに討ち取られるのが定めであるとは」

(『イリアス』16, 433-4)。

4) こうしてゼウスの意向は制され、あなた方の至高神ゼウスは、サルペドンのために敗れて嘆くことになる。であるから、あなた方自身が彼ら神々と神霊を「虚像」と呼ぶのは理に適っている。それはホメロスが、女神アテナと他の神々に対して、悪意から敬意を払い「奇神」と呼んでいることによる。

「彼女はオリュンポスを指して、

楯を保つゼウスの館へと、他の奇神たちとともに向かった」

(『イリアス』1, 221-2)。

5) ではどうして、虚像や奇神、真に忌まわしく不浄なる霊であるものが、なお神々たりうるだろうか。彼らはすべてのものから、土質的で汚らわしく、下方に沈み〈墓や墳墓のあたりを巡り〉、そこでは〈影を帯びた亡霊のごとく〉かすかに現れるというのに。56.1) あなたがたの神々とは、このような偶像なのであり、影であり、さらに加えて、テルスティエスの子である〈祈り〉(の神)は、ゼウスの娘たちよりも〈不完全で、しなびていて、その目はやぶにらみ〉(『イリアス』9, 502以下)である。それゆえわたしには、ピオンの方が優美に映る。一体どうして人がゼウスに対し、ゼウス自身ですら自らにもたらず事のできない子孫の多さを願い求めることができようか。2) なんたる不信心であろうか。あなたがたは混ぜもののない実体、汚れなく聖なるものを墓に埋葬し、真に真理なる実体の神性を奪い取ってしまうという大罪を犯したのだ。

3) 一体なにゆえ、神からの賜物を神ならざるものに帰すのか。何故天を蔑ろにして大地を尊重するのか。他にどのような、金や銀、ダイヤモンドや鉄、青銅や象牙、宝石の類があろうか。これらはみな、大地の一部であり大地の産物ではないか。あなたが目にしているこのようなものは皆、一なる母、大地の裔ではないか。4) いったい、おお虚しき人々、虚無を思う者たちよ（また繰り返すことになろうとは）、あなた方は天上的な場を侮蔑し、敬虔さを地面に引きずり下ろしている。地に由来するものを、自分たちのために神々に仕立て上げ、これら作られたものを、創られざる神と取り換え、より深い闇に陥ってしまった。5) パロス島の石は美しい、だがポセイドンは決してそんなことはない。大理石は美しい、だがオリュンピアの神はそうではない。素材はつねに技芸を必要とするが、神は何物をも必要とはされない。技芸が先立ち、形態を質料が覆い、実体の富を特性に向けて導くが、恐れ多きは姿のみによって生じるのだ。6) あなたの彫像は、もしあなたが上なる世界に思いを致すなら、黄金製、木製、石製、土製であり、かたちは技術者から得てきたものに過ぎない。わたしは大地を歩むが、拝礼しないように心がけてきた。というのも靈魂の希望が、霊を持たざるものに信を置くというのは、あつてはならないことだからである。

57. 1) であるから彫像には、できるだけ近づくことが望ましい。それは、その迷妄そのものが、凝視によっても反駁されるためである。彫像のかたちが、必ずや奇神の面影を彫り留めているはずである。2) であるからもし誰かが、書物や彫像を訪ねて見たいと望むなら、その人はすぐにでもあなた方の神々について、その非難されるべき特性から知らしめてくれるだろう。すなわち、ディオニュソスはその外衣から、ヘファイストスはその技量から、デオはその災難から、イノは被り物から、ポセイドンはその三叉の鉾から、ゼウスは白鳥から。一方ヘラクレスについては、門が示してくれよう、たとえ誰かが、描かれた裸体の女性を見て「黄金の」アフロディテを想起するにしてもである。3) こうしてキュプロス島のピュグマリオンは、象牙の彫像に恋したのである。それはアフロディテの像であり、裸体であった。このキュプロスの男は姿で敗れ、彫像とともにやって来た。これはフィロステファノスも述べているところである。一方クニドスには石でできた別の美しいアフロディテがあり、他の男がこれに恋して石と交わった。ポセイディッポスが述べているが、前者は『キュプロスについて』において、他方は『クニドスについて』においてである。技芸は恋に狂った人間に対し、破滅に導くまでにかくも強力なのである。4) 確かに創造の業は力に満ちている。だがロゴスに拠る者、あるいはロゴスに従って生き

てきた者たちを欺くことはできない。というのも、絵画術を通じての類似性によって、描かれた鳩の傍に小鳩は飛来し、馬は、美しく描かれた馬に向かっていなく。少女は彫像に恋し、美しい若者はクニドスの彫像に思いを寄せると言われている。だが技芸によって欺かれるのは、見るものたちの視覚である。5) なぜなら節度ある人間であれば、誰も女神像と交合したり、亡き女性とともに葬られたり、奇神や石に恋したりはしないからである。だが技芸は、たとえ愛するということに向けて誘いはしないにせよ、彫像や絵画を崇敬しぬかずくようにと、別の魔術を通してあなた方を欺くのである。6) 絵画も同様である。技芸は賞賛されてしかるべきである。だが真理を装って人を欺くことがあってはならない。馬は動かずに立っている。鳩は鳴かない。翼ははばたかない。だがダイダロスの牛は、木でできていながら野生の牡牛を捕らえる。そして技芸は野獣を迷わせ、恋した女性を襲おうとする。58.1) このような狂気の沙汰であれば、悪しき術を弄する技術が、思慮に欠けた者のうちに作り出したものである。しかしながら、ここで猿を取り上げてみよう。その育成者や保育者は、蛸や粘土でできた偽物や玩具がまったく彼らを欺くことがないのに驚嘆する。あなた方は、石や木や黄金や象牙の彫像や絵画にかしづくとは、猿にも劣ることなのだろうか。2) このような破滅をもたらす遊び用具の製作者たちこそ、石工、像を描き出す画家、彫刻家や詩人たちなのであり、多くのそのような群れを生み出す。それは、野に遊ぶサテュロスやパン、森や丘や樹上のニンフ、水辺や川や泉のナイアスたち、海辺のネレイスたちである。3) 魔術師たち（マゴイ）は、自らの不敬虔に仕えるのは奇神たちだと豪語し、彼らはその奇神たちを自らの僕として登記し、呪文のために不可欠な奴隷たちとしている。神々の婚姻や子作り、出産の床などを想起し、姦通を歌い、祝典を茶化しパロディー化し、飲酒の場面の哄笑が提示されることで、彼らはわたくしをして、たとえ沈黙することを望もうとも、声を挙げるように勧告する。4) ああ、無神性の甚だしきこと。あなたがたは天を舞台とし、あなた方によって神の演劇が作られているにもかかわらず、あなた方は聖性を奇神の仮面によって茶化し、真なる敬神を迷信でもって風刺しているのだ。

59.1) 「一方彼は、豎琴を奏でて美しく歌い始めた」

(『オデュッセイア』8, 266)。

ホメロスよ、われらにその麗しき歌を歌うがよい。

「アレスと、みずらもよろしきアフロディテの睦事を。

まずは彼女が、ヘファイストスの館でひそかに交わる様を。



多くを与え、主たるヘファイストスの寝床と寝屋を辱めて」。

（『オデュッセイア』 8, 267-270）

2) やめよ、ホメロス、その歌を。よろしくない、姦通を教えるのは。われらは姦淫を犯すように耳で勧められてしまう。というのもわれらは、この生き運動する像・人間のうちに、神の似像・ともに住める像、忠告者、対話者、共食者、共苦者、多苦者を担っているのだ。われわれはキリストのために、神への捧げものとなったのだ。3) 〈われわれは、選ばれた民、王の系統を引く祭司、聖なる国民、特別な民、かつては民でなかったのに、いまや神の民〉（Ⅰペトロ 2, 9）である。ヨハネによれば、〈下からの民〉ではなく、上から来たりてすべてを学びつくし、神の経綸を知悉し、〈生命の新しさのうちに歩む〉（ヨハネ 8, 23: 3, 31: 4, 25）ことに心する者たちなのだ。

60. 1) だが多くの人々はこのようには考えない。恥や恐れを投げ捨てて、奇神の非本性的な情欲をおのが家に描く。刺繍の絵画を高く掲げてそれに見入り、放縦で寝屋を飾って、放埒を敬虔と考えている。2) さらに寝台に寝そべり、抱擁に身をゆだねる裸体のアフロディテを夢想し、かの情事を思い浮かべる。またレダに恋する愛欲の白鳥を思い描き、女性性の表現を受け入れて、包帯で刻印し、ゼウスの放埒に相応しい封印を用いる。61. 1) これらがあなた方の放埒の原型であり、倨傲の神学であり、あなた方とともに姦淫を犯す神々の教えなのである。アテナイの弁論家が言うように、〈自分が望んでいること、人はそれを実現したと思いなす〉（デモステネス『オリュンティアコス』 3, 19）からである。あなた方の他の像は、一体いかなるものだろうか。それは小さなパンの像、少女の裸体像、酔っ払ったサテュロス、卑猥な図像、あからさまな性描写など、無節度ゆえに批判されるべきものばかりである。2) そればかりか、まったく無節度の画像が公然と描かれているのを目にしても、あなた方はなんら恥じ入ることをしない。さらにそれらを掛けた状態で大切にし、言うまでもなくそれらがあなた方の神々の像であるかのように、その破廉恥な記念碑を家の中で家宝みたいに扱い、フィライニスのポーズ絵をあたかもヘラクレスの功業でもあるかのように捧げ持つのだ。3) これらを用いることのみならず、それらを見たり聞いたりすることすら、忘れ去るようにわれわれは勧告する。あなた方を、耳が墮落させる。目が姦淫させる。視覚は、交合の前からすでにあなた方を新たに姦通させることになる。4) おお、人間性に対して暴力を振るい、像のもつ神性を反駁によって払い去ってしまう者たちよ、あなた方はすべてに対して疑いを抱くが、それはあなた方が情動に屈し去るためである。そし

てあなた方は偶像に信を置くが、それは偶像の無節度を求めていることであり、あなた方は神を信じないが、それはあなた方が節度を持っていないためなのだ。あなた方は優れたものを憎み、より悪しきものを尊重し、徳の傍観者となり、悪を競い合う者と成り果ててしまった。

62.1) したがって、言わば〈幸いなる人々〉と呼べるのは、『スィビュラの書』が次のように述べている人々だけである。

「神殿や祭壇を目にしては、ことごとくそれらを否み、

物言わぬ石の虚しき社、石の像、手で作った彫像、

命ある血と、四脚台、二脚台の生贄や、鳥獣の殺戮で汚されたものどもを否定する者たち」。

2) 実にわれわれは、偽りの技芸をなすことを、明確に禁じられている。預言者は言っている。〈あなた方は、上は天にあるもの、下は地にあるもの、そのすべての似像を作ってはならない〉(出エジプト20, 4)。3) 一体全体われわれは、今でもなおプラクシテレスのデメテルやコレや神秘的なイアッコスを神々と見なし、あるいはリュスィッポスの技術やアペッレスの手腕を、神の姿かたちを素材に映し取るものと考えてはいないだろうか。あなた方は、いったいどうすれば彫像がかくまで美しく編み出されうるのかという点に注目するだけで、あなた方自身がどのようにすれば、無感覚によって彫像に同化されずに済むかということに関しては考えを及ぼさない。4) 実に預言の言葉も、この習慣をこう明瞭かつ簡潔に反駁している。「諸国の民の神々は、すべて悪霊の像である。しかるに神は、天」と天にあるもの「を創造された」(詩篇96, 5)。63.1) ある人々は、これに端を発して迷妄に陥り、神の業がいかなるものであるかを知らずしてただ太陽や月や星辰の群れ、この単なる時間の道具を神と崇めることしか知らない。2) というのも〈神の言葉によって天は創られ、その口の息吹によって天の万象は創られた〉(『詩篇』32, 6) からである。人間の技量は家や神殿、都市や書物を生み出してきたが、神がどれほどのものを創られるか、どうしてわたしに述べることができようか。見よ、この世界はそのすべてが、神の業なのだ。天も太陽も、天使も人間も、すべて〈神の指の業〉(詩篇8, 4) である。3) 実に、神の力とはどれほどのものであろうか。その意思のみで、世界が創造される。これは神が単独で成し遂げたものである。なぜなら神は真に唯一だからである。4) 神は、単に意図するだけで創造を成し遂げ、欲するだけで、成立が伴うのだ。この点で哲学者たちの群れは、天を見上げて等しく〈人間は作られたものだ〉と同意するが、天に認められるもの、

視覚で捉えられるものに伏礼するという点で過ちを犯している。というのも、もし天にある業が人間の手になるものでないとすれば、それらは人間のために創られたはずである。5) あなた方の中の何人も、太陽に伏礼すべきではなく、太陽の創り主を求めるべきなのである。また、宇宙を神格化すべきではなく、宇宙の創り主を捜し求めるべきなのである。見るところ、唯一、神の智慧が残されていて、それは救いの門にたどり着こうとする者にとっての逃れ場である。したがって、何か聖なる神聖不可侵の場所からは、奇神どもを導き出すものは何もないのと同様に、救いに向かって疾駆する人間が誕生するのだ。

## V. 哲学者たちの神に関する見解。

### § 64-66

64.1) ではもしあなたが望むなら、哲学者たちが、神々について豪語している限りのことについても、駆け足で瞥見することにしよう。哲学すらも、虚栄心ゆえに質料を偶像化しているのだということをわれわれが見抜くことができるどうか、あるいは哲学が、神霊そのものを逸脱して神格化し、真理を夢想しているのだということを立証しうるかどうかを試みるために。2) 哲学者たちは諸要因を始原として措定した。すなわちミレトスの人タレスは水を賞賛し、また同じくミレトスの人アナクシメネスは、大気をもって始原とした。このアナクシメネスには、後代になってアポローニアのディオゲネスが同調した。エレア派のパルメニデスは、火と地を神々とした。しかしメタポントスのヒッパソスとエフェソスのヘラクレイトスは、この二つのうち一方すなわち火のみを、神だと考えた。これに対してアクラガスの人エンペドクレスは複数説を採り、これらの諸要因に加えて「憎しみ」と「愛」を始原として挙げた。

64.3) これらの人々もまた無神論者である。すなわち、いわば知恵なき知恵でもって質料に屈拝し、石や木として尊重することをせずにそれらの母体である大地を神格化し、ポセイドーン像は造らずに、水そのものを崇敬しているのである。4) いったい何かのポセイドンとは、「液体」(posis) から造語した湿った実体以外の何であるのか。それはちょうど、たとえば戦いの神アレスが「威厳」(arsis) あるいは「殺害」(anairesis) からそう命名されたのと同様である。5) 私には、多くの者どもが、単に剣を突き立てただけで、「アレスに犠牲を捧げた」と言うのはこのためではないかと思われる。このような風習はスキュタイ人に固有のものであり、それはエウドクソスが『地球の回転』第2

巻で述べている通りである。スキュタイ人の中でもサウロマタイ族は、ヒケシオスが『秘儀について』で述べているように、直短剣(akinake)を崇敬する。6)ヘラクレイトス一派の人々も、火を「初原因」(archegonos)として崇敬する習慣であるのは、まさしくこの故である。というのも、他の人々はこの火を「ヘファイストス」と名付けているからである。65.1)ペルシア人の魔術師(マゴイ)たちは火を崇敬するが、アジアに住む人々の多くもそうである。これに加えてマケドニア人たちもそうであるが、このことはディオゲネスが『ペルシア記』の第1巻で述べている。サウロマタイ人たちについては、ニュンフォドロスが『異邦人の法制度について』という著作の中で「火を崇敬している」と語っているが、そのサウロマタイ人、あるいはペルシア人、メディア人、そして魔術師たちのことを挙げる必要があるだろうか。かのディノーンは、彼らが、火と水のみが神々の像だと考えて、中空にて犠牲を捧げると言っている。2)わたくしは、彼らの無知を隠すつもりはない。というのも、もし彼らが、自らがほぼ迷妄から逃れていると考えているとしても、実際には他の迷妄に陥っているからである。彼らは、ギリシア人たちのように神々の像を木や石ではないと仮定している。またエジプト人たちのように、朱鷺やマングースであるとも考えていない。むしろ哲学者たちのように、火また水としているのである。3)彼は後に、周期的な年を経て、彼らペロッソス人たちが自身、人間の姿をした像を崇敬していると記しており、これを導入したのが、ダレイオスの子でオコス(アルタクセルクセスⅢ世)の父であるアルタクセルクセスであり、彼が初めて、アナイトィスのアフロディテの像をバビュロンとスサとエクパタナに建て、ペルシア人とバクトリア人たちに対してダマスコスとサルディスで崇敬するように指示した。4)さて、哲学者たちは自分たちの師が、ペルシア人、サウロマタイ人あるいはマゴイであることを認めており、彼らから、自分たちにとって畏れ多い諸元素の非神性を学んだという。彼らは万物の創造者たる支配者と、それら諸元素の創造者、始めなき神を知らなかった。しかるに彼らは、人間に奉仕するために作られた「諸元素」、使徒によれば〈貧しく、弱いもの〉(ガラテヤ4,9)に伏礼したのである。

66.1)他の哲学者たちの中で、諸要素を看過した者たちは、より高貴にして優れたものを論じ、そのうちのある者たちは〈無限なるもの〉を打ち立てた。アナクシマンドロス(ミレトスの人であった)や、クラゾメナイの人アナクサゴラス、アテナイの人アルケラオスがそうである。彼らは二人とも、理性を無限性の上に置いたが、これに対してミレトスのレウキッポスと、キオス島の

メトロドロスは、二つの元素を認めたように思われる。それはすなわち、充満と欠乏である。2) アブデラのデモクリトスは、これら二つを取り上げ、さらに虚像というものを付け加えた。というのも、クロトンのアルクマイオンは、星を、靈魂持つ神々だと考えた。彼らの羞恥心のなさを黙っておくことはすまい。クセノクラテス（カルケドンの人であった）は、惑星とは7体の神々であるとし、8番目に恒星すべてによって形成されるこの宇宙があるとほのめかしている。3) わたしはストア派に属する人々のことも看過すまい。彼らは、すべての質料のうちに、それも最も軽微な質料にすらも、神性が浸透していると述べる。彼らは不器用にも、哲学を辱める結果となっている。4) この点でわたくしは、ペリパトス派の人々がこの見解に与していることを想起するのは難しくないと思う。この派の父祖〔アリストテレス〕は、万物の父を考えるのではなく、いわゆる〈至高者〉を万物の靈魂と考えている（『宇宙論』397, 25）。すなわち彼は、世界の靈魂が神であると仮定しながら、自らにつまずいている。というのも彼は、神慮は月にまで及ぶと定義づけ、しかる後世界を神と考えるに陥り、神が神に与かっていないという教説を述べているのである。5) しかるにエレソスの人でアリストテレスの弟子であるテオフラストスは、一方で天を、他方で息吹を神と想定した。ただエピクロスだけは、わたしは進んで看過したいのだが、彼はすべてにおいて不敬を示し、神に関して非存在であると考えたのである。ポントスの人ヘラクレイデスについては何を語る必要があろうか。彼はどんな点に関してもデモクリトスの幻影へと帰するに過ぎないのではないだろうか。

## VI. 真理そのものから靈感を受け、 哲学者たちは時に真実を語ること。

### § 67-72

67.1) さてそのような輩は、大群となり、わたしに向かっていわば悪夢のように襲い掛かってくる。奇妙な奇神の馬鹿げた像を描き出しながら、老婆の世間話で神話めかしながら。人々に対して、そのような話に耳を傾けるように勧めることなど、あってはならない。われわれは自分の子どもたちにですら—これは寓話のはなしだが—、彼らが泣いているときに、偽りの話を慰みに話すなどという習慣は持ち合わせていない。われわれは、賢者ぶってはいるけれどもその実、幼子に比べて何も真理を知ってはいないような人々から告げられる

無神論を、彼らに語りかけるのは躊躇するからである。2) というのも何故あなたは、おお真理にかけて、あなたに信を置いている人々が、「流浪」(ヘラクレイトス)や「運動」あるいは「不規則な渦巻き」(アナクサゴラス)に巻き込まれているのだ、と示すようなことをするだろうか。いったいどうして、あなたはこの人生を偶像で満ちし、風や大気、火や大地、石や木、鉄、あるいはこの世界を神として立てたりするだろうか。惑星を神々とし、真に迷妄に陥っている人々に、かの悪名高き、天文学ならざる占星術を語ったりほのめかしたりするだろうか。わたしは諸霊の主を求めよう。火の主、世界の創造主、太陽の照らし手を探そう。わたしは神の業ではなく、神を慕い求めよう。68. 1) わたしはあなたの傍らに、探求のための協働者として誰を立てようか。というのもわたしは、まったくもってあなたに絶望していないのだから。もしあなたが望むなら、かのプラトンを立てよう。おおプラトンよ、いったいどのようにして神に辿りつくべきであろうか。〈というのも、このすべての父にして創造者を見出す業と、見出した上ですべての人々にそれを述べ伝えることは、不可能なのである〉(『ティマイオス』28C)。おお、彼に誓って、それはいったい何故であろうか。〈なぜならそれを語ることはまったく不可能なのであるから〉(『第七書簡』341C)。2) おおプラトンよ、あなたはよくぞ真理に触れた。だが、そこで頓挫してはならない。わたしとともに、善に関する探求に加わるがよい。なぜなら、およそすべての人間、とりわけロゴスに携わる者たちには、いわば神的な溢れが滴るのだ。3) それゆえ彼らは、たとえ望まぬとしても、神は唯一であり、破壊されることも生まれることもなく、天上界にあって天の背に位置し、自らに固有の観想のうちに、真に永遠に存在する、ということを認めているのである。

「わたしに告げよ。神とはどのような存在であると考えるべきか。

すべてをみそなわし、かつ自身は目に見えない存在なのだ」

(エウリピデス断片1129)。

とエウリピデスは歌っている。4) 実に、次のように語るメナンドロスは、わたしには欺かれているように思われる。

「太陽よ、神々の最初のものとして、あなたにはまず屈拝せねばならない。  
あなたを通して他の神々を観ることができるよう」

(メナンドロス断片609)。

というのも、太陽は決して真の神を指し示すことはないからである。しかるに、救いのロゴスは靈魂の太陽であり、ただ理性の内奥深くに指し昇るこの太

陽によってのみ、理性の眼は照らされるのである。5) それゆえデモクリトスが、〈雄弁な人間たちのうち、両の手を、今われわれギリシア人たちが〈大気〉と呼んでいるものに向かって差し伸べ、〈ゼウス〉と述べる者はごくわずかだ〉と言っている。というのもこの男はすべてを知悉し、すべてを与えかつ奪い、この男は万物の王だからだ〉。69.1) 万物の王とは誰であろうか。神は諸存在物の真理の尺度である。したがって、ちょうど計り取られるものが尺度によって把握されるように、神を考えることによって真理も計られ、把握されるのである。2) しかるに真に聖なるモーセは〈あなたの袋のうちには大小二つの重りを入れておいてはならない。またあなたの家の中に大小二つの升を置いてはならない。あなたには、真実で正しい袋だけを持っていなければならない〉（申命記25, 13-15）と述べている。ここで袋とか升とか万物の尺度とか言っているのは、神のことを意味している。3) 不正義にして不公正な偶像は、家では湿布剤のうちに、また言わば泥だらけの靈魂のうちに隠されている。しかるに唯一正しき尺度、真に唯一なる神は、常に公正にして同一であり、同様であって、万物を計り規定する。その様は言わば、正義を秤とし、万物の尺度を備ることなくはかり取り、本性を維持する。4) 〈実に神は、古の言葉にもあるように、万有の初め・終わり・中間を保持し、その本性にかなった円周運動を行いながら、いささかの狂いもなく進行を達成する。また、つねにその神に随行するのは、神の掟を蔑ろにする者への復讐者たる、正義の女神〉（プラトン『法律』4, 715E）。70.1) おおプラトンよ、あなたはどこからこのような暗喩の方法を身に付けたのか。何ゆえに、このような言葉の豊かな群れにより、敬神の念を予言できたのか。彼は言う、この種族は異邦人よりも知恵に富んでいるのだ、と。もしあなたが隠すことを望んだにしても、わたしはあなたの師たちを知っている。あなたは幾何学をエジプト人から習い、天文学はバビロニア人に教わり、トラキア人より健全な呪文を習得し、アッシリア人たちもあなたに多くを教えたのだ。しかるに真実である限りの法と、神の栄光に関しては、ヘブライ人に負うところが大きい。

- 2) 「虚しき策略によるでもなく、人間の手になる黄金、  
青銅の品、はたまた銀や象牙、木や石による死すべき  
人間の像（それらは人間が虚しき思いなしから作り上げた  
もの）を崇敬することもなく、むしろ天に向けて  
汚れなき肘を挙げ、朝まだきに寝台より起き、つねに  
肌を水で淨らかに保ち、永遠にして不死なる守護者

のみを見つめる者たち」(『スイビュッラの託宣』 3, 586-588)。

71.1) おお哲学よ、わたしには、ひとりこのプラトンのみならず、多くの他の人々も、真に唯一なる神を、その想念において「神」と呼ぶべく打ち立てることに専心したであろう、もし真理を把握してさえたならば。2) というのもアンティステネスは、これにキュニコス派の考え方を思い合わせず、むしろソクラテスの弟子であったがゆえに〈神は何物にも似せるべきでない〉と言った。彼は〈それゆえ、何びとも神をその似像から学びつくすことはできない〉。3) 一方アテナイ人のクセノフォンは明白に、ソクラテスが、もし自らに与えられた藥草を恐れることがなかったならば、自ら真理について証言をし、書き残したことであろう、と言っている。しかしこれは、少なからず謎めかされている。というのも彼が言うには〈神は万物を揺らせ、万物を静けく保つ方。それはあたかも誰か偉大にして力あり、明瞭な人物の如し。しかれどもその姿に関しては明瞭でない。ちょうどいともまぶしく見える太陽が、誰にもその姿を見つめることを許さず、むしろ誰か恥知らずにも見つめようとする者があれば、その視力を失うがごとくである〉(クセノフォン『ソクラテスの思い出』 4, 3, 13 以下)。4) ここからグリュッロスの子は、明らかなことにはヘブライの予言者の預言から学び取って、次のように喝破している。

「誰か、肉の身にして、天上的かつ真理を窮める不死の神を、その両眼もて見ることでできるものがあるのか、神は宇宙に住む方なれば。

それどころか人間には、太陽の光線にすらまともに対峙すること  
ができないのだ。死すべき身なれば」

(『スイビュッラの託宣』断片 1, 10-13)。

72.1) 一方ペダススのクレアンテスは、ストア派に属す哲学者であるが、詩的な神々の誕生譚ではなく、真実の神学を示した。彼は神について、それがいかなる存在であると自らが考えているか、隠さなかった。

2) 「あなたは善とは一体何であるか、わたしに尋ねるのか。

では聴くがよい。

秩序あり、正しく、敬虔で、敬神の念を持ち、  
自らを制し、有用であり、美しく、畏れの念を持ち、  
重厚で、名の用い方が正しく、常に生産的で、  
恐れを知らず、痛みを知らず、有用で、苦しみを免れ、  
有益で、喜ばしく、堅固で、好ましく、  
敬意に満ち、同意されるもので、....



名声を博し、虚飾を知らず、注意深く、柔和で、力強く、  
永続的で、非の打ち所がなく、永遠に留まる。

栄誉から何か美を手にしようとして、

栄誉に目を注ぐ者はみな、自由を失う」（クレアンテス、断片75）。

3）私思うに、ここでクレアンテスは、神とは一体どういう方であることを明瞭に教えている。と同時に、一般的な思いなしと慣習が、それらに従うが神を求めることをしない人々をいかに隷属化するかを示している。4）また、ピュタゴラスに連なる人々が、次のように言うのも隠されるべきではなかろう。彼らは〈神は唯一であり、ある人々が想定しているように、この世界秩序の外にあるものではなく、そのうちにあり、この周期のうちに完全に収まっていて、あらゆる誕生を見守り、あらゆる時代の混交、自らの諸力の起動者、天におけるすべての業の照らし手、万物の父、あらゆる回転の理性にして靈魂、万物の運動である〉。5）これらの事柄も、神の認識のために神の息吹により、彼らに向けて書かれたのに対して、われわれとしては、真理を仔細に検討することができるように選択された、ということを注記しておかねばならない。

## VII. 詩人たちもまた真理に関して証言すること。

### § 73-76

73.1）われわれとしては（哲学のみで足りるということはないので）、あらゆる事柄を虚偽と関係づける叙事詩すらも、すでに真理をほとんど証しするまでに至りつつも、むしろ神にことよせて神話的な逸脱を語っているということを見ておかねばならない。誰であれ、詩人にご登場願おう。2）まずアラトスは、すべてを通じて神の力を見渡そうと考えて、こう歌っている。

「すべてが確かになるように、彼らは神に対し、

初めにも終わりにも常に宥めを行う。父よ、

ご機嫌うるわしくあれ、偉大なる驚異、人間にとっての大きい助けよ」

（アラトス『星辰譜』13-15）。

3）同様にアスクラの人ヘスィオドスも、神を暗示的に表現している。

「彼こそは、万物の王にして支配者、

他の神々の誰も、彼の力をなき物とすることはできない」

（ヘスィオドス断片195）。

74.1）一方劇場の上でも、すでに真理が開示されている。まずエウリピデ

スは、大空と天を見上げて「これをしも、神と考えよ」と言った。2) 一方ソフィッロスの子ソフォクレスは、

「真理に関して、ただ一人の神。

その方は天と長き大地、それに大海の蒼きうねり、

そして風の力を創りたもうた。

われわれ鳥合の心迷える者どもは、苦しみを紛らわすために

神々の似像を石で作ったり、青銅や金や象牙でできた

像を供えたりする。そして神々に生贄や虚しき祭りを捧げたりして、

そうすれば敬心の念を表していると考えている」。

と歌った。つまりこのソフォクレスは、すでにそして概そは真理を劇場で観客に提示していたのである。3) しかるにトラキアの聖なる預言者にして詩人、オイアグロスの子オルフェウスは、秘儀の聖なる言葉や偶像の神学とともに、真理の再謡をなした。それはまさしく聖なるものであり、ロゴスとも言える歌であった。

- 4) 「適わしき事柄を述べ伝えよう。神聖ならざる者たちよ、  
みな一様に扉を立てるがよい。汝は聞け、光を放つ月の裔、  
ムウサイオスよ、わたしは真理を述べよう。これまで汝の胸に  
現れていた事柄が、愛しき生涯からあなたを奪い取ることの  
ないように。  
神的なロゴスに目を向けて、そのロゴスに座を占めよ。  
心の知的な空洞をただすがよい。小路によく  
歩み入り、宇宙の不死なる主のみを見つめるがよい」

(オルフェウス断片 5, 1-11)。

- 5) 続いてはっきりとこう付け加えている。

「その方は一にして自足し、万物はその一者の子孫として生まれた。

彼らの中にあって彼は取り囲まれ、死すべき人間の誰一人、この方を

目にはすることはできないが、彼自身はすべての人々を見ている」

(オルフェウス断片 5, 9-11; 15-17)。

このようにオルフェウスは述べている。彼は時のうちにさまよううちに、あるとき理解したのである。

- 6) 「さまざまに企みをなす人間よ、遅れることなきようにせよ、  
むしろ再度さまよう者として振り返り、神をなだめるがよい」

(『スイビュラの託宣』 3, 624以下)。

7) というのも、ギリシア人が神的なロゴスのいわば閃光を身に受け、真理のわずかばかりの部分の語ったとすれば、彼らは隠れざる真理の力を前もって証ししたのだが、彼らは弱き人々を論駁しながらも、究極の目標に到達することはなかった。75.1) わたしはすでに万人に、次のことは明らかとなっていると考える。すなわち、真理の御言葉なくして何かを為そうとしたり、語ったりしようとするものは、基礎なく歩むことを強いられるものに似ているということである。しかるにあなた方の神々に関する吟味は、あなたを恥じ入らせて救いに導こうとしているが、その神々とは詩人たちもまた、真理に強いられてパロディー化せざるを得ない存在なのである。2) 実に、喜劇作家のメナンドロスは『御者』という芝居の中で、

「どんな神であれ、老婆を連れて外を歩き回るようなのは  
わたしの気に入らない。またキュベレの神官が、板に乗って  
家に入り込んで来るのも」(メナンドロス断片202)。

3) というのも、キュベレの神官たちというのはこのような者だからである。そこから相応しくもアンティステネスが、施しを求める彼らにこう語っている。〈わたしは神々の母は養わない。神々が養ってくれるだろうから〉(アンティステネス断片70)。4) さらにこの同じ喜劇作家は『女神官』という芝居の中で、慣習に対して嘆きの声を挙げつつ、迷妄の無神論的な欺瞞を論駁しようと試みている。

「もしある人が、シンバルを叩いて神を望むところに  
引き込むことができるのなら、  
そんなことができる者は、神よりも偉大だ。  
だが人々の間には、このような厚顔と暴力の  
沙汰が見出されるのだ」(メナンドロス断片245)。

76.1) またメナンドロスのみならず、ホメロスやエウリピデス、その他数多くの詩人たちもまた、あなた方の神々に対して反駁を行い、幾許たりともその神々に対して罵言を浴びせることを恐れていない。すなわちアテナには直接に〈犬蠅〉、ヘファイストスには〈すね曲がりの〉と呼び、アフロディテに対してはヘレネが

「今後決してあなたの両足ではオリュンポスに戻れぬように」

(『イリアス』3, 407),

2) 一方ディオニュソスに関しては、ホメロスが明瞭にこう記している。

「かの神は狂ったディオニュソスの乳母たちを、

神々しきニュセイオンへと駆り立てた。彼女たちは皆打ちそろって  
人殺しのリュクルゴスのために、聖具を地面に投げ捨てた」

(『イリアス』 6, 132-134)。

3) またソクラテスの対話術の徒に真に相応しく、かのエウリピデスは真理を  
洞察して観客たちを超越し、アポロンについて、

「その神は、大地の中央に居まして、

人間どもにいと明確なる神託を与える」(『オレステス』 591以下)

と言いながらも反駁して、

4) 「わたしはこの神に従って母を殺めた。

あなたがたはかの神アポロンを不敬とみなし、殺害せよ。

誤ったのはわたしではなく、かの神、美と義を弁えぬ者」

と〔オレステスに〕語らせている。5) またある時エウリピデスは、ヘラクレスの狂える姿や酩酊に陥った様、食い意地の張った様を舞台に載せている。つまりそれは、ヘラクレスが牛肉に添えて

「まだ熟れていない無花果を食べ、

訳の分からないことを吠え立てた。異邦人にも

尋常でないと分かるほど」

だったからであり、6) またすでに作品『イオン』でも、神々の頭を露わにし、エウキュクレマに乗せて観客席に見せている。

「人間に法を定められたあなた方御自身が、

無法の罪を問われてよいもののでしょうか。

ひょっとして、いや、これはただ仮定として申すだけで、

そういうことはありますまいが、神様方が手籠めにした

罪を人間に償うようなことにでもなれば、あなたにしても

ポセイドンにしても、また天空を統べるゼウスにしても、

無法の償いを支払うために、御社を空にしておしまいに

なりましょう」。

## VIII. 神に関する真理に関して参照されるべきは 預言者たちであること。

### § 77-81

77, 1) さて、われわれが順序の上で先に予定しておいたこれ以外のことが

らのうち、預言者の書に関して論ずるべき時がきた。預言はわれわれに対し、神への敬心の念への発端を明確な形で提示し、真理の基礎付けを行ってくれるからである。神的な書は、一また思慮ある生き方にしても、もしそれが救いのための近道であるならば一、虚飾や外面的な美辞、饒舌、迎合などを排し、悪事にあえぐ人間を立ち上がらせ、この世のはかなさを看過し、唯一の同じ声でもって多くを癒し、災いをもたらず迷妄よりわれらを遠ざけ、眼前の救いに向けてはっきりと勧告する。2) ではかの女預言者、『スィビュッラの第一の書』に、救いの歌を歌ってもらおう。

「見よこの男は、万人に明らかで、迷いなき人。

来たれ、汝ら。暗闇や迷妄をいつまでも追い求めることをせずに。

見よ、太陽の麗しきかんばせもつ卓越した光が輝く。

知れ、そしてあなた方の心のうちに智慧を置くがよい。

神は唯一、雨、風、地震をもたらし、

稲妻、飢餓、疫病、痛ましき心痛、

雪、氷を起こす方は。個々に何故数え上げる必要があるのか。

彼は天を統べ、地を治め、自ら君臨する」

(『スィビュッラの託宣』 1, 28-35)。

3) 彼女はすこぶる靈感に満たされて迷妄を闇になぞらえるとともに、知識を太陽と神の光にたとえ、双方を比較のうちに置いて選択を教える。というのも虚偽は、単に真理と対峙させるだけで消尽するというわけではなく、真理を用いることによって力で退散させられるからである。78, 1) 預言者のエレミヤは、知恵にあふれて一というよりもむしろエレミヤの中で聖霊が一神を開示した。「〈わたしはただ近くにある神なのか〉と主は言われる。〈遠くからの神ではないのか。もし誰かが何かを隠れて行ったとして、わたしが彼を見つけられないとでもいうのか。わたしは天と地を満たしているではないか〉と主は言われる」(エレミヤ23, 23-24)。2) またイザヤを通して主はこう言われる。〈誰が、手の幅で天を測り、升で地の塵を量る者があるのか〉(イザヤ40, 12)。神の偉大さを目にして、驚嘆するがよい。われわれは、預言者が次のように述べる方に拝礼しようではないか。〈あなたの御前に山々は震える。火を前にして蠟が溶けるように〉(イザヤ64, 1以下)。預言者は言う。この方こそ神だ、と。〈天はその方の座、大地はその方の足台〉(イザヤ66, 1)。〈もし神が天を開けば、振動があなたを捕らえるだろう〉。3) あなたは、預言者が偶像に関しても何と言っているかを耳にしたいであろうか。〈彼らは日の下に晒され、亡骸

は天の鳥、地の獣どもの餌となって、彼らが愛し、仕えた太陽や月の下で朽ちるであろう。そして彼らの町は焼き尽くされるであろう〉(エレミヤ8, 2, 41, 20, 4, 26)。4) 彼は言う、それらとともに諸元素も宇宙も破滅するであろう、と。彼は言う。〈大地は古び、天は過ぎ行くだろう〉。〈だが主の言葉は永遠に留まる〉。79.1) ではかの神が、モーセを通して自らを開示しようと望む際はどうかであろうか。〈よくよくあなた方は知るがよい。わたしは〈ある神〉であり、わたしをおいて他に神はいないということを。わたしは殺し、また活かしめる。わたしは打ちのめし、また癒す。わたしの手から取り去られる者はいない〉(申命記32, 29)。2) だがそればかりでなく、あなたは他の神託にも耳を傾けてみたいか。あなたはまったく預言者的な合唱隊、モーセの預言者隊を持っている。ホセアを通して、聖なる霊は彼らにどう言っているだろうか。わたしは次のように言うのをためらわないだろう。〈見よ、わたしは雷電を奪い、風を起こす〉(アモス4, 13)。その両の手は天の軍勢を打ち立てた。3) さらにまたイザヤも(彼の声もここであなたに思い起こしてもらおう)、次のように語る。〈わたしは在る、わたしは在る、と主は言われる。それは正義を語り真理を告げる方。集い、来たれ。ともに思いを致せ、異民族から救われた者たちよ。木を取り去る者たちはおのれの印を知らず、彼らを助けることのできない神々にぬかずいている〉(イザヤ45, 19以下)。4) そのやや後で、預言者はこう語る。〈わたしは神、わたしをおいて正しき者はいない。わたしのほかに救い主はない。わたしに立ち返れ、地の果てに至るまで、すべての民は救われよ。わたしは神であり、それ以外ではない。わたしは自分にかけて誓う〉(イザヤ45, 21-23)。5) 一方預言者は、偶像礼拝者たちに対しては憤りを露わにし、〈あなた方は主を何になぞらえようとするのか。あるいは主を何の似像に似せようとするのか。職人は偶像を鋳て造り、金細工師は、金を鋳て金箔をかぶせるではないか〉(イザヤ40, 18-19)と述べている。6) あなたがたはなお偶像礼拝者なのか。ただ今でも、威嚇には留意せねばならない。なぜなら彫られた像、手で作られた画像が叫び出すかも知れないし、むしろそれらに信を置く人々がそうするかも知れないのだから。質料は感覚を持っていない。預言者はさらに語る。〈主は人の住む町々を揺るがし、全世界をその手で巢のごとくに上げる〉(イザヤ10, 14)。80.1) ではあなたに、智恵を受けたヘブライの子供たちから、智恵の神秘と言葉を告げることにしよう。〈主はその道の初めに、自らの業としてわたしを創られた〉(箴言8, 22), あるいは〈主は智恵を授け、知識と理解とはその御顔から来たる〉(箴言2, 6)。2) 〈いった

いいつまで、弱気な者よ、横たわっているのか。いつ眠りから目覚めるのか。もしあなたがためらうのであれば、あなたに対する刈り入れが泉のようにあなたに來たるであろう〉（箴言 6, 9 ; 11）。それは父祖の言葉、優れた灯、光、信、そして救いをすべての人にもたらす主。3）なぜなら、エレミヤが言うように〈主は大地を自らの力のうちに創造し、世界を自らの智慧のうちに立てる〉（エレミヤ 10, 12）からである。智慧、すなわち主の御言葉は、偶像の前にひれ伏すわれわれを、真理に向けて立てる。4）そしてこれこそ逸脱からの最初の復活なのである。ここから、あらゆる偶像崇拜を避けさせるべく、神の息吹を受けたモーセがいとも美しく、こう叫んでいる。〈イスラエルよ聞くがよい。あなたの神、主は唯一である〉。そして〈あなたの神である主を拝し、彼だけに仕えよ〉（申命記 6, 13）。5）おお人間たちよ、いまや、ダビデによるかの幸いなる詩篇を理解するがよい。〈子を抱擁するがよい、主が憤らぬように、主の道を踏み外すことのないように。主の怒りは瞬く間に燃え上がる。主に信を置く者はみな幸い〉（詩篇 2, 12）。81. 1）すでに主はわれわれをいたく憐れみ、救いの歌を、いわば行進のリズムでわれらに与えた。〈人の子らよ、いったいいつまであなた方は頑なな心でいるのか。何のためにあなた方は虚無を愛し、偽りを求めるのか〉（詩篇 4, 3）。2）ここで〈虚無〉とか〈偽り〉とは何であろうか。主の聖なる使徒が、ギリシア人を批判しつつあなたに説明してくれよう。〈彼らは神を知りながら、神として讃えようとせず、感謝も捧げずに、むしろ自らの虚しい議論のうちに虚無と成り果ててしまった。そして神の栄光を、滅び行く人間の類似像と取り換え、創造者を描いて被造物に仕えた〉（ローマ 1, 21, 23, 25）。81. 3）この方こそ神であり、この方こそ〈初めに天と地とを創った〉（創世記 1, 1）方なのである。それに対してあなたは神のことを考えず、天に対してひざまずく。どうして不敬虔でないことがあろうか。4）もう一度、次のように語る預言者の声に耳傾けるがよい。〈太陽は陰り、天は闇となる。一方全能者は永遠に輝き、天の諸勢力は揺らぎ、天は皮のごとくに引き伸ばされて隠され、あるいは縮み上がる〉（『ペトロの黙示録』？）—これは預言者の言葉である。〈そして大地は主の御顔から逃げ去る〉。

## IX. 神は自らのロゴスを通してわれわれを彼へと呼ぶこと。

### § 82-88

82. 1）わたしはあなたに、幾千の文献を提示することができる。その文献

とは、不完全なものとならぬように、〈一点一画も過ぎ去ることはない〉(マタイ 5, 18)。というのもこれを語っているのは主の口、聖霊なのであるから。主は言われる。〈わが子よ、主の教えはゆめ軽んじてはならぬ。また主によって非難されることがあってはならぬ〉(箴言 3, 11)。2) おお、なんと溢れんばかりの人間愛であることか。弟子に対する師のごとくではなく、召使に対する主人のようでもなく、人に対する神のようでもなく、〈温厚な父親のごとくに〉、神は子らに訓戒する。3) その後、モーセは御言葉について聞き〈わたしはおののき、震えている〉(ヘブライ 12, 21; 申命記 9, 19)と告白するが、あなたは神的な言葉を耳にしながら恐れることを知らないのか。もだえ苦しまないのか。賢慮をもって、学び尽くすことに熱心であろう、つまり、救いに熱心であろうとしないのか。すなわち、怒りを恐れ、恵みを愛し、希望を求めて、裁きを避けようとししないのか。4) おお、わが若者らよ、来たれ、来たれ。〈もしもう一度子供のようになり、生まれ変わらなければ〉、聖書が言うように、あなたは真に在る方である御父を受け入れることはできない、つまり〈天の王国に入ることは決してできない〉(マタイ 18, 2; ヨハネ 3, 5)。ではどのようにして、天国に入ることが異邦人に許されるのだろうか。5) といっても思うに、あなたが帳簿に記され、自由な市民となり、父を受け入れたときに、〈父に属する人のうちに〉(ルカ 2, 49) 入り、そのときに天の国を受け継ぐに適う者とされ、父祖伝来の国を、正真正銘の子、〈愛された子〉とともに与えることができるのである。6) これこそ、幾多の善き子らより成る〈初穂の教会〉であり、これこそ〈天の国に書き記された初子〉であって、幾万の天使たちとともに祝祭に参加する者たちなのだ。7) われわれは、初子たる神の秘蔵っ子であり、初めに生まれた嫡出の息子たちであり、他の人々に先駆けて神を知り、最初に罪を免れ、最初に悪魔と絶縁した者たちなのである。83. 1) いまや、神が人間愛に満ちているのと同じだけ、ある人々は神から遠ざかっている。というのも神は、われわれが奴隷を脱して子となることを望んでいるにもかかわらず、彼らは自らがすでに子であるとも豪語しているのである。おお、良識のはなはだしき欠如よ！ あなたがたは主を辱めているのだ。2) 主は自由を約束しているにもかかわらず、あなた方は隷属へと猛進する。主は救いを恵みとして賜るにもかかわらず、あなた方は死へと堕ち行く。主は永遠の生命を賜るにもかかわらず、あなた方は懲罰を待っている。しかしあなた方が待っているのは〈火〉であり、〈その火とは、主が悪魔と自らの天使たちに準備したものである〉(マタイ 25, 41)。3) それゆえに幸いなる使徒は、こう述べている。〈わ



たしは主において証言する。決して異邦人と同じように歩んではならない。彼らは心の虚しさのうちに歩み、知性において闇に閉ざされ、神の生命から遠ざかっている。それは彼らのうちにある無知のため、彼らの心の頑なさのゆえである。彼らは絶望のうちに自らを放縦に委ね、あらゆる不浄と食欲の業に走っている（エフェソ 4, 17-19）。

84. 1) このように証聖者が人間の無思慮を論駁し、神のあり方を叫んでいるのであるから、不信者に対しては、裁きと断罪以外の何が残されていようか。主は倦むことなく、勧め叫び、勧告し覚醒させ、掟を定める。眠りから目覚めさせ、さまよう者を闇から立ち上がらせる。2) 主は語る。〈目覚めよ、眠れる者よ。死者のうちから立ち上がれ。主なるキリスト〉、復活の太陽が、〈あなたに輝き出でるであろう。夜明けの明星よりも先に生まれ、自らの光線で生命を賜る方が〉（エフェソ 5, 14）。3) もう、御言葉を蔑ろにしてはならない。また人知れず自らを蔑ろにしてはならない。というのも聖書にはこう記されている。〈今日、もし主の声を耳にしたなら、あなた方の心を頑なにしてはならない。荒野での試みの日に反抗的であってはならない。あなた方の父祖たちは、その砂漠で試みを受けたのだ〉。4) しかるにこの試みが一体どのようなものであったのかを知ろうと望むのであれば、聖霊があなたに説明してくれよう。使徒は語る。〈彼らは40年間に及ぶわたしの業を知った。それを通してわたしはその世代に対して憤り、述べた。彼らは心につねにさまよっている。彼らは、わたしが怒りのうちに誓ったように、わたしの道を知らない。彼らが、わが憐れのうちに入ってくれるなら〉（ヘブライ 3, 7-11）。5) この威嚇を見よ。この勧告を見よ。この敬意を見よ。何故われわれは、さらになお恵みを怒りに換えたりなどしようか。何故聴覚を開いて御言葉を受け入れ、浄らかな靈魂のうちに神を招き入れずにいられようか。かの約束の恵みは偉大である、もし今日、彼の声に耳傾けるなら。しかるにこの〈今日〉は、もし〈今日〉と名づけられるのであれば、日ごとに増大してゆく。6) 完成の日まで、〈今日〉と学びとは続くであろう。そして真の「今日」、すなわち欠けることなき神の日は永遠に向けて伸びる。われわれは神的な言葉の声に聴き従おう。〈今日とは永遠の時代の似像、一日とは光の象徴、御言葉は人間にとっての光、それを通じてわれわれは神性を仰ぎ見る〉（cf. ヨハネ 1, 9）。85. 1) 実に適わしくも、信じる者また聴き随う者に恵みは溢れるが、不従順なる者迷える者、その心に、ヨハネが真っ直ぐにし整えることを告げた主の道を知らぬ者、彼らに対して主は怒り威嚇する。2) 実に、古のユダヤの、荒野に迷える者たちは、威嚇の目

的を象徴的に捉えていた。というのも彼らは、不信仰のゆえに安らいに入ることができないと言われていたからである。それが後にモーセの後継者に聞き従うようになり、ひいてはイエスに信を置く以外には救われえないということをして、行いをもって学び取ったのである。3) 主は人間愛に満ちており、弁護者を遣わして、すべての人々を〈真理の認識〉へと招いている。では〈認識〉とは何であろうか？ それは敬神 (theosebeia) である。パウロによれば〈敬神はあらゆる事柄にとって有益である。なぜなら現在の生命と来たるべき生命を約束するものだからである〉(Ⅰテモテ 4.8)。4) では人間たちよ、永遠の救いが売りに出されたと仮定しよう。一体いくらで買えると思うのか？ たとえ誰かがパクトロス川全体の、神話上の金の流れをもってしようとも、救いに適うだけの額を計上することは不可能であろう。86. 1) だが心を病まぬがよい。あなた方には、もし望みさえすれば、自らの宝物庫に、極めて高価な救いを買取ることができる。それは愛と、生命への信によってであり、その価格は理性的なものである。このような崇敬を、神は快く受け取る。なぜなら「われわれは、生ける神に希望を置いているからであり、その方はすべての人間、特に信篤き人々の救い主だからである」(Ⅰテモテ 4, 10)。2) しかるにそれ以外の人々、すなわちさながら海中の岩に生える海藻のごとくにこの世に固執し、不死性を軽んじる人々は、ちょうどイタケの老人 (オデュッセウス) のように、真理また天の故郷、あるいは真に〈在る〉方の光ではなく、単なる煙を望むのである (『オデュッセイア』 1, 57ff.)。一方敬神は、可能な限り人間を神に似たものとし、神をふさわしき師として描き出す。この神とは、相応しくも神に等しきものとされる唯一の人間でもある。87. 1) この神的なる教えを、かの使徒は真に知り尽くしてこう述べている。〈おおティモテオスよ、あなたは幼き日々から、聖なる書を学び、それらがあなたをキリストのうちに信を通して救いへと知恵づけることを知っています〉(Ⅱテモテ 3, 16-17)。というのも真に、聖化し神化させる書というものは聖であるから。2) これら聖なる文字や音節から構成されている書・巻を、この連脈で同じ使徒は〈神の息吹を受けた〉と呼んでいる。〈それは教え、吟味、矯正、義のうちに教育にとって有益である。それは神の人が、あらゆる善き業に支えられて完全な者となるためである〉(Ⅱテモテ 3, 16-17)。3) 他の聖なる人々の誰も、この勧告に関して加えるべきものを持たないだろう。それは、人間愛に満ちた主自身にも匹敵するほどである。というのも人間が彼によって救われるのは、まさしくこの業のみによる以外にないからである。さらに先駆者は、自ら救いに向けて促

しつつかう叫んでいる。〈神の国は近づいた〉（マタイ 4, 17）。恐れに瀕する人間たちに対し、彼はこうして促しを行っているのである。4）主の使徒もまた、これと同じようにマケドニア人たちに対して勧告を行い、神の声の解釈者となっている。彼は言う。〈主は近づいた。身を正しく保ち、虚しき思いに囚われることなかれ〉（フィリピ 4, 5）。だがあなた方はあまりに臆病で、否むしろ不信仰なので、主御自身にも、キリストのためにこのように縛られているパウロにも従わない。〈味わい、見よ、神が有用な方であるということ〉（詩篇 33, 9）。88. 1）信は導き、試練は教え、聖書はこう教育するであろう。〈見よ、おお子供たちよ。わたしの言葉に聴くがよい。わたしはあなた方に、主に対する恐れを教えよう〉（詩篇 33, 12）。しかる後、すでに信の域に達した者たちに、次のように簡潔に付言している。〈生命を望む人、善き日を見ることを愛する人とは何者か〉（詩篇 33, 13）。われわれは答えるであろう、〈われらは善にひれ伏す者、善を渴望する者〉だと。2）だから、聞くがよい、〈遠くにある者よ〉。〈近くにある者よ〉、聞くがよい。御言葉は、誰に対しても隠されてはいない。光は共通であり、すべての人を照らす。御言葉のうちには、キンメリオイ人は出てこない（『オデュッセイア』 11, 14以下）。われわれは救いに向けて、再生に向けて努力しよう。われわれは、多数であっても、唯一なる実体の一致をもって、唯一なる愛に向かって励もう。われわれは善を実行することをもって、類比的に一致を追求し、善き一者を追い求めようではないか。3）しかるに幾多のものからの一化は、多性と散逸から神的な調和を得て、一なる共鳴となる。それは一人の指揮者と師なるロゴスに従い、まさしく真理そのもののうちに安らって、〈アッパ、父よ〉と叫ぶ。神はこれを、自らの子らからの真なる第一の声として歓迎するのである。

**X. 真理の声を聞くこと、および真理がわれわれに提供する  
救いを受け入れることに関しては、  
われわれは何ものにも妨げられてはならないこと。**

**§ 89-110**

89. 1）だが、父祖たちよりわれわれに伝えられた習慣を覆すのは理に適っていない。さらにまた、なぜ最初食物である乳を用いないいわれがあろうか。乳とは乳母たちが、われわれを誕生の瞬間から馴らしてきた食物であるというのに。また、何故われわれは父祖伝来の家産を増やしたり減らしたりして、受

け取ったのと同じ状態で守り抜くことをしないだろうか。あるいはもはや、父祖の懷に戻したり、われわれが子供だったころ、母親から育てられながら笑いを誘っていた他の事柄をさらに完成させたりせず、むしろわれわれ自身を、しかも導いてくれる善も手に入れずに、正そうというのだろうか。2)航海にあっては、航路を逸れることは、思いがけぬ甘美な経験をもたらすかも知れないが、それでも有害で危険である。人生にあっては、劣悪で情動に満ち、神を否定する習慣を止め、たとえ父祖たちが喜ばないにしても、真理に向かい、真に〈在る方〉である父を求めようではないか、習慣を言わば麻薬のように打ち棄てて。3) というのも手がけるべき仕事のうちでもっとも麗しきものは、敬神の念が、狂気と三重の不幸をもたらす習慣によって憎み嫌われてきたのだということをあなた方に示すことなのだ。なぜならこの敬神の念は、神から人間の族に与えられた賜物のうち、これよりも偉大なものはないからである。このような恵みが憎悪されたり禁じられたりすることは、もしわれわれが習慣によって足もとをすくわれない限り、そして、われわれの耳に栓をしておけば、ありえないはずだからである。ちょうど言うことを聞かない馬のように、あなた方は手綱を拒み、はみを噛み切って、御言葉から逃れた。そしてあなた方の人生の御者であるわれわれを振り落とそうと望み、無思慮から破滅の崖へと赴いて、神の聖なる言葉を呪わしきものと見なしたのである。90.1)このようなわけで、ソフォクレスによれば、選びの褒賞はあなたがたに伴う。

「破滅した理性、使えない耳、虚しき思考」(断片863)。

あなたがたは、次のことがすべてに勝って真理であるということを知らないだろうか。すなわち、善良にして神を畏れる人々は善き褒賞を備え、善を尊重するのに対し、それとは逆に悪辣な人々は、相応しき罰に与かり、その処罰は悪の首謀者にまで及ぶ、ということ。2) 実に、預言者のゼカリヤは彼に対してこう威嚇を行っている。〈エルサレムを選んだ主はおまえを責める。見よ、ここにあるのは火の中から取り出された燃えさしではないか〉(ゼカリヤ3, 2)。人間にとって、死を自ら望むことより他に、さらに奇妙な願望はあるだろうか。このように死をもたらす罠に、彼らは何ゆえに逃れるのだろうか、死の際には燃やし尽くされ、その反面、習慣ではなく神に従って美しく生きることができるというのに。3) 神は生命を賦与するが、悪しき習慣は、この世からの解放の後、後悔するも虚しく、罰をもって報いられるのだ。〈苦しみによって子どもでも知る〉(ヘスィオドス『農と暦』218)、迷信が破滅させ、敬神の念が救うということ。

91.1) あなた方は誰であれ、次のことを知るがよい。すなわち、偶像に仕える人々は、髪は汚れ、汚く裂け目だらけの衣のゆえに嘲られ、沐浴はまったく知らず、爪の先端は獣のように尖り、恥部の大部分は取り除かれ、その行動でもって、偶像の神域とは、墓が監獄に等しいということを示しているのだということ。わたしには、彼らは嘆いているのであって、神々に祭祀を執り行っているのではなく、敬神の念よりもむしろ憐れみに値することを被っているのだと思われる。2) あなた方はこれを目にしてもなお、盲目のうちに留まり、万物の治め主にして宇宙の主である方を見ようとしないのか。あなた方はこの世の監獄から脱出し、天より来たる憐れみに逃れようとはしないのか。3) 神は、その豊かな人間愛により、人間を抱擁される。それはちょうど、雛が巢から落ちると、母鳥が飛び出すのと同様である。そしてもし地を這う獣が雛を飲み込むと、

「母は愛しい子らを悼んで、あたりを飛び廻る」（『イリアス』2, 315）。

これに対して父なる神は、被造物を捜し求め、墮落を癒し、獣を追い払い、雛をふたたび取り上げて、巢に向かって飛び立つよう促す。92.1) その後、すでに彷徨っていた犬どもは、においを嗅ぎ付けて主人の後を追い、馬は笛音ひとつで乗り手を振り落として主人に従う。〈だが〉、彼は言う。〈牛は飼い主を知り、ロバは主人の飼い葉桶を知っている。けれどもイスラエルはわたしを知らない〉（イザヤ1, 3）。では主とは何であろうか。悪事を謀らず、それどころか憐れみ、さらには回心を求める方である。2) わたしはあなた方に問いただしたい、あなた方人間は神の最終被造物として、神から靈魂を授かり、真にまったく神のものとして、他の主人に仕えるように定められているにもかかわらず、それでもなお、王ではなく僭主に、善ではなく悪に仕えるというのは、不合理だとは考えられないか、と。3) 誰が、おお真理にかけて、賢慮を持ちながら善を棄て、悪に留まることなどしようか。誰か、神の許を離れ、奇神と共棲しようとする者などありえようか。誰が、神の子となりうるにもかかわらず、奴隷であることを喜びとするだろうか。あるいは誰が、天国の住人として、樂園を耕作し天を闊歩して、混ぜものなき生命の泉から汲み、かのエリヤのように、光り輝く雲の跡を疾駆して、救いの雨を見つめることができるにもかかわらず、冥土を追い求めるだろうか。4) しかるにある人々は、蛆虫か何かのように、快樂の淵である沼や泥の周囲を這い回り、無益で思慮に欠けた放縱を飲み干す。彼らは豚のような人間だと言えよう。なぜなら豚は、デモクリトスによれば、〈浄らかな水よりも泥を喜びとし、がらくたを食る〉（断片147）と

言われるからである。5) だからわれわれは、奴隷状態に陥ることなく、豚にならずに、真正なる〈光の子として〉(エフェソ5,8), 光に向かって目を上げ、見つめようではないか。ちょうど太陽が鷲を駆逐するように、主がわれわれを庶子だと論破することのないように。93.1) だからわれわれは回心し、無学から知へ、無思慮から思慮へ、無節度から克己へ、不正から正義へ、無神論から神へと立ち返ろう。2) 神に向かって逃れる冒険は美しい。義を愛し求める者たち、それは永遠の生命を追求するわれわれであるが、彼らは他の多くの善き事どもを享受することができる。それは神がイザヤを通して次のように語り、ほのめかしているとおりでである。〈主に仕える者たちには嗣業がある〉(イザヤ54,17)。3) 実に、この嗣業は美しく愛すべきものである。それは金でも、銀でも、衣服でもない。それらはこの世で、シミや盗人が、卑しき富を羨望の眼差しで付けねらっているものである。そうではなく、この救いの宝物は、われわれが御言葉を愛する者となって憧れ求めるべきものであり、われわれによるこの世での優れた業を昇華させ、真理の翼に載せて羽ばたかせるものなのである。94.1) この嗣業を、かの神の永遠なる掟は、われわれに永遠の贈り物として豊かに託された。愛に満ちたわれらの父は、真なる父として、勧告し忠言し、教育し愛することを止めない。なぜなら救いの業を止めず、最善のことを勧める方であるから。〈あなたがたは義しき者であれ、と主は言われる。渴ける者たちは水端に来るがよい。金銭を持たぬ者たちは、来たりて求め、代価なしに飲むがよい〉(イザヤ54,17;55,1)。2) この浄め、救い、照らしへと招きつつ、父はほとんど叫ばんばかりにこう語る。〈わたしはあなたに、大地、海を与える。子よ、天も、そのうちにあるすべての生き物もあなたに恵む。おお子よ、ただ父を渴き求めよ。神はあなたに、無償で示される。真理は売りに出されるものではない。神はあなたに、飛ぶもの、泳ぐもの、大地に住むものを与えられる〉。3) これらは、あなたの感謝に満ちた喜びのために、御父が創られたものなのだ。庶子は、銀で買われるだろう、それは破滅の子であり、〈マモンに仕える〉ことを選び取る者だ。だが父はあなたにあなたのものを委ねる。それはあなたが嫡子、父を愛する子だからだ。その子を通して父は今なお働いておられる。その子だけに、父はこう語って約束された。〈土地は固めるために破壊されてはならない〉。というのも、破滅に定められているわけではないからだ。〈大地はすべてわたしのものである〉。もしあなたが神を受け入れるなら、あなたのものでもあるのだ。4) ここから、聖書は相応しくも信じた者たちにこう福音を述べ伝える。〈主の聖なる者たちは、神の栄光とその力を嗣業

として受け継ぐであろう）。おお、幸いなる者よ、どのような栄光なのか、わたしに語るがよい。それは〈目が見たこともなく、耳が聞いたこともなく、人の心にのぼったこともないことだ。彼らは主の王国にあって、永遠に喜びに生きる。アメン〉。95.1） おお人間たちよ、神による恵みの告知を手にするがよい。懲罰とは異なる威嚇を耳にするがよい。それらによって主は救い、恐れと恵みによって人間を教育するのだ。われらは何故ためらうことがあろうか。何故懲罰を回避しないでいられようか。何故賜物を受け取らずにいられようか。何ゆえより優れた方を選び取らずにいられようか、悪に代えて神を。そして偶像崇拜ではなく智慧を先立たせ、死ではなく生命を勝ち取らずにどうしていられようか。2） 彼は言う。〈見よ、わたしはあなたがたの顔の前に、死と生命とを置いた〉（申命記30, 15）。主は、生命が選り取られるように試み、あなたに対し父として、神に従うように勧告する。主はこう述べる。〈というのもしあなたがわたしの言葉を聞き、望むなら、あなた方は地の富を食するだろう〉（イザヤ 1, 19）、これは従順の恵みである。〈しかるにもし、あなたがわたしの言葉に聴き従わず、望みもしないなら、剣と火があなた方を食い尽くす〉。これは反逆に対する裁きである。〈というのも主の口がこれらの事柄を語ったのだから〉。主の言葉とは真理の法である。3） あなた方は、わたしが善き忠告者となることを望むだろうか。だがむしろ、あなた方は耳を傾けるがよい。わたしは、もしできるなら、指し示そう。おお人間たちよ、もしこの善そのものに関して思いを致すなら、あなた方は人に内在する信を呼び起こさねばならない。これはわれわれにとって内発的な、信頼できる証人であり、最善の事柄を適確に選択し、それに付き随うべきかどうかに苦慮する必要がない。4） 例を示そう。酩酊に陥るのが正しいかどうか、それはよく立ち止まって考えねばならない。だがあなた方は、熟慮する以前にもう酩酊しているのだ。また、倨傲な振舞いをなす際にも、そうすべきかどうかよく見極める前に、もう一瞬のうちに傲慢に陥っている。もし敬神の念をもって行動すべきなのであれば、ただ求めねばならない。そしてこの智慧ある神とキリストとに聴従すべきなのであれば、神に相應しいものが何であるか考えつかないとき。あなた方はこれを熟考と省察に適うものとすべきである。96.1） あなた方は思慮を持つために、いわば酩酊に身をゆだねるようにわれらに信を置くがよい。生きるために、たとえ傲慢であっても信を置くがよい。そして徳の明瞭なる信を見つめて聴従することを望むのであれば、さあ、わたしはあなたがたに、御言葉に関する納得を豊かに提示しよう。2） しかるにもうあなた方は、かつて伝授を受けた父祖

伝来の習性が、あなたがたを真理から引き離すべきではないのだから、この後に続く言葉を、よく聞くがよい。また、この名前に対する言わば恥ずかしさが、あなた方を捉えることのないようにされたい。恥ずかしさは〈人に大変害をなす〉(『イリアス』24, 45; ヘシオドス『農と暦』318) ため、救いから逸らせてしまうかもしれないのである。3) だから、真理のスタディウムにおいて、公然と衣を脱ぎ捨て、正々堂々と闘おうではないか。ここでは聖なる御言葉が審判員、万物の治め主が主催者である。われわれの前に置かれている褒賞は小さからぬもの、不死性である。4) もう、広場のごろつきども、迷信に取り付かれた無神論者の群集が、あなた方に対して何を言おうかなど、いかばかりなりとも気にかけることはやめよ。彼らは無思慮と狂気のために、断崖まで追い詰められている。彼らは偶像の製作者、石に屈拝する者たちなのだ。彼らは人間たちを神格化しようと躍起になり、マケドニア人アレクサンドロスを13番目の神と名づける。そのアレクサンドロスとは〈パピュロンが、死すべき存在であることを証明した〉(『スピュッラの託宣』5, 6) にもかかわらず。97. 1) わたしはかのキオス島のソフィストに賛嘆する。その名はテオクリトスである。アレクサンドロスの死後、かのテオクリトスは、人間たちが神々に関して有している虚しき思いなしを嘲笑し、市民たちに対してこう述べた。〈人間たちよ、頑張るのだ。人間たちより先に神々が死ぬのをあなた方が見届けるまでは〉。2) しかし目に見える神々、あるいはこれら作られたものの群れにひれ伏し、それと戯れる者は、かの奇神たち自身よりもはるかに哀れである。なぜなら神はいかなる場合にも決して、奇神のように不正を働いたりせず、可能な限りにおいて最も正義に満ち、われわれのうちの誰かが可能な限り正しくあったとして、彼とは似ても似つかぬほど正しい方なのである。

3) 「物づくりの民よ、みな道を進むがよい。

ゼウスの娘、燃える目をした産物の女神に対して、

扇を立ててひれ伏す者たちよ」(ソフォクレス断片760)。

石切り工にしてその拝礼者とは、愚かも甚だしい。98. 1) あなた方のフェイディアス、帰還者の一人ポリュクレイトス、プラクシテレスはたまたアペッレス、さらには機械的な技芸に携わった人々は、大地の地上的な働き手である。というもある預言の書は、この地上の事物は、彫像に信を置くときには不幸である、と言っている。2) では一わたしは呼び続けよう、もう一度彼ら卑しい職工たちに登場願おう。彼らのうち誰一人として、息吹のある像を作った者はおらず、また大地から、柔らかき体を作り上げた者もない。誰が骨髄を



与え、誰が骨を据えただろうか。誰が神経を張り、誰が血管をめぐらせ、誰がそこに血を注ぎ込み、誰が皮膚で覆っただろうか。彼らのうちの誰か、どこかに、視力を持つ眼を作った者があっただろうか。誰が靈魂を吹き込み、誰が正義を賜物として与えただろうか。誰が不死性を約束しただろうか。3) 万物の創り主である方、至高の技芸の父だけが、人間をそのような靈魂を持つ像として作り上げたのだ。しかるにオリュンポスの王、あなた方のゼウス、像の像は、真理からは遠く外れ、アッティカ人たちの手になる物言わぬ作品なのだ。4) 〈神の言葉は神の似像〉（というのも神の御言葉は、理性の真正なる子であり、光の範型たる光だから）、しかるに真理を備えた人間は御言葉の像、人のうちなる理性、それゆえ〈神の像に従って、神の似姿として〉（創世記1, 26）でき上がった、と語られるのである。というのも人間は、心のうちなる思慮によって神の言葉になぞらえられるのであり、そのゆえに理性的なのである。しかるに人に似せて作られた目に見える人間、大地的で大地製の像は、真理からは遠く離れていて、つかの間の鑄型に見える。99.1) かくして私には、人生とは狂気に相満ちたものであって、質料をめぐってかくも多大なる尽力を注ぎ込んだものであったように思われる。すなわち習慣とは、虚しき榮誉によって消尽され、あなた方をして隷属と非理性的な業に飲み込むものである。2) だが不法な儀礼と狡猾な祭義の原因は、無知である。なぜなら、人類の許に破滅的な死と呪わしき偶像の装備を持ち込んだのは、無知だからである。この無知は奇神の多くの形態を考え出し、それに従う者たちに、長きにわたる死の刻印を刻み込んだ。3) だから、理性的な水を受けるがよい。穢れに取り付かれた者たちよ、身を洗うがよい。あなた方自身を、真理の掣によって習慣から洗い清めるがよい。身を淨らかにして天に昇らねばならない。最も共通なこととして、あなたは人間なのだ。あなたの創り主を求めよ。最も固有なこととして、あなたは子なのだ。あなたの父親を認識せよ。4) それでもなお、あなたは罪のうちに留まり、快樂に身を委ねるのか。主は誰に向かって〈天国はあなた方のものである〉（マタイ5, 3）と語るだろうか。あなた方のものである、もしあなた方が望むならば。ただしそれは、あなた方が神に向けて自由意志を有した際のことである。もしあなた方が単に信じ、告知される福音の眼目に従おうと望むのであれば、あなた方のものである。その告知とは、ニネウエの人々が聞き従い、予告された破壊に代えて、真正の回心によって美しき救いを掴み取ったものである。100.1) そこで人は言うだろう、「わたしは如何にして天に昇りうるのか」と。主は〈道〉である、〈細い〉が、それは〈天からの道〉であって、〈天に通ずる〉

道なのだ、と（マタイ 7, 13-14；ヨハネ 3, 13；31）。地上では細く、蔑まれる道であるが、天では広く、崇敬される道なのである。2）これまで御言葉を聞いたことのなかった者であっても、迷妄の弁明として無知を挙げればよい。だが、耳には聞いていても、靈魂のうちでは意図的に不従順を培っている。そして彼が思慮ある者のように見えれば見えるほど、彼の賢しさが悪の根源と化す。なぜなら彼は、思慮を反駁者として用い、最上のものを選択しなかったためである。人間として、彼は本来神に向かうように生まれついている。われわれは、馬を耕作するように強いることはないし、牡牛を狩に用いるために縛めることもせず、動物それぞれが生まれついた方向に向けて誘う。これとちょうど同じようにもちろん人間に関しても、天上世界を觀照するために生まれついている、真に天上的植物なのであるから、われわれは神の認識に向けて誘う。これは人間に固有の、卓越した特別な事柄なのであって、他の動物を凌駕する点なのである。敬神の念を永遠に向けての十分な路銀として備えるよう、われわれは勧告する。われわれは言う、耕すがよい、もしあなたが農夫なのであれば。だが耕しつつも、神を知るがよい。航海術を愛するのであれば、航行するがよい。だが天上の操縦士を呼び求めよう。従軍するとき、認識があなたを捉えるだろうか。正しきことを示す指揮官に聴くがよい。101.1）いわば酒と酩酊に鈍くなっているあなた方は、目を覚まし、注視して少しばかり考えるがよい。額ずかれている石はあなたがたに何を望んでいるのか、そしてあなたがたは質料のために、虚しくも何に出費しているのかと。あなた方は財産を無知に向けて、またあなた方が生きるための生命を死に向けて消尽しているのだ。あなた方は死だけを、あなた方の虚しき希望の限度として見出し、自分自身を憐れむことを知らず、またあなた方の迷妄を憐れむ人々に聴き従う備えもなく、悪しき慣習に隸属し、その慣習に立脚したまま、人生最期の息吹に至るまで、自発的に破滅への道を突き進んでいるのだ。2）〈光は世に来たが、人々は光よりも闇のほうを愛した〉（ヨハネ 3, 9）。この光は、救いにとって障害となるもの、すなわち倨傲、富、恐怖などを拭い去ることができる。次の詩句はこのことを喝破している。

「わたしはこんなに多くの財産をどこへ運ぼうか。

そして自分はどこを放浪しようか」（『オデュッセイア』13, 203以下）。

3）ではあなた方は、かの虚しき幻影を打ち棄て、慣習に別れを告げて、虚しき思いなしにこう言わないだろうか。

「偽りの夢よさらば、おまえたちは無ではないのか」

（エウリピデス『タウリケのイフィゲネイア』569）。

102.1) 何ゆえあなた方は、おお人間たちよ、テュコンやアンドキデス、アミュエトスのヘルメスを信じるのか。それが石に過ぎないということは、それがヘルメス像であるということと同様、万人に明らかなのである。そして光背や虹が神ではなく、大気や雲の状況に過ぎず、また一日や一月や一年、あるいはこれから構成される時間が神ではないのと同様に、それらの期間の各々を分かち形成する太陽や月も、神ではない。2) ならば、「審査」や「懲罰」や「正義」や「応報」などについて、正常に思考する者なら、これらを神々だと考える者が誰かあるだろうか。また「復讐」や「運命」や「宿命」に関してもそうであるし、「政治」や「名声」や、画家たちが盲目として描き出す「富」についても、これらはいずれも神々ではない。3) ならば、もしあなたが「慎しみ」や「性欲」や「性愛」を神格化するのであれば、これらに伴って「羞恥」「衝動」「美」「交合」も神でなければならなくなる。「眠り」と「死」とが、双子の神々であるなどとあなたが考えているとすれば、それはもっての外である。これらは生理的に動物に生じる情動なのである。また「運」「宿命」「運命」を女神たちと思うのも正しいとは言えない。4) もし争いや戦いが神々でないとすれば、アレスやエニユオも神々ではない。さらには、稲妻や雷電、雷雨も神々ではないとすれば、どうして火や水が神々であろうか。はたまた彗星や惑星が、なにゆえ大気の情動によって生じることがありえようか。一方、運命を神と呼ぶ者は、行動をも神と呼ぶがよい。103.1) ではもしこれらの事物、すなわち手で作られた、感覚を有さないこれらの模像の何一つとして神とは考えられないとすれば、われわれには、先慮とは、神的な力に属すと思われ、次のことに同意する以外には残されていないであろう。すなわち、真に唯一にして実在する神が、実在しているしこれまでも実在してきた、ということである。というのも、理解に欠けた人々というのは、マントラークとか、あるいは他の薬を服用した人々に似ているように思われる。2) だが神は、あなた方にいつの日かその眠りから目覚めて神を理解し、金、石、樹木、行為、情動、病氣、恐れなどが神だと思われられないように、と考えている。実に、〈多くを育む大地には、万に三倍する奇神が存する〉（ヘスィオドス『農と暦』252以下）が、彼らは〈不死なる者〉でも、〈死すべき者〉でもなく（というのも彼らは感覚にも、その結果死にも、与かっていないのだから）、人間にとっての石製の・木製の支配者であり、傲慢にも習慣のゆえに、人生を蹂躪しているのである。3) 彼は言う。〈大地は主のもの、地の充溢も主のもの〉（詩篇23, 1）。であればどうして、あなたは主のもの

中にあって恵みを満喫しながら、その主人を知らずにいられるというのだろうか。主はあなたに語る。〈わが大地を離れ去れ。わたしが与えた水、わたしが収穫した実りに触れるな。それに与かってはならない。人よ、神に食糧を返すがよい〉。あなたの主人を知れ。あなたは神固有の被造物なのだ。神固有のものが、どうして神以外のものとなって正当なことがありえようか。異化されてその固有性を喪失したものは、真理をも奪われるからである。4) あなたはニオベに似たあり方で、否むしろ、あなた方にもっと神秘的な仕方と語るとすれば、ヘブライの女性(古の人は、彼女を「ロトの妻」と呼んだ)に似たあり方で、無感覚状態に帰せしめられるのではないだろうか。われわれは伝承により、この「ロトの妻」が、ソドムを愛したがために石に化してしまったことを知っている。ソドムの住民は無神論者で、不敬虔に陥り、心頑なで愚かであった(創世記19章)。104.1) これらの声が、あなたに対して神から語りかけられているのだ、と考えるがよい。石や木や鳥や蛇を神聖だと考えてはならない、人間ではないのだから。むしろそれとはまったく逆に、人間とは真に神聖なるものと捉え、存在する事物は野獣でありまた石であると考えてるがよい。2) というのも、可哀想で哀れな人々は、カラスやコクマルガラスを通して神は叫ぶが、人を通しては黙るものだと考えている。かくしてカラスのことを神の使いとして崇敬する一方、神の人を迫害する。カアカアとも、ホーホーとも鳴かず、呼ばわる者をである。思うに、ロゴスに拠って人間愛のゆえに叫ぶ者に対して、彼らはその喉を非人間的な仕方と掻き切ろうと試みる。すなわち正義を呼び求める人を、天からの恵みを受けることも、懲罰を受けることもしない者どもがである。3) というのも、彼らは神を信じもせず、神の力を学び取ろうともしないからである。神の人間に対する愛は語りつくすことができず、悪を憎む思いは妥協を知らない。その怒りは、罪に対する懲罰を育む一方、人間愛は回心に対して良く報いる。神に由来する援助から無縁なものとされることほど、憐れを催すものはない。4) 目をえぐられ、耳を聞こえなくされることは、悪に対するそれ以外の懲罰に比して痛ましい。というのもそれによって天上的視覚を奪われ、あるいは神的な学びを剥奪されるからである。105.1) あなた方は真理に対しては手足を削がれ、理性において盲目である。理解に関しては鈍重で苦しむこともなく、憤ることもなく、天をも天の創造者をも見ることを望まず、万物の創造主にして父なる方を聞いたり学んだりすることを求めず、自由意志を救いに結びつけることをしない。2) というのも神の認識に勤しむ者には、何事も障害にはならないのだ。無教養も、貧困も、無名も、財産のなさも、

真に真なる智慧を〈青銅で打ち砕い〉（8, 534）たり、鉄で壊したりして換えてしまおうと望む者はあるまい。次の詩句がすべてにまさってこのことを良く伝えている。

3) 「有用なものは、どこででも救いをもたらすもの」

（メナンドロス断片786）。

というのも正義を渴望する者は、何も欠けたところのない方を愛する者と同様に、彼自身に欠けるものも少なく、他ならぬ神自身に幸いを蓄える。そこには虫も盗人も海賊もつかず、善きものの永遠なる与え主がおられるだけである。4) 一方あなた方は、歌を聞かせる人々も両耳を閉ざしたままの蛇になぞらえられて当然である。聖書にはこう記されている。〈彼らの心は、蛇にも似る。あたかも耳が聞こえず耳を閉ざしたコブラのよう。歌を聞かせる者の声にも耳を傾けない〉（詩篇58, 4－5）。106. 1) だがあなた方は、獷猛さを馴らし、温順なるわれらのロゴスを受け入れ、害となる毒を唾棄するがよい。それは特に、彼らに老齢を脱ぎ捨てさせうと同様に、あなたがたには破滅を脱ぎ捨てることを可能にさせるためである。わたしの言葉を聴き、耳を閉ざすことも、聴覚を止めることもなく、むしろ語られることを心に留めよ。2) 不死性の薬は甘い。あなた方は蛇の這い跡に留まるがよい。〈主の敵は塵をなめるだろう〉（詩篇72, 9）と聖書は語る。地面から空に向かって頭を挙げ、天を見上げよ。驚くがよい。義しき者たちの踵を見つめて〈真理の道〉に躓きを加えることは止めよ。3) 思慮ある者、害なき者となるがよい。おそらく主は、軽さの翼をあなた方に恵んで下さるだろう（預言には〈土質の者が翼を生やす〉（プラトン『ファイドロス』248c）と記されている）。洞窟を去り、天に住むためである。われわれはただ、全霊を込めて回心しよう。全霊において神を容れることができるためである。4) 主は言われる。〈民のすべての集いよ、主に希望を置くがよい。あなた方の心をすべて、主の前に注ぎ出そう〉（詩篇72, 8）。主は悪事と無縁の者たちに向かって語りかけ、憐れみ、正義で満たされる。人よ、信じるがよい、人であり神である方を。信じるのだ、苦しみを受け崇められる方を。5) あなた方、死者の奴隷たちよ、生ける神に信を置くがよい。すべての人よ、すべての人の神のみを信じるがよい。信じ、救いを褒賞として受け取るのだ。〈神を求めよ、あなた方の靈魂は生きるだろう〉（詩篇68, 33）。神を求める者は、自らの救いに心砕く。107. 1) あなたは神を見出したか。なら生命を有するだろう。では、生きるためにも求めよう。発見の褒賞は神の許なる生命である。〈あなたを捜し求める人は皆、あなたの許で喜び歓喜するがよい、

そしてすべてを通じ、〈神は讃えられてあれ〉と叫ぶがよい〉（詩篇69, 5）。不死なる人、正義の上に建てられた人間とは、神への麗しき讃歌である。その人のうちには真理の言葉が刻印されている。というのも、賢慮ある靈魂以外のどこに、正義が書き込まれるべきだろうか。では愛はどこに？ 慎しみはどこに？ 柔和さはどこに？ 2）思うにわれわれは、これらの神的な書を靈魂に刻み込み、智慧を美しき出発点と見なして、人生の一部がどのような浮沈にさらされようとも、この智慧が救いのための防波堤であり波除けだと考えるべきであろう。3）この智慧によってこそ、父のもとに駆け寄る子どもたちにとって父はよき父親となり、また子を思う両親にとって、子はよき子どもとなるのである。また花婿のあり方をよくわきまえる夫は、妻にとってよき配偶者となる。最悪の奴隷状態から贖われた召使たちにとって、主人はよき主人となる。108. 1）おお、動物たちは、人間の迷妄に比して何と幸いであることか！ 彼らはあなた方のごとくに、無知のうちに放浪することもせず、真理を偽ることもしない。彼らのうちには追従者の族もおらず、魚は迷信に陥ることがなく、鳥は偶像崇拜をせず、ただ天のみを崇める。なぜなら彼らは、ロゴスに値するものとされていないため、神を想うことができないからである。2）であれば、あなた方は自らを、理性に与かっていない動物たちよりも理性に欠けた状態にしてきたことを恥づかしいと思わないのか、これほどにまで長い期間を、無神論のうちに消尽してきたとは。あなた方は子供、少年、青年、成人であった。だが有用な人物であったことは一度もない。3）いまからでも、老齡を仰ぐがよい。人生の日没にあたって、思慮を身につけるがよい。たとえ人生の終わりに面しても、神を知るがよい。あなたの人生の終焉が、救いの端緒を獲得できるように。あなたは迷信のうちに年老いてきた。若返って、敬神へと到達するがよい。神は無垢な子供たちを受け入れてくださるだろう。4）アテナイ人はソロンの法に、アルゴス人はフォロネウスの法に、そしてスパルタ人はリュクルゴスの法に従うがよい。だがあなたが神の許に記帳するなら、天があなたの祖国であり、神が立法者である。5）ではその法とはいかなるものであろうか。（殺すな、姦淫するな、子を墮落させるな。盗むな、偽証をするな、あなたの神である主を愛せよ）（出エジプト記20, 13-16；『十二使徒の遺訓』2, 2）。これらの法の成就、すなわち御言葉の法、聖なる法があり、それらは心そのものの中に刻み込まれているものである。〈あなたの隣人を、あなた自身のように愛せよ〉（レビ記19, 18）、そして〈あなたの頬を打つ者に、もう一方の頬をも差し出すがよい〉（ルカ6, 29）、さらに〈欲情を起こすな。浴場を抱いただけで、

あなたはもう姦淫を犯したのだ（マタイ 5, 28）。109. 1）人間にとって、必要のない事柄を望もうと欲しないということは、情欲の端緒を手に入れるということよりもどれほど優れていることだろうか。むしろあなた方は、救いの厳しさに辛抱して耐えようとはするな。それはちょうど、われわれが甘い食べ物、甘美さの点で優しいがゆえに優先させ喜ぶ一方、苦く感覚を悩ますものが、われわれを癒し健康にし、また苦痛を与える薬が、病者の異を鍛えるのとちょうど同じように、習慣は喜ばせくすぐる一方で、陥穽へと陥れる。それに対して、天へと導き昇る真理は、初めは〈厳しい〉が、〈善き教育者〉である。2）しかるにこの真理、この女性の館は神聖であり、老人の集会は賢慮に満ちている。近づきたいこともなく、捉えることが不可能でもない。むしろこの真理とは、われわれの内部に最も近く住んでいる住人である。それはいとも知恵に満ちたモーセがほのめかして言っているように、われわれの三つの部分に内在している。それは〈手と口と心〉である（申命記30, 14）。3）これこそ、すべてで三つの部分、すなわち思い、行い、言葉で満たされる真理についての、真正な信条である。だがこれを恐れることはない。また幾多の楽しい想像をして、あなたが智慧から引き離されるのはよくない。あなた自身で、自ら習慣のたわごとを超越するがよい、ちょうど子供たちも、成人すれば玩具を自ずから投げ棄てるのと同じように。110. 1）神の力は、凌駕しえない速さと親しみやすい寵愛でもって大地を照らし、万物を救いの種子で満たした。かの主、見栄えにおいて軽蔑され、業において崇拜される贖い主、救い主、慰め主、神的な御言葉、真に輝かしき神、万物の支配者に等しき方は、神的な配慮なくして。かくまで偉大な業をこれほどの短期間に果たすことはできなかったであろう。2）この方は神の子であり、〈ロゴスとして神のうちにあった〉（ヨハネ 1, 1）方である。彼が前もって告げ知らされたときも不信のうちには置かれず、人間の顔を取り肉の姿に創られて、人間性を救うという役割を帯びたときも、知られずにいるということはなかった。3）というのも彼は真正な闘技者であり、被造物としての協働闘技者だからである。彼は速やかにすべての人間に告知され、太陽よりも速く父の意思から身を起し、われわれに極めて迅速に神を照らし出して見せた。彼は教えと示しの内容を通じ、自らがどこから来たか、また誰であるかを提示し、伝令、仲介者、われわれの救い主たる御言葉、生命を与える平和な泉として、地の表すべてに注ぎ出した。彼を通していわば万物が、いまや善きことどもの海と化したのである。

## XI. ログスの肉のうちへの到来という、驚くべき恵み。

### § 111-117

111.1) もしあなたが望むなら、神の恵み深さについて最初から少し考えてみたまえ。最初の人間〔アダム〕は、楽園において自由に戯れていたとき、まだ神の子であった。しかしながら快樂に躓き（ヘビとは、腹に這い寄る快樂、世俗的で質料に転ずる悪の寓意である）、欲情（epithymia）に欺かれたとき、この子供は不従順のうちに成人し、父の言葉に従わず、神を恥とするようになった。快樂とは何と強力なのだろう。無垢のゆえに自由であった人間が、罪に縛られることになったのである。2) 主はこのような人間を、この縛めからもう一度解放しようと望み、肉をまとい（これは神の神秘 *mysterion* である）、ヘビを制して暴君（すなわち死）に従えた。さらにいとも信じがたいことには、快樂のうちにさまよい、破滅に囚われていた人間を、広げた手でもって、ふたたび自由な姿の者として示したのである。3) おお、驚くべき神秘よ。主は（十字架に）懸けられたが、人間は復活した。楽園から墮ちた者は、従順によるさらに大きな報奨、天国を享受している。112.1) かくして私にはこう思われる。すなわち、かのログスは、自らわれわれを天より遣わした。それはわれわれがもはや、人間的な学びのためにどこかへ、たとえばアテナイとかその他のギリシアとか、イオニアへ赴いて議論する必要があるようにするためであった。というのも、もしわれわれにとっての師が、万物を聖なる力でもって、すなわち創造、救い、慈悲、法制、預言、教えによって満たす方であるならば、いまやこの師はすべての事柄を教えるのであるから、すでにすべてがログスによって、アテナイまたギリシアと化しているのである。2) というのももう、あなたがたはクレタ王のミノスがゼウスの友であると記す詩的神話を信じなかったのだから、神の弟子となり、まったく真なる知恵を解き明かすわれわれにも随わないだろう。その知恵とは、愛智を究めた者たちだけがほのめかしたものである。実際、いわばすべての〔欠損あり〕。3) キリストは分かたれない。異邦人でもユダヤ人でもギリシア人でもなく、男性でも女性でもない。聖なる霊によって作り変えられた新しき神の人なのである。113.1) 他の勧告や警告であれば、煩わしくまた部分的な事柄に関わるのみである。たとえば「結婚すべきか」「政治にたずさわるべきか」「子は儲けるべきか」などである。だがいま、この勧告のみが普遍的なものであり、つまり人生全体に関わるものである。すなわち敬神は、あらゆる時宜、あらゆる状況にあって最上の目的、生命に向かうもの



なのである。われわれが永遠に生きるためには、これに従い、しかもこれのみに従って生きるべきである。しかるに愛智とは、年長者たちが言っているように、多時間にわたる忠告であり、智慧に対する永劫の愛を約束するものである。2) 〈主の掟は明らかで、眼を開く〉（詩篇18, 9）。キリストを帯びよ。視力を得よ。あなたのうちに光を備えよ。

「神であれ人であれ、あなたがよく知ることができるために」

（『イリアス』5, 128）

われわれを照らすロゴスは、「黄金や高価な石よりも甘美であり、蜜や香油よりも望ましい」（詩篇18, 11）。なぜなら、闇に打ちひしがれた精神を光り輝くものにし、光をもたらす靈魂の眼を研ぎ澄ます」（プラトン『ティマイオス』45B）ロゴスが、なぜ望ましくないことがあろうか？ 3) というのもまた「太陽がなければ、他の星辰にとって、すべては夜のように」（ヘラクレイトス、断片99）であるのと同様に、もしわれわれがロゴスを知ることなく、このロゴスによって照らされることがなければ、食用にされる鳥とまったく異なることがなく、闇にのたうち死に育まれることになる。4) 光を容れよう、神を容れるために。光を容れ、主の弟子となろう。「あなたの名を、わが兄弟に語ろう。集いのうちにあって、わたしはあなたを讃えよう」（『古代キリスト教における祈り』138頁）。あなたの父なる神を讃え、わたしに説明してほしい。あなたの説明が救いとなり、その歌がわたしを教え導くだろう。わたしは神を求めつつ、今に至るまで彷徨ってきた。5) 主よ、あなたがわたしを照らして下さったので、わたしはあなたを通して神を見出し、あなたから父を受け取り、あなたの譲りを受ける者となった。あなたは自らの兄弟を恥とはなさらない方であるから。

114. 1) だから、打ち棄てよう。真理の忘却を打ち棄てよう。霧のように視野を遮る無知と闇とを取り除き、真に〈在る方〉である神に眼差しを注ごう。この方に対し、まずこう賛美を献げよう、「おお、光よ」という声でもって。闇のうちに葬られ、死の陰の中に閉じ込められていたわれわれの上に、天から太陽よりも透明、この世の生命よりも甘美な光が輝いた。2) この光とは永遠の生命であり、この光に与かるものはすべて生きる。しかるに夜はこの光を恐れ、恐怖の故に身を隠し、主の日の前に退却する。万物は眠ることのない光となり、日没は日の出となった。これこそ〈新しき創造〉（ガラテヤ6, 15）として望まれていたものであった。3) なぜなら万物を踏みしめて〈正義の太陽〉（マラキ4, 2）は、〈自らの太陽をすべての人々の上に昇らせる〉（マタ

イ 5, 45) 父を模して人類を差別なく巡り、真理の露を滴らせるからである。4) この方が西を東へと移し、死を十字架に付けて生命へと変容させ、人間を滅びから救い上げて霊のうちに懸け、破滅を不滅へと植え代えて地を天に変貌させたのである。この神の農夫(キリスト)とは、「幸いを示し、民を」善き「業へと目覚めさせ」、真なる「生を思い起こさせて」(アラトス『星辰譜』6 ff.)、まさに偉大にして神的、取り除き得ぬ父の遺産をわれわれに賜り、天上的な教えによって人間を神化させ、「人々の思いに法を授け、その心に法を書き記す」(エレミヤ38, 33-34) 方である。5) 彼はどのような法を提示しているであろうか。〈小さき者から大きな者に至るまで、すべての者が神を知るように〉、神は言われる。〈そうすればわたしは彼らに対して憐れみ深くなり、彼らの過ちを思い起こすことはすまい〉(同上)。115. 1) 生命の法を受け容れよう、そして勧告する神に従おう。神が恵み深くあるように、神に学ぼう。感謝の褒賞を必要とすらない神に、従順を捧げよう。神のうちに住まわせていただくための、内在的な敬虔として。

「青銅の物の具に換え黄金のを、九牛の値のに百牛の値のものを贈ってやった」

(『イリアス』6, 236)。

わずかな信の大地を、かくまで大きな大地にし、彼はあなたにそれを耕すことを許される。水は飲み、また航行するように、大気は呼吸するように、火は仕えるように、世界は住むように。そこからさらに、あなたには天に住まいを立てることを認められたのだ。これほど大きく、またこれほどの価値ある業と恵みを、彼はわずかな信の代償として与えたのだ。2) 魔女を信じる人々が、護符や呪文を救済力があるとして受け入れるのに対して、あなた方は、かの天上的な存在、救いの御言葉を掴むことを望まないのか。そして神の呪文に信を置き、靈魂の病である情動から解放され、罪から引き離されることを望まないのか。罪とは永遠の死なのだ。3) あなた方は、まるでモグラのように、完全に歯抜けで盲目となり、食べるだけのために闇で暮らし、破滅へと邁進している。だが真理がある。真理は〈闇から光が輝く〉(Ⅱコリント 4, 6) と叫ぶ方である。4) だから、人間の中の隠された部分、心の中に、光を輝かせよ。そして知の光線をして、内面に隠されたものを照らさせ、人を輝かしめよ。人とは光の学び人、キリストの弟子・協働者である。とりわけ、もっとも敬されかつ恐れ多きものとして、敬虔で良き子に、善き父の名が知識として届くとき、父は優しさを教え、子には救いを語り、その照らしが叶う。5) しかるにすべてにおい

て父に従う者は富む。彼は神に随い、父に従い、彷徨ううちにも彼を知り、神を愛し、隣人を愛し、掟を満たし、褒賞を求め、約束を要求した者である。

116.1) さて神にとっては、人間の群れを救うことが永遠の課題である。善き神はそのために、善き羊飼いを遣わした。しかるにロゴスは、真理を簡素化して人間に救いの高みを示し、回心する者は救われ、聞き従わない者は裁かれるように定めた。これこそ正義の告知であり、聞き入れる者には福音であり、不従順な者には裁きなのである。2) 〈大音声の〉ラッパは、鳴り響いて兵士たちを集合させ、戦闘開始を告げる。だがキリストは、台地の端までその息吹を送る平和の調べとなって、自らの平和をもたらす兵士たちを集めるのではないか。おお人間よ、流血をもたらさぬ軍勢を、キリストは血と御言葉によって集結させ、天の王国を彼らに委ねた。3) ラッパとは、キリスト自身の福音である。彼が吹き、われらはそれを聴いた。平和裡に武装し、〈正義の胴着を身にまとい〉（エフェソ6, 14-17）、信仰の盾を手にとって救いの兜を被り、〈霊の剣、すなわち神の御言葉〉を磨ごうではないか。こうしてかの使徒は、われわれを整列させる。4) これらこそ、われらにとっての傷なき武具なのだ。これらで武装し、悪に向かって装備を整えよう。悪による火を放つ投げ槍を、御言葉によって浸された潤いの光線で消し止めよう。慈善の行為には感謝の祝福を返し、神に対しては神の言葉で返礼しよう。〈なぜなら、あなたが語るとき、御言葉も語る、〈見よ、わたしはここにいる〉と〉（イザヤ58, 9）。

117.1) おお、この力の聖にして幸いなることよ、神はこの力をもって人とともに住まわれた。諸存在の最善の本質の模倣者にして同時に奉仕者となるのが、最良にして最善であるのだ。というのも誰であれ、神を模倣することなど、神を敬虔に崇敬する以外には不可能であろう。また、崇敬したり敬ったりするのも、模倣する以外には不可能であろう。2) こうして、天上的かつ真に神的なる愛が人間にも生まれた。それは、靈魂のうちに心なる美が神の御言葉によって燃え立ち、輝きを放ちうるに至った際である。そして最大の事柄、すなわち救われることは、真にそう望むのとあいまって、いわば自由意志と生命とがくびきをとともにするときに生ずるのである。3) というのも実際、かの真理の勧告それ自体は、友の中でももっとも信頼の置ける人々になぞらえられ、最期の息を引き取るときまで傍らに留まり、靈魂の息吹と完全にまったく一致して、天に向けて旅立つ者の善き同伴者となるのである。わたしはあなたに、何を勧告しようか。わたしはあなたが救われることを渴望している。4) これをこそ、キリストは望んでいるのだ。彼は一言でもってあなたに生命を恵まれ

る。この方とは誰であるのか。簡潔に学びたまえ。それは真理の言葉、不滅性の言葉、人間を再生させ、真理すなわち救いの突端へと導き、破滅を駆逐し、死を追放し、人のうちに神を据えるために人のうちに神殿を築く方。5) 神殿を清めよ。快楽や放縦は、一日限りの花でもあるかのように、風と火に任せよ。その代わりに節制の実りを賢明に刈り取り、あなた自身を初物として神の前に立たせよ。それはあなたが神の業であるばかりでなく、神の恩寵ともなるためである。それらは双方とも、神の貴賓に相応しきものであり、神の国に適う姿となって神の国に値するものとされるに相応しきことだからである。

XII. ためらうことなく、キリストの呼びかけの許に馳せ参じ、  
信頼をもってこの救い主であるロゴスの導きに身を任せるべきこと。

### § 118-123

118.1) さあ、われわれは習性 (synetheia) から逃れよう。危険な岬、〔渦巻〕カリュプティスの威嚇、歌う〔怪鳥〕セイレネスだと見なして。習性は人を窒息させ、真理から離れさせ、生命から遠ざける。習性は罟、深淵、落とし穴、悪しき食欲である。

「あの煙と波から船を遠ざけよ」(『オデュッセイア』12, 219-20)。

2) さあ船員たちよ逃れよう、この波から逃れるのだ。この波は火を吐く。あの島には骨や屍が高々と積まれている(同12, 45)。かの島では姿麗しき遊女、快楽が次のように歌い、野卑な音楽を喜びとしている。

「さあこちらへ、その名も高きオデュッセウス、アカイア人の大いなる  
營れよ、汝の船を停めるがよい。もっと神々しい声を聴けるように」

(同12, 184-5)。

3) 船人よ、彼女はお前を讃え、お前を〈その名も高き者〉と呼ぶ。そしてこの遊女は、ギリシア人の營れである汝を自分のものにしようとする。彼女には屍の世話をさせておくがよい。おまえには天の風 (pneuma) が助けを差し伸べる。快楽を見過ぎて行け、快楽はおまえを欺く。

「甘言を語り、汝の納屋をうかがう淫らな女に、

おまえの心を欺かせぬように」(ヘスィオドス『農と暦』373-4)。

4) かの女の歌の傍らを避けて航行せよ、死を招くものゆえ。汝は、もし望みさえするなら、もう破滅に打ち勝ったのだ。木 (xylon) にしっかりと身を縛り付けるなら、汝はあらゆる破滅から解かれるだろう。汝の舵とりをつとめる

のは神のロゴスである。聖霊は天の港へと導いてくれるだろう。そこで汝はわたしの神を眺め、その聖なる神秘に与かることを許され、天に隠されたものを享受するであろう。それはわたしの許に備えられ、〈人の耳が聞いたことも、人の心に浮かんだこともなかった〉（Iコリント2,9）ものののだ。

- 5) 「実にわたしには、太陽が二つ、  
テバイの町も二つ見えるように思える」

（エウリピデス『バツカイ』918f.）。

偶像ゆえに狂気に取りつかれ、全くの無知に酔って語った者もある。だがわたしはこのように酔った者を哀れに思い、理性を失った者に対して節制による救済を勧めたい。なぜなら主も、死ではなく罪からの回心を歓迎するからである。119.1) 来たれ、おお狂える者よ、きづたの杖に依ることなく、薦の冠をかぶることもせず、腰帯を投げ棄て、鹿皮を投げうって思慮を保て。わたしはあなたに御言葉と、御言葉の神秘をあなたの像に倣って示そう。この山は神に愛された山だ。キタイロンのように悲劇に取り上げられるものではなく、真理のドラマにのぼるもの、汚れなき木々に陰ふかく覆われた山だ。そこで歓喜の声を上げるのは雷電に撃たれたセメレの姉妹たちや、マイナスたち、あるいは汚れを帯びた肉の宴の秘儀に与かった女たちではなく、神の娘たち、美しき雌羊たち、御言葉の崇高な秘跡を予言し、思慮あるコロスを構成する女性たちなのだ。2) コロスは義しき者たち、歌は万物の王への讃歌だ。娘たちは讃歌を奏で、天使たちは神の栄光を讃え、預言者は語り、ムシケの響きが遣わされ、ティアソスは追い払われ、招かれたものたちが父を迎えることを渴望して駆け集う。3) 来たれ、おお老人よ、わたしの許へ。汝もまた、テバイを後にして占いの術やバツコスの喧騒をなげうち、真理に向かって導かれよ。見よ、わたしは頼るべき木（xylon）をあなたに与える。急げテイレシアスよ、信じよ。汝は視力を得るであろう。キリストは太陽よりも明るい輝きを放つ。彼によって盲者の眼も開いたのだから。夜も汝からは遠ざかり、火も汝を恐れ、死は離れ去るであろう。おお老人よ、汝は天を眼にするであろう、テバイの人であったときには見えなかった天を。

120.1) おお真に聖なる秘義、おお紛うことなき光よ。わたしは天と神とを目にするために松明を掲げ、秘義に与って聖なるものとされ、主が大神官を勤め、秘義を授かった者を光で導いて封印し、信を得た者が世々にわたって守られるべく父に示す。これこそ、わたしの神秘の歓呼の声である。2) もしあなたが望むなら、あなたが秘義を授かるがよい。そうすれば、あなたは天使たち

とともに、生まれずして破滅を知らず、唯一神である方の周りで踊りを舞うがよい。そのときには、神のロゴスがわれらとともに讃歌を歌ってくれよう。この方こそ、永遠なる方イエスであり、唯一なる神その方にして父なる方の大祭司である。彼は人間たちのために祈り、人々には〈汝ら聞くがよい、幾多の民よ〉と命じる。だがむしろそれは、人々のなかで理性的、また異邦人にしてギリシア人たちを指す。わたしが言っているのは全人間の種族のことであり、わたしは父の意向によるその種族の創造者〈デミウルゴス〉なのだから。3) さあ、私のもとに来るがよい。一なる神と、神の一なるロゴスのために定められるために。そしてロゴスに与っていない諸生物に対し、ロゴスによって支配権をもつばかりでなく、死すべきものすべての中であなた方にだけ、不死性を享受することをわたしは叶えよう。というのも、わたしは望む、あなた方にこの恵みを分かち与えることを、わたしは望むのだ。完全なる恵み、不死性を付与することによって。さらにわたしはあなた方にロゴス・御言葉を授けよう。このロゴスとは、神に関する知なのだ。わたしはわが完全なるロゴスを恵もう。4) これはわたしであり、神の望み、共鳴、父の調和、子、キリスト、神の御言葉、主の右腕、万物の力、父の意向なのである。おお、かつては像であったものが、いまやすべてが合致する。わたしはあなた方を、根源的範型に向けて打ち立てることを望む。それはあなた方が私と似たものになるためである。5) わたしはあなた方に、信の香油を塗ろう。あなた方はこれにより、腐敗を打ち棄てるがよい。またわたしは、義のありのままの姿を示そう。これを通して、あなたがたは神に向かって登攀するがよい。〈疲れた者、重荷を負える者は、みなわたしの許に来るがよい。わたしがあなた方を休ませよう。わたしのくびきをあなた方も担うがよい。そしてわたしから学ぶがよい、わたしが柔和であり、心は謙遜であることを。そしてあなた方の靈魂に安らいを見出すがよい。わたしのくびきは負いやすく、わたしの重荷は軽いからである〉(マタイ 11, 28-30)。121. 1) 急ぎ、走ろう。おお、神に親しく神に似たロゴスの似像よ。急ぎ、走ろう、そして主のくびきを負い、不死性に専心し、人間にとっての麗しき御者、キリストを愛そう。彼はロバとその親を、同じくびきの下に繋いだ(マタイ 21, 1-7)。だがいまや、彼は人間の群れを同じくびきの下に置き、不死性に向けてその車を導く。彼は、自らほのめかしておいた事柄を明確に果たすため、神の許へと急ぐ。まずはエルサレムに向け、そしていまや天国に入るために。永遠の勝利をもたらす子こそ、父にとって最も麗しき光景である。2) さあわれわれは、美に向かって誉れを愛する者となり、神を愛す

る者となって、諸々の善のうちでも最大のもの、すなわち神と生命とを獲得しよう。御言葉とは助け手である。この御言葉に信頼し、銀や金に対する欲望や、栄誉を求める欲求が、真理の御言葉それ自体に対する渴望にまぎってわれわれに取り付かないようにしましょう。3) というのも、もしわれわれが、最も価値ある事柄を最小のものとなす一方で、無知と無学、無関心と偶像崇拜という明白な倨傲と、最たる不敬とをより価値あるものとして選び取るならば、それは神自身にとってまったく喜ばしくないことであろう。122.1) というのも哲学者たちの子らは、思慮なき者らが為す限りの事柄すべてに関して、それは邪悪かつ不敬であると考えているが、これは間違いとはいえない。また無知それ自体を一種の狂気として理解し、大半の人々は狂気に陥っているということを認めている。2) いまや、理性はこの二つ、すなわち思慮を有することと狂気に陥ることのどちらがより優れているかに関して、われわれに逡巡の余地を与えない。われわれは、全力で真理を確かに把握し、思慮をもって神に随い、すべてについて、そのあるがままの姿で神のものだと考えるべきである。さらにわれわれは、自らが彼の被造物の中で最も美しいものだとすることを自覚し、自分自身を神に委ね、主なる神を愛し、それを一生涯かけて為すべき業と考えるべきなのだ。3) もし〈友の財産は共通〉（プラトン『ファイドロス』279c）であり、かつ人間が神に愛しいものであるとすれば（というのも人は御言葉の介在を通して神に親しい存在である）、すべては人間のものとなるだろう。すべては神のものであり、すべては親しき双方、神と人とに共通なのだから。4) いまやわれわれは、〈神を畏れる者のみが富み、節度を有し、高貴で、それゆえに神の似姿であり像でもある〉と主張すべき時であろう。そして、キリスト・イエスによって〈節度を伴って義しく敬虔である〉（プラトン『テアイテトス』176b）者は、その限りにおいてすでに神に似た者ともなっている、とも主張しかつ信ずるべきであろう。

123.1) かくして預言者は、この恵みを隠すことなくこう述べている。「わたしは言う。〈あなたがたは神々であり、みな、いと高き方の子らである〉」（詩篇81,6）。というのも神はわれわれを形作り、われわれだけに対して〈その父〉と呼ばれることを望む。そのわれわれが〈信じない者〉であってはならない。というのもこのようなあり方こそ、キリストの従者たるわれわれの態度だからである。意図に従って、言葉がある。言葉に沿って、行為が成立する。業によって、生が形成される。キリストを知った人々の生涯は、すべて美しい。

123.2) わたしは以上で論述は十分だと考える。たとえこれ以上記したとし

ても、それは人間愛からであり、私の持てるものを神から注ぎだすだけであり、善の中で最良のもの、救いを勧めることのみである。というのも、それ自体が終わりというものをまったく持つことがない生命に関しては、その神秘を語ろうとする言葉は、終わることを望まないからである。だがあなた方にはまだ、裁きと恵みのどちらが有用であるか、それを選択するという最後の行為が残されている。わたしとしては、この二つのどちらがより優れているか、迷うには当たらないと考える。生命を破滅と並置することすら、許されることではあるまい。